

作業室用

茨城県教育財団文化財調査報告第188集

宮後遺跡 1

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

下 卷

平成 14 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第188集

みや うしろ
宮 後 遺 跡 1

やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う
埋 蔵 文 化 財 調 査 報 告 書 II

下 卷

平成 14 年 3 月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

目 次

—下 卷—

第3章 調査の成果

第3節 遺構と遺物

3 土坑

- (1) フラスコ状土坑 329
- (2) 土坑墓 562
- (3) 陥し穴 563
- (4) その他の土坑 566

4 遺物包含層 571

5 遺構外出土遺物 591

第4節 まとめ 608

1 縄文時代中期中葉の土器について 608

2 土坑墓から出土した大珠について 617

写真図版

第356号土坑 (第297図)

位置 調査1区の西部, B4h4区。

重複関係 本跡は第149・374号土坑と重複しているが, 新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.46m, 短径1.97mの楕円形で, 深さは55cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほぼ平坦である。

ピット 2か所。P1は中央部に位置し, 長径32cm, 短径28cmの楕円形で, 深さ54cmである。P2は西壁際に位置し, 長径63cm, 短径42cmの楕円形で, 深さ65cmである。P2の西壁はオーバーハングしている。

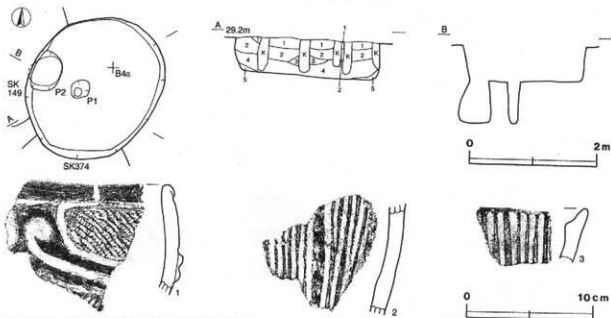
覆土 5層に分層され, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量, 第2層より色調が明るい
- 4 暗褐色 ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片38点が出土している。このうち, 縄文土器片3点を抽出・図示した。1・3は深鉢の口縁部片, 2は深鉢の胴部片で, いずれも覆土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曽利E I式期)と考えられる。



第297図 第356号土坑・出土遺物実測図

第356号土坑出土遺物観察表 (第297図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (8.6)	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。背に沈線を有する蓋密により文様を露出し, 文様の先端部は渦巻文を施している。地文はR上の早期縄文で, 横方向に施している。	石英・炭石 灰褐色 良好	T P1001 5%
2	深鉢 縄文土器	B (9.0)	胴部片。胴部はわずかに内彎する。押印文を有する隆帯を懸垂させ, 沈線を縦方向に施している。	石英・長石 明褐色 普通	T P1003 5%
3	深鉢 縄文土器	B (4.2)	口縁部片。口縁部はほぼ直立する。口唇部は受け口状を呈し, 内面に稜を有する。沈線を縦方向に施している。	石英・長石 黒褐色 良好	T P1002 5%

第358号土坑 (第298・299図)

位置 調査1区の西部, C4a区。

規模と平面形 開口部は長径1.24m, 短径1.14mの円形, 底面は長径2.26m, 短径2.11mの円形で, 深さは71cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 はほぼ平坦である。

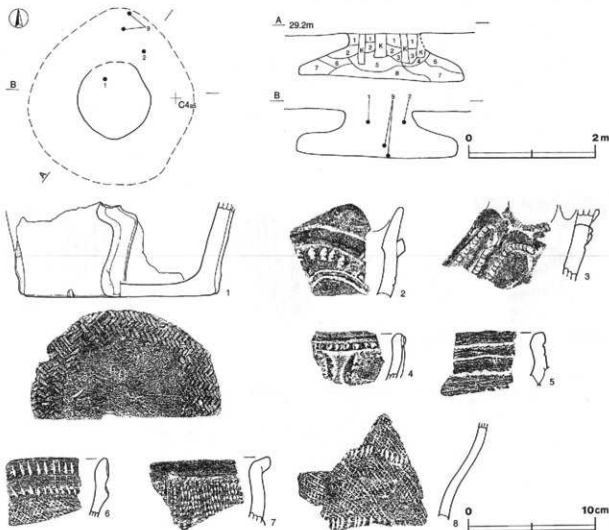
覆土 8層に分層され, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

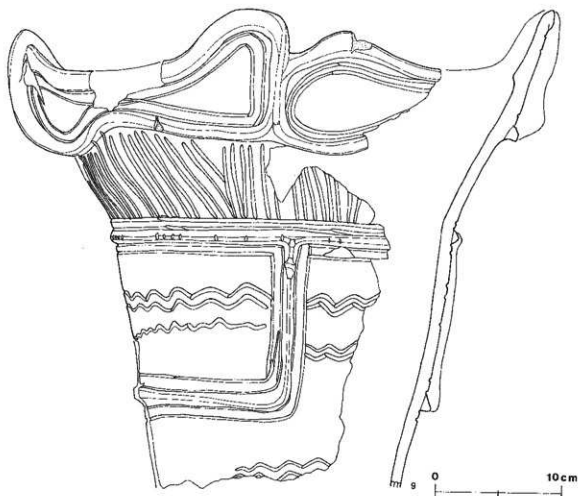
- | | | |
|---|-----|------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック微量 |
| 8 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |

遺物 縄文土器片83点が出土している。このうち9点を抽出・図示した。9は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で, 底面から出土している。1は胴部から底部にかけての破片, 2は口縁部片で, いずれも覆土上層から出土している。3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片, 4～7は深鉢の口縁部片, 8は深鉢の頸部片で, いずれも覆土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第298図 第358号土坑・出土遺物実測図



第299図 第358号土坑出土遺物実測図

第358号土坑出土遺物観察表 (第298・299図)

図版番号	器種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (8.0) C 14.8	胴部から底部にかけての破片。胴部は断片的に立ち上がる。4単位に隆帯を整頓させている。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P1001B 5% P1001Aと同一体 底部ニ硝化痕
2	深鉢 縄文土器	B (7.1)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部はわずかに外傾し、内面に稜を有する。隆帯により文様を描出し、隆帯に沿ってクシ状11目で刺突文を施し、文様内に平截竹管により平行沈線文を施している。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 普通	TP1004 5%
3	深鉢 縄文土器	B (5.8)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部はわずかに外傾し、波痕部直下に孔を有する。断面三角形の隆帯により文様を描出し、隆帯に沿って斜線沈線文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP1005 5%
4	深鉢 縄文土器	B (3.6)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口縁部直下にキザミを有する隆帯を巡らしている。隆帯により文様を描出し、隆帯に沿って平截竹管による数列の角押文を施している。	長石・石英 黒褐色 良好	TP1006 5%
5	深鉢 縄文土器	B (4.2)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口縁部直下には輪組み痕が明瞭に残り、そこに隆帯を巡らしていた痕跡がある。隆帯に沿って角押文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP1007 5%
6	深鉢 縄文土器	B (4.7)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口縁部に幅広で断面三角形の隆帯を巡らし、その上部にキザミ目列を巡らしている。隆帯の下部には振り戻しのある異条縄文を施している。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 良好	TP1008 5%
7	深鉢 縄文土器	B (5.2)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口縁部直下に隆帯を巡らし、クシ状11目で刺突文を施している。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 良好	TP1009 5%
8	深鉢 縄文土器	B (7.5)	口縁部片。頸部は閉きながら内傾する。振り戻しのある異条縄文を施文とし、キザミ目列を巡らしている。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 良好	TP1010 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色高・焼成	備考
9	深鉢 縄文土器	A [41.6] B (37.4)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は真鍮的に外傾して立ち上がり、頸部でわずかに屈曲し、口縁部は外傾する。4単位の波状口縁を呈し、波頂部は左右不対称の双翼となる。口縁部は波頂部から垂下する隆帯を起点に区画文を形成し、隆帯に沿って半截竹管による平行沈線文を施している。胴部には半截竹管による平行沈線文を縦方向に施している。頸部と胴部の境はキザミを有する隆帯で区画している。胴部は深帯に沿って文様を抽出し、半截竹管による波状文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1001A 40% P L32

第362号土坑 (第300~302図)

位置 調査1区の北部, B4d9区。

規模と平面形 開口部は長径1.52m, 短径1.26mの楕円形, 底面は長径2.48m, 短径2.28mの円形で, 深さは92cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

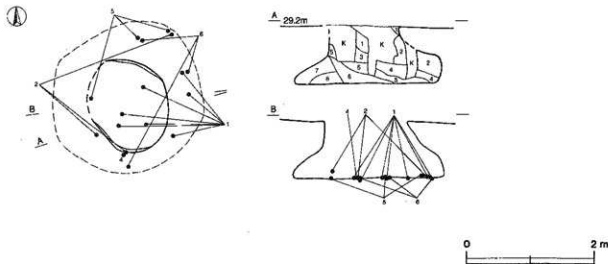
覆土 8層に分層され, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

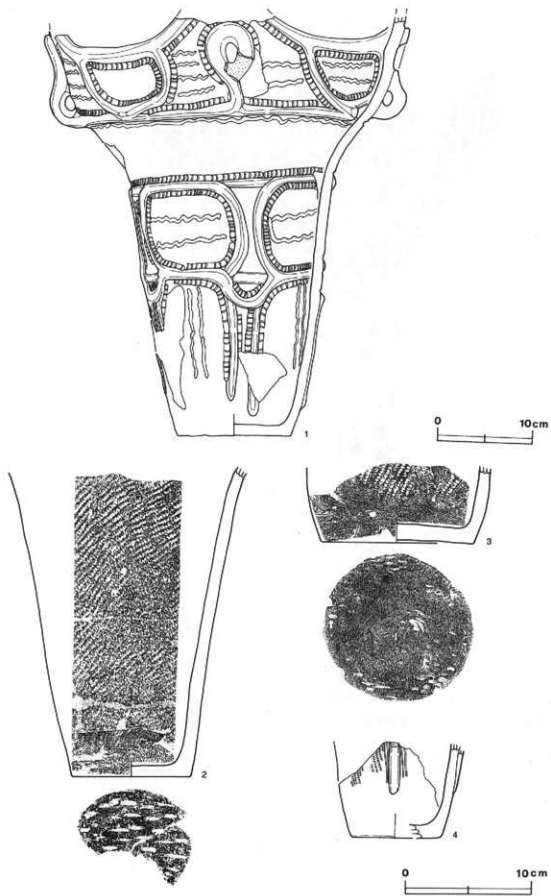
- 1 施時褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量, 鹿沼パミス小ブロック微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 6 黒色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量, 鹿沼パミス粒子微量
- 7 黒褐色 炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量, ローム粒子・炭化物微量
- 8 黒褐色 炭化物・炭化粒子少量, ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量

遺物 縄文土器片105点が廃棄されたような状態で, 主に底面から覆土下層にかけて出土している。このうち, 縄文土器6点を抽出・図示した。1と5は4単位の波状口縁を呈する深鉢, 2と4は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 6は4単位の波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で, いずれも底面から出土している。3は深鉢の胴部から底部にかけての破片で, 覆土から出土している。

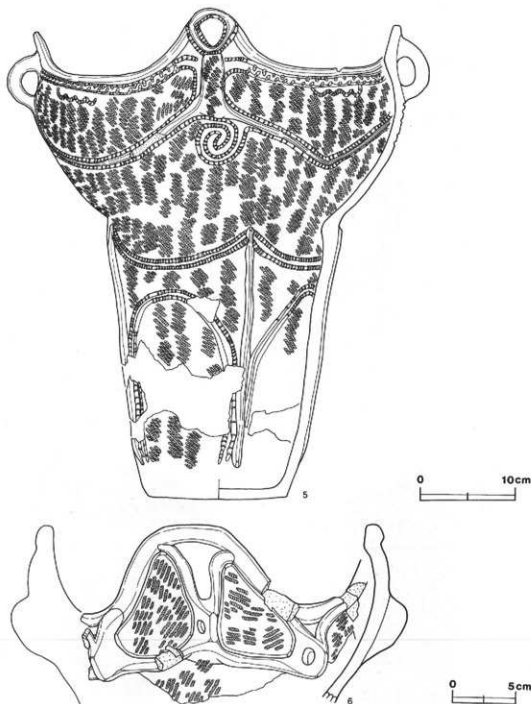
所見 時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第300図 第362号土坑実測図



第301图 第362号土坑出土遗物实测图(1)



第302図 第362号土坑出土遺物実測図(2)

第362号土坑出土遺物観察表(第301・302図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色画・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [37.0] B (44.2) C 12.0	口縁部一部欠損。胴部はわずかに外傾して直線的に立ち上がり、頸部で屈折し、口縁部は開きながら内彎する。4単位の波状口縁を呈するが、波頂部の形態は欠損しているため不明である。波頂部直下には横位の橈状把手が付く。口縁部は隆帯により文様を描出し、隆帯に沿って爪形文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色(上半) 明褐色(下半) 良好	P1003 80% P L 32
2	深鉢 縄文土器	B (24.3) C 9.5	胴部から底部にかけての破片。胴部はわずかに外傾して直線的に立ち上がる。R Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・砂粒 にふい褐色 普通	P1004 50% 底部に新代痕

調査番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴		胎土・色調・焼成	備 考
3	深 鉢 縄文土器	B (5.9) C 12.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。R Lの単純縄文を縦位に施している。		長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P1007 5% 底部に現代灰
4	深 鉢 縄文土器	B (7.6) C 7.1	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。胴 部は垂下する降帯で器面を縦位に4分割し、降帯に沿って半環 状による平行直線文を施している。Lの無節縄文を縦方向に 施している。		長石・石英・雲母 にふい赤褐色 普通	P1008 5%
5	深 鉢 縄文土器	A 44.9 B 52.1 C 14.6	ほぼ完形。胴部はわずかに外傾して直線的に立ち上がり、腹部 で屈折し、口縁部は傾きながら内湾する。4単位の波状口縁を 呈し、その内の1単位に隆帯による門文を施している。液流部 直下には1単位の横状把手を有し口縁部直下に交互斜突による 溝状の字状文を施している。口縁部には結節沈線文で文様 を抽出している。胴部は垂下する降帯で器面を縦位に4分割し、 結節沈線文で上下に対向する弧線文を施している。地文はL R の単純縄文で、縦方向に施している。		長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	P1002 95% P L32
6	深 鉢 縄文土器	A [26.5] B (14.2)	口縁部から胴部にかけての破片。4単位の波状口縁を呈する。口縁 部は隆帯により文様を抽出し、液流部直下と液流部直下における隆帯 の交点には横状の突刺を付けている。降帯に沿って沈線を施し、口 縁部と胴部の地文にはR Lの単純縄文を施している。		長石・石英・雲母 にふい赤褐色 良好	P1005 15%

第364号土坑 (第303・304区)

位置 調査1区の北西部, B 4g6区。

重複関係 本跡は第363号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。本跡と第304・315・316・354号土坑は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 重複しているため残存している部分は少ないが、長径1.74m、短径1.64mの円形と推定され、深さは26cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほほ平坦である。

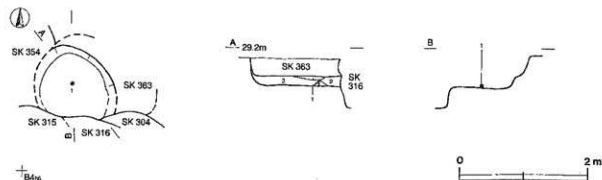
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

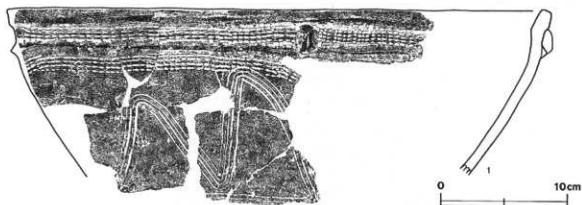
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量、部1層より色調が明るい
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子微量

遺物 縄文土器片44点が出土している。このうち、縄文土器片1点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で、底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第303図 第364号土坑実測図



第304図 第364号土坑出土遺物実測図

第364号土坑出土遺物観察表 (第304図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	深鉢 銅文土器	A [42.9] B (13.2)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は開きながら内彎する。口縁部直下と口縁部に隆帯を築らし、隆帯間に短長の小突起を付けている。口縁部には隆帯に沿ってクシ状工具による刺突文を横方向に、頸部にはクシ状工具による条線文を施している。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 良好	P1009 10%

第366号土坑 (第305・306図)

位置 調査1区の南西部、C4d4区。

確認状況 トレンチャーによる擾乱が著しく、開口部付近の残存状況は不良である。

規模と平面形 開口部は長径1.16m、短径0.98mのはほぼ円形と推定され、底面は長径2.76m、短径2.42mのはほぼ円形で、深さは96cmである。

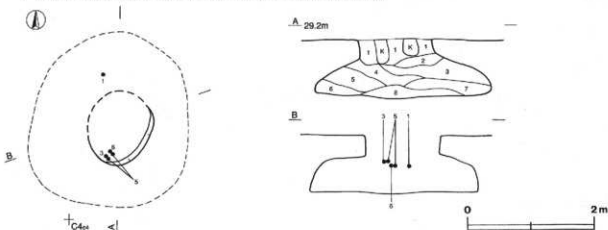
壁 フラスコ状を呈する。くびれ部は明瞭な稜があり、強くオーバーハンクしている。

底 はほぼ平坦である。

覆土 8層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

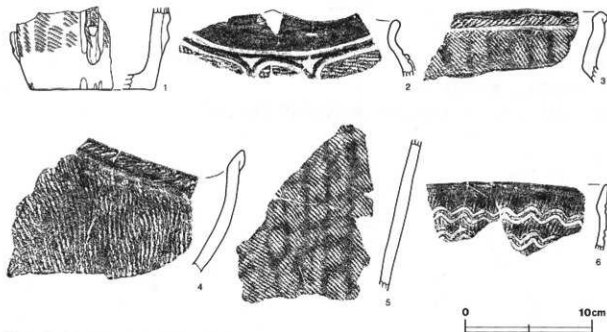
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック・炭化物微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 炭化物・炭化粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子微量



第305図 第366号土坑実測図

遺物 縄文土器片194点が出土している。このうち、縄文土器片6点を抽出・図示した。1は深鉢の胴部から底部にかけての破片、3は壺の口縁部片、5は深鉢の胴部片、6は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土中層から出土している。2は壺の口縁部片、4は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期)と考えられる。



第306図 第366号土坑出土遺物実測図

第366号土坑出土遺物観察表(第306図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B(6.5) C(9.9)	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部は垂下する隆帯で器面を縦位に4分割し、隆帯に沿って沈線文を施している。Lの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P1011 5%
2	壺 縄文土器	B(4.6)	口縁部片。口縁部は内傾し、口唇部直下で外反する。波状口縁を呈し、口唇部外面は無文帯となる。口縁部は細い隆帯に2つ文様を描出し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。地文としてRLの半節縄文を施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	TP1014 5%
3	壺 縄文土器	B(5.6)	口縁部片。頸部はくびれて傾曲し、口縁部は外傾する。Lの無節縄文を口唇部直下には横方向に、それ以下には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	TP1012 5%
4	深鉢 縄文土器	B(9.6)	口縁部片。口縁部は内傾する。Lの無節縄文を口唇部外面には横方向に、それ以下には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP1011 5%
5	深鉢 縄文土器	B(12.2)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒色 良好	TP1015 5%
6	深鉢 縄文土器	B(5.4)	口縁部片。口縁部はほぼ直立し、内面に稜を有する。半截竹筥による波状の平行沈線文を呈らしている。地文はRの無節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗褐色 普通	TP1013 5%

第368号土坑(第307・308図)

位置 調査1区の西部、C4d3区。

重複関係 本跡と第367号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は長径1.60m、短径1.10mの楕円形、底面は長径1.66m、短径1.10mの楕円形で、深さは24cmである。

壁 一部内傾する。

底 ほぼ平坦である。

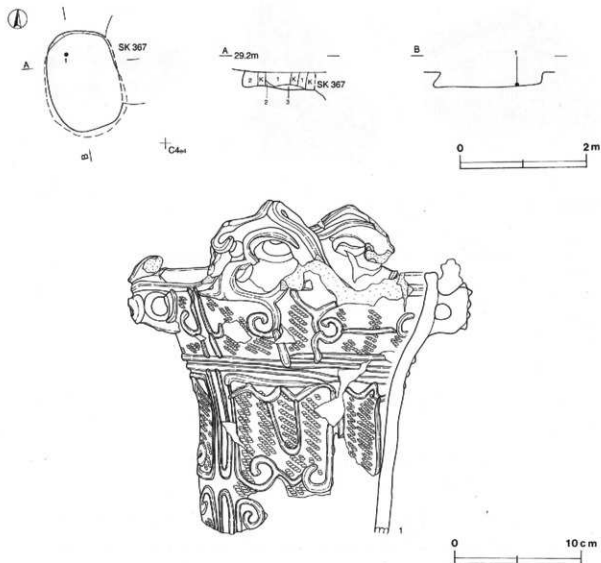
覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

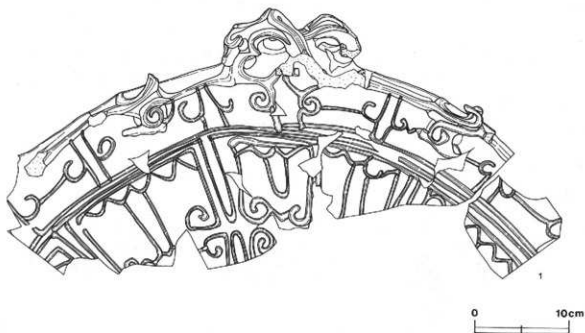
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量

遺物 縄文土器片13点が出土している。このうち、縄文土器1点を抽出・図示した。1は口縁部の一部と底部が欠損する深鉢で、覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ・Ⅳ式併行期)と考えられる。



第307図 第368号土坑・出土遺物実測図



第308図 第368号出土遺物実測図

第368号土坑出土遺物観察表 (第307・308図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 21.2 B (26.4)	底部及び口縁部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。孔を有する立体的な把手を有し、口縁部以下には段帯に約文様を抽出している。地文はLRの半鉛縄文で縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 褐色 良好	P1012 70% P L32

第370号土坑 (第309・310図)

位置 調査1区の北部，B 4 g0区。

重複関係 本跡と第347号土坑は重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は重複及び崩落しているため，長径1.10m，短径1.05mの円形と推定され，底面は長径2.12m，短径2.04mの円形である。深さは104cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P 1は北壁寄りに位置し，長径36cm，短径34cmの円形で，深さ24cmである。

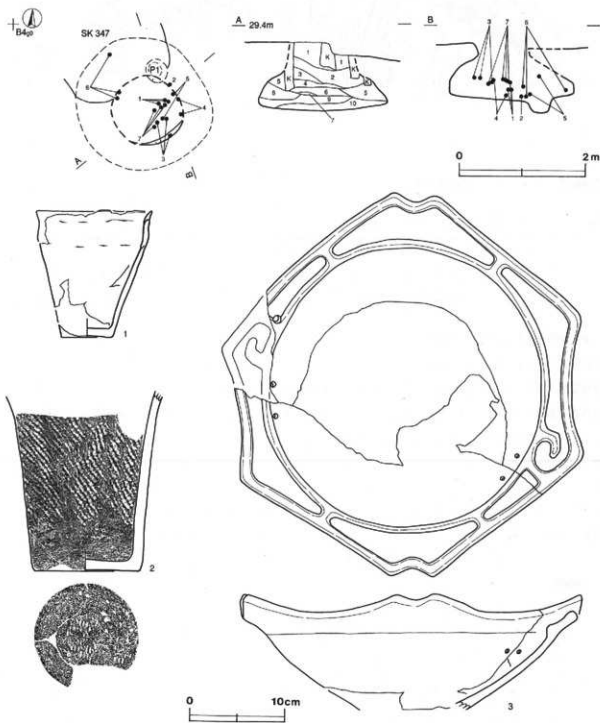
覆土 10層に分層され，レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。特に，覆土中層(第6・7層)は炭化粒子を多く含んでおり，多量の遺物が出土している。

土層解説

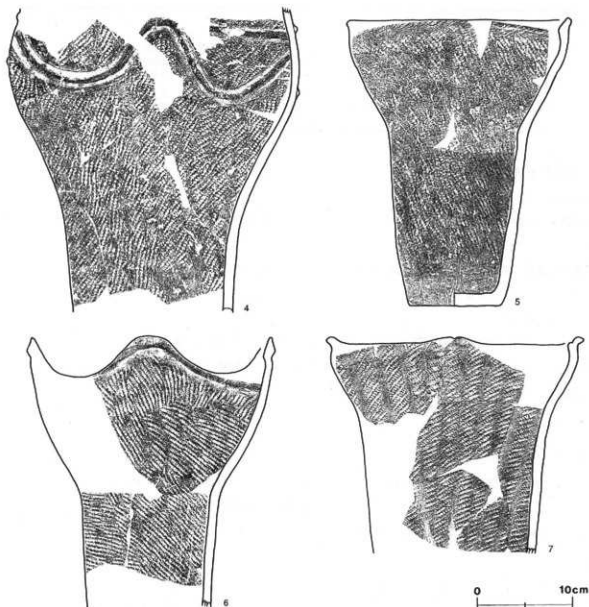
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 鹿沼バミス粒子少量，ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 炭化粒子少量，鹿沼バミス粒子微量
- 7 黒褐色 炭化粒子中量，炭化物少量
- 8 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片264点が廃棄されたような状態で主に覆土中層から下層にかけて出土している。このうち、7点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から底部にかけての破片、2は深鉢の胴部から底部にかけての破片、4は口縁部と底部が欠損する深鉢、5はほぼ完形の深鉢で、いずれも覆土下層から出土している。3は口縁部から胴部の一部が欠損する浅鉢、6・7は4単位の波状口縁を呈し、口縁部と底部の一部が欠損する深鉢で、いずれも覆土中層から出土している。

所見 出土した土器は、覆土中層から下層の堆積時に一括廃棄されたものと思われる。時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第309図 第370号土坑・出土遺物実測図



第310図 第370号土坑出土土遺物実測図

第370号土坑出土土遺物観察表 (第309・310図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [12.3] B (13.3) C 5.7	口縁部から底部にかけての破片。胴部は直線的にわずかに開きながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。無文で、器面に輪痕み痕が認められる。	長石・石英・雲母 明褐色 普通	P 1019 40% P L.33
2	深鉢 縄文土器	B (19.0) C 11.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 1017 30% 底部に銅代灰
3	浅鉢 縄文土器	A [35.0] B (12.2)	口縁部の一部及び底部欠損。6単位の波状口縁を呈し、その内2単位の波頂部は反頭となる。口縁部内面には隆帯により区画文を施し、6単位の内2単位の波頂部直下には渦巻文を施している。	石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 1018 70% P L.33 3ヶ所に対する補修孔
4	深鉢 縄文土器	B (32.4)	口縁部及び底部欠損。胴部はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。口縁部の上部に隆帯を巡らし、その下部に隆帯による大振り波状文を施している。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1013 60% P L.32 外面スス付着
5	深鉢 縄文土器	A 23.9 B 30.4 C 10.1	ほぼ完形。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は開きながら内彎する。口縁部内面に稜を有する。Lの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 (胴部上半) にぶい赤褐色 (下半) 良好	P 1014 90% P L.33 胴部上半スス付着

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	深鉢 縄文土器	A [25.2] B (28.6)	口縁部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は開きながら内彎する。4単位の波状口縁を呈し、口唇部の内・外面に稜を有する。口唇部外面は無文帯とし、LRの単筋縄文を1.胴部には斜方向に、頸部以下は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(胴部上半) 褐色(胴部下半) 普通	P1015 70% P L 33 外面スス付着
7	深鉢 縄文土器	A [27.4] B (23.0)	口縁部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は開きながら内彎する。4単位の波状口縁を呈し、波頂部は前方に突出させている。RLの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1016 40% P L 33 外面スス付着

第371号土坑 (第311・312図)

位置 調査1区の北西部、B4区。

重複関係 本跡が第372号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。本跡と第240号土坑は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.74m、短径1.72mの円形で、深さは54cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほほ平坦である。

ピット 1か所。P1は南西壁際に位置し、径50cmの円形で、深さ60cmである。

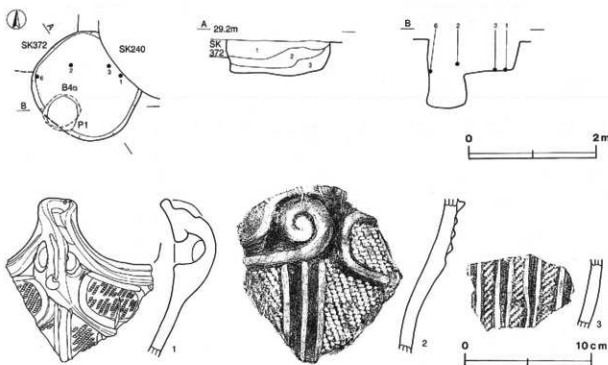
覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

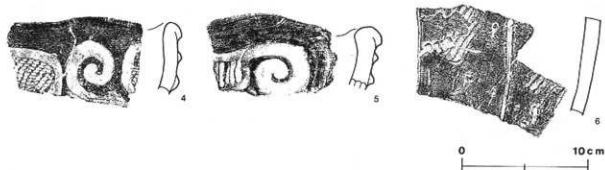
- 1 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子微量

遺物 縄文土器片74点が出土している。このうち、縄文土器片6点を抽出・図示した。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2は深鉢の口縁部付近から胴部にかけての破片、3・6は深鉢の胴部片で、いずれも覆土下層から出土している。4・5は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第311図 第371号土坑・出土遺物実測図



第312図 第371号土坑出土遺物実測図

第371号土坑出土遺物観察表 (第311・312図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B(12.6)	波状口縁を呈する口縁部から胴部にかけての破片。波頂部直下に縦線状把手を有し、頂部に隆帯により渦巻文を施している。口縁部には隆帯による楕円区画文を施している。胴部には沈線による懸垂文を施し、懸垂文間を磨り消している。地文としてR・Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 良好	P1020 5%
2	深鉢 縄文土器	B(12.0)	口縁部付近から胴部にかけての破片。胴部は外反し、口縁部は閉きながら内彎する。口縁部は隆帯により渦巻文と楕円区画文を施している。頂部には渦巻文の下部に3本一組の沈線を懸垂させ、懸垂文間を磨り消している。地文としてL・Rの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 普通	T P1016 5%
3	深鉢 縄文土器	B(5.0)	胴部片。胴部はわずかに閉きながら内彎する。沈線による懸垂文を施し、懸垂文間を磨り消している。地文としてR・Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 に灰い褐色 普通	T P1020 5%
4	深鉢 縄文土器	B(5.7)	口縁部片。口縁部は閉きながら内彎する。口縁部は隆帯により渦巻文と楕円区画文を施している。地文としてL・Rの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 普通	T P1017 5%
5	深鉢 縄文土器	B(5.0)	口縁部片。口縁部は小波状口縁を呈し、閉きながら内彎する。口縁部は隆帯により渦巻文と楕円区画文を施している。区画文内には縦方向の沈線を欠損している。	長石・石英 に灰い褐色 普通	T P1018 5%
6	深鉢 縄文土器	B(7.8)	胴部片。胴部はわずかに閉きながら内彎する。地文としての無節縄文を縦方向に施し、沈線による懸垂文を施している。	長石・石英 に灰い褐色 普通	T P1019 5%

第374号土坑 (第313図)

位置 調査1区の西部、B4h4区。

重複関係 本跡と第155・356号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.46m、短径2.14mの楕円形で、深さは58cmである。

壁 ほぼ直立する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 4か所。P1は中央部に位置し、長径26cm、短径24cmの円形で、深さ42cmである。P2は南壁際に位置し、長径48cm、短径38cmの楕円形で、深さ67cmである。P3とP4は重複し、北壁際に位置する。P3は長径41cm、短径40cmの円形で、深さ36cmである。P4は長径34cm、短径28cmの楕円形で、深さ36cmである。

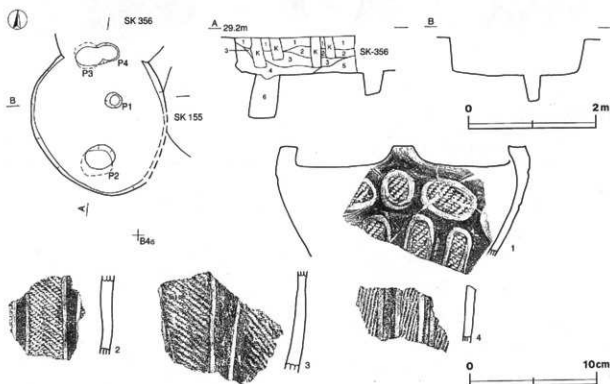
覆土 6層に分層され、第6層はP2の覆土である。第5層は褐色を呈し、多量のローム粒子を含んでいることから、人為堆積の可能性がある。第1～4層はレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、塵沼バミス粒子微量

遺物 縄文土器片72点が出土している。このうち、4点を抽出・図示した。1は突起を有する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2～4は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第313図 第374号土坑・出土遺物実測図

第374号土坑出土遺物観察表 (第313図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [19.2] B (8.6)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部がくびれ、口縁部は突きながら内彎する。波状口縁を呈し、波頂部は肥厚する。口縁部には波頂部下に沈線によるほぼ円形の区画文を施し、波底部下には楕円形の区画文を施している。胴部には進目字状の沈線文を施している。地文はR Lの単筋縄文である。	長石・石英 にふい・赤褐色 良好	P1021 5%
2	深鉢 縄文土器	B (6.1)	胴部片。胴部はわずかに内彎する。胴部には沈線による懸垂文を施し、懸垂文間を磨り消している。地文としてL Rの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にふい・褐色 普通	TP1021 5%
3	深鉢 縄文土器	B (8.0)	胴部片。胴部はわずかに内彎する。胴部には沈線による懸垂文を施し、懸垂文間を磨り消している。地文としてL Rの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にふい・褐色 普通	TP1023 5%
4	深鉢 縄文土器	B (4.6)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には沈線による懸垂文を施し、懸垂文間を磨り消している。地文として懸垂文を施している。	長石・石英 にふい・褐色 普通	TP1022 5%

第375号土坑 (第314・315図)

位置 調査1区の西部、C4 a6区。

重複関係 本跡と第311号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部の一部が崩落しているため、開口部は長径1.46m、短径1.34mの円形と推定され、底面は径1.62mの円形である。深さは23cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 2か所。P1は南壁際に位置し、径31cmの円形で、深さ13cmである。P2は南壁際に位置し、長径48cm、短径42cmの楕円形で、深さ28cmである。

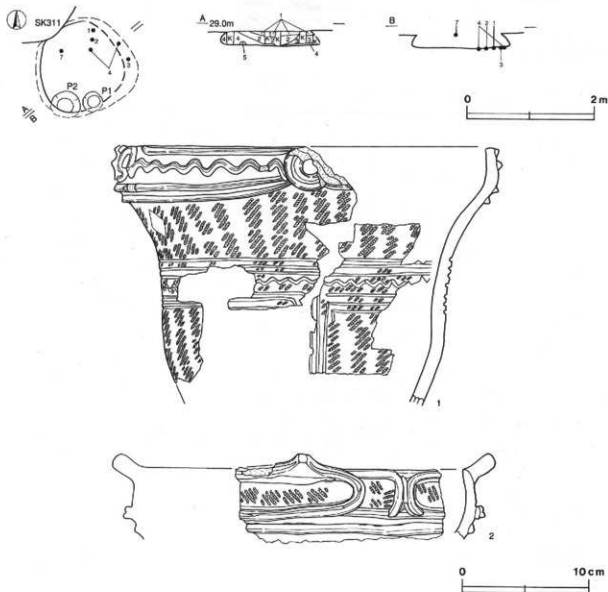
覆土 5層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

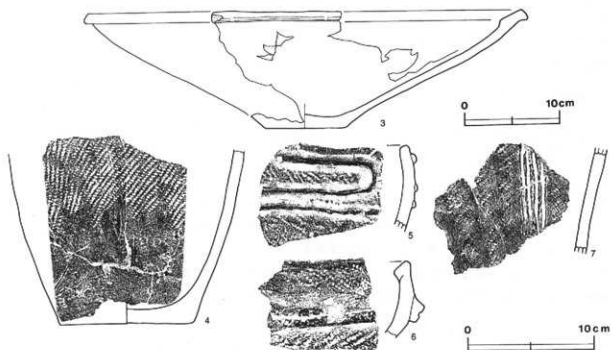
- 1 黒褐色 炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム粒子少量

遺物 縄文土器片108点が出土している。このうち、縄文土器片7点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2は突起を有する深鉢の口縁部片、3は浅鉢の口縁部から底部にかけての破片、4は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、いずれも底面から出土している。7は深鉢の胴部片で、覆土上層から出土している。5・6は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第314図 第375号土坑・出土遺物実測図



第315図 第375号土坑出土遺物実測図

第375号土坑出土遺物観察表 (第314・315図)

図版番号	部 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A [29.0] B (20.5)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部で外反し、口縁部はほぼ直立する。口縁部には背に沈線を有する隆帯により円文を施し、その円文を起点に口唇部直下及び口縁部下部に隆帯を巡らし口縁部文様帯を形成している。文様帯内には隆帯による波状文を巡らし、胴部と胴部の境には3条の沈線文と沈線による波状文を巡らし、胴部には垂下する4条一組の沈線で器面を縦位に4分断している。地文としてRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1022 30% 外面スス付着
2	深鉢 縄文土器	A [29.0] B (6.7)	口縁部片。口縁部は内彎し、口唇部に突起が付けられている。口縁部と頸部の境に隆帯を巡らし、突起を起点に沈線を有する隆帯を巡らしている。口縁部には隆帯によるX字状文を施している。地文としてRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 良好	P 1024 5%
3	浅鉢 縄文土器	A [45.6] B 12.4 C 8.6	口縁部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がり、口縁部内面に稜を有し、口唇部外面が突出する。無文。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P 1026 25%
4	深鉢 縄文土器	B (13.5) C 10.6	胴部から底部にかけての破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がる。RLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P 1025 20%
5	深鉢 縄文土器	B (6.8)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は固きながらわずかに内彎する。口縁部と頸部の境に隆帯を巡らし、口縁部は隆帯により文様を挿出している。地文としてLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗褐色 普通	T P 1024 5%
6	深鉢 縄文土器	B (6.0)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は内彎し、口縁部内面に稜を有する。口縁部と頸部の境に沈線を有する隆帯を巡らしている。地文はRLの単節縄文で、口縁部は横方向に、胴部には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1025 5%
7	深鉢 縄文土器	B (8.4)	胴部片。胴部はわずかに外傾して立ち上がる。胴部には4条一組の沈線を垂下させている。地文としてRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P 1026 5% P1022と同一個体

第377号土坑 (第316図)

位置 調査1区の南西部、C 4 d7区。

重複関係 本跡と第447号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は長径1.79m、短径1.74mの円形、底面は長径1.78m、短径1.75mの円形で、深さは54cmである。

壁 ほぼ直立する。東壁と西壁の一部は内傾して立ち上がる。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は西壁寄りに位置し、長径24cm、短径21cmの楕円形で、深さ11cmである。

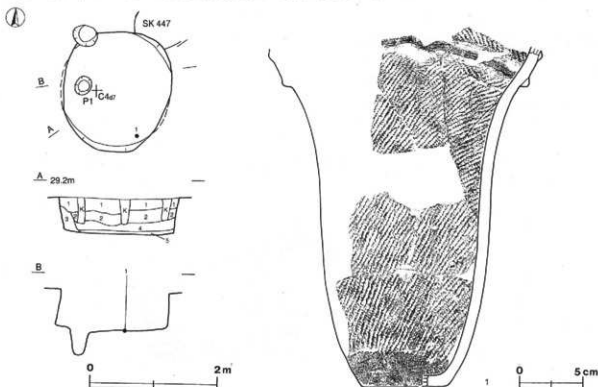
覆土 5層に分層され、全層にわたりロームブロックを多く含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭素バミス粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 縄文土器片60点が出土している。このうち、縄文土器片1点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部付近から底部にかけての破片で、逆位の状態で覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I 式期)と考えられる。



第316図 第377号土坑・出土遺物実測図

第377号土坑出土遺物観察表 (第316図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (26.6) C 6.8	口縁部付近から底部にかけての破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がり、腹部で外反し、口縁部付近はわずかに内彎する。口縁部と腹部の境に隆帯を高め、口縁部は隆帯により文様を描出している。地文はRLの早節縄文で、口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒色(上手) にぶい赤褐色(下手) 普通	P 1027 40% 外面上半ス付着

第378号土坑 (第317・318図)

位置 調査1区の中央部、B 4 i9区。

規模と平面形 開口部は長径1.52m、短径1.30mの楕円形、底面は長径2.10m、短径1.94mのほぼ円形で、深さ

は100cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

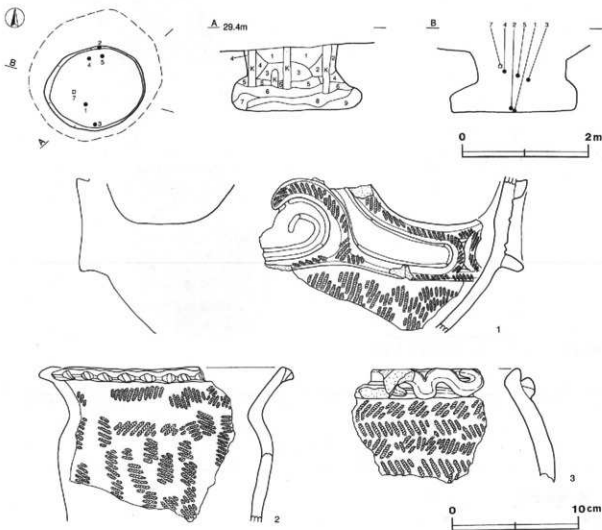
覆土 9層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

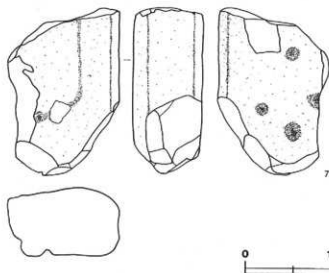
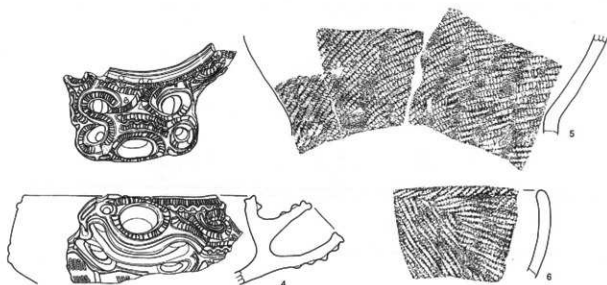
- | | | |
|---|-----|----------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック微量 |
| 3 | 褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子微量 |
| 4 | 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | 炭化粒子少量、炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量 |
| 8 | 暗褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス粒子中量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 9 | 暗褐色 | 炭化粒子少量、ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量 |

遺物 縄文土器片158点、石皿片1点が出土している。このうち、縄文土器片6点、石皿片1点を抽出・図示した。1は液状口縁を呈する深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、2は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、覆土下層(第9層)から出土している。3は深鉢の口縁部片、4は立体的な把手を有する台付鉢の口縁部片、5は深鉢の頸部から胴部にかけての破片、7は石皿片で、いずれも覆土中層から出土している。6は深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第317図 第378号土坑・出土遺物実測図



第318図 第378号土坑出土遺物実測図

第378号土坑出土遺物観察表 (第317・318図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [33.0] B (12.2)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部は開きながら内彎する。波頂部は欠損するが、4単位の大波状口縁を呈している。口唇部直下及び口縁部と頸部の境に隆帯を巡らし、波頂部下には渦巻文、波底部下にはX字状文を施している。隆帯に沿って沈線文を施し、隆帯上と頸部にはR Lの単筋縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1028 5% 外面スス付着
2	深鉢 縄文土器	A 18.2 B (12.3)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部はわずかに外傾して立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。口唇部直下には押圧文を有する隆帯を巡らしている。地文はL Rの単筋縄文で、口縁部付近は横方向に、頸部は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1029 10%
3	深鉢 縄文土器	B (8.8)	口縁部片。口縁部は内傾する。口唇部の断面形は三角形で、内面に稜を有する。口唇部直下に隆帯を巡らし、口縁部には隆帯による扇状文を施している。地文はR Lの単筋縄文を施文方向をかえることにより、羽状縄文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1030 5%

図版番号	器種	計測値(cm)		器形及び文様の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
		A	B			
4	台付鉢 縄文土器	A (18.1)	B (7.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、胴形で屈曲し、口縁部は内傾する。口縁部に環状の突起が付加された円筒状の立体的な把手を有する。口唇部裏ト及び胴部には交互刺突による連続の字状文を巡らしている。口縁部には微採番により文様を描出し、胴部帯に沿って結節止縷文を施している。胴部はR Lの単節縷文を横方向に施している。	灰石・石英 灰褐色 良好	P1032 10% P L33
5	深鉢 縄文土器	B (8.0)		胴部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部は外傾する。R Lの単節縷文を縦方向に施している。	灰石・石英・炭母 黒褐色 普通	P1033 10%
6	深鉢 縄文土器	B (7.0)		口縁部片。口縁部は傾きながらわずかに内傾する。地文はL Rの単節縷文で、口唇部外面は横位に、胴部は縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1027 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
7	石皿	(17.7)	(12.0)	7.3	(2051.3)	砂岩	自然石を素焼とし、表面は凹凸にしている	Q1001

第383号土坑 (第319・320図)

位置 調査1区の西部、C4a7区。

重複関係 本跡は第382号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。本跡と第19号住居跡の新旧関係は、出土土器から本跡が古い。

規模と平面形 開口部は長径1.30m、短径1.10mの楕円形、底面は長径2.68m、短径2.48mのはほぼ円形で、深さは86cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

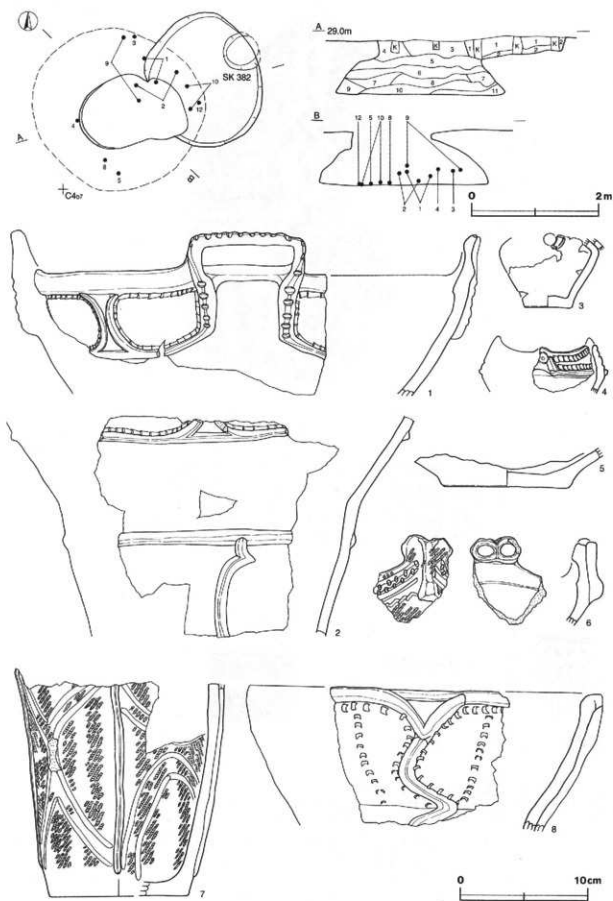
覆土 第1・2層は第382号土坑の覆土であり、第3～11層が本跡の覆土である。本跡の覆土はロームブロックの含有量が少ないものの、第6～8層は少量の焼土粒子を含み、多量の遺物が投棄されたような状態で出土していることから、覆土下層は人為堆積と考えられる。

土層解説

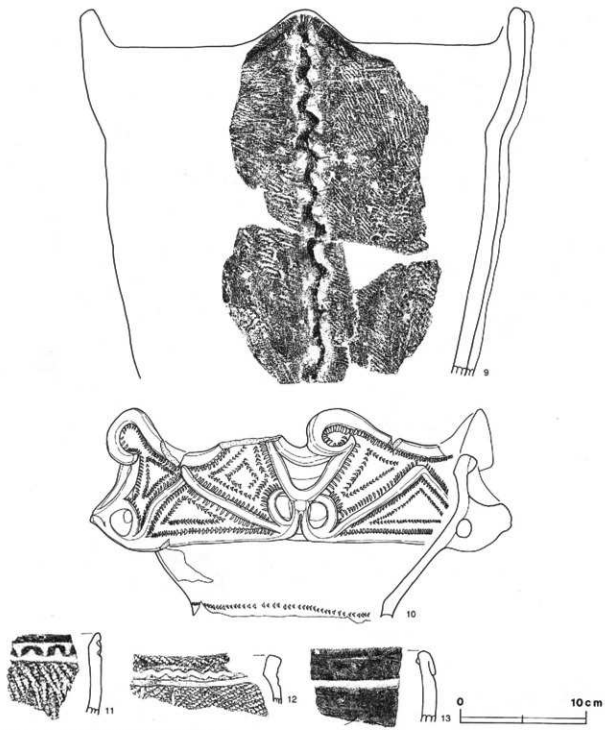
- 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒少量
- 黒褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒・炭化粒子微量
- 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量、ローム粒子・焼土粒少量
- 暗褐色 焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 暗褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 炭化物少量、ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒・炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒・炭化物・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片220点が主に覆土下層から出土している。このうち、縄文土器13点を抽出・図示した。5は浅鉢の胴部から底部にかけての破片、8は深鉢の口縁部片、10は胴下半部が欠損する深鉢、12は深鉢の口縁部片で、いずれも底面から出土している。1と2は同一個体で、肩状把手を有する深鉢、3は小形の壺、4は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、9は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、いずれも覆土下層から出土している。6は把手を有する口縁部片、7は深鉢の胴部から底部にかけての破片、11・13は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 図示した完形土器及び大破片は底面から覆土下層にかけて廃棄されたものと思われる。時期は出土土器から中期中葉(阿下台I b・II式期)と考えられる。



第319图 第383号土坑·出土遗物实测图



第320図 第383号土坑出土遺物実測図

第383号土坑出土遺物観察表 (第319・320図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [36.4] B (12.7)	扇状把手を有する口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部はわずかに内彎する。把手は4単位と推定され、把手の輪郭に沿ってキザミを有する隆帯を施している。口縁部は把手からのびる隆帯と把手間に位置するX字状の隆帯によって区画された8単位の横円形文により構成される。区画文内には隆帯に沿って施された線文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1034A 10% P1034Bと同一製体

区画番号	器種	計画図(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色美・焼成	備考
2	深鉢 縄文土器	B (17.4)	口縁部付近から腹部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈折して外傾する。口縁部には隆帯により区画文を施し、区画文内には隆帯に沿って縞筋状横文を施している。胴部と頸部の境に隆帯を巡らし、胴部には屈曲した隆帯を卓下させている。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1034B 10% P1034Aと同一個体
3	法門土器 縄文土器	B (5.4) C 3.6	肩部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、肩部は内傾する。波状口縁を呈し、波状口縁下には刺突文を施して、隆帯に沿って半縦竹管による前部沈線文を施している。	長石・石英・雲母 赤褐色 普通	P1042 20% 内・外面部彩
4	深鉢 縄文土器	A (8.2) B (3.8)	口縁部から頸部にかけての破片。胴部は外傾し、口縁部はわずかに内傾する。波状口縁を呈し、波状口縁下には刺突文を施している。隆帯に沿って半縦竹管による前部沈線文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1041 5%
5	浅鉢 縄文土器	D (3.2) C 9.9	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1039 5%
6	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部から腹部にかけての破片。胴部は外傾し、口縁部は直立する。波状口縁を呈し、波状口縁内に軌面を表現する把手を有する。波状口縁から隆帯を卓下させ、口縁部には交互刺突による地紋の字状文を施している。R Lの半筋横文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1040 5%
7	深鉢 縄文土器	B (16.7) C (10.9)	胴部から腹部の破片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部は卓下する隆帯で唇面を縦位に4分割し、区画内には沈線によるX字状文を施している。地文はR Lの単筋横文とLの無筋横文、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1038 20% P L33
8	深鉢 縄文土器	A (27.0) B (11.3)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部で屈折し、口縁部は外傾する。口縁部直下以降を巡らし、口縁部にV字状文を施している。V字状文からは施行する隆帯を懸垂させている。隆帯に沿って半縦竹管による刺突文を施し、頸部にも刺突文を縦位に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1037 5%
9	深鉢 縄文土器	A 35.2 B (29.3)	口縁部から頸部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈折して外傾し、口縁部は直立する。4単位の波状口縁を呈し、波状口縁から施行する隆帯を懸垂させている。Lの無筋横文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 (L半) 灰褐色 (D半) 普通	P1036 15%
10	深鉢 縄文土器	A 26.5 B (17.0)	下半部及び把手の一部欠損。胴部は屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内傾する。4単位の波状口縁を呈し、波状口縁には左右対称の反摺となる。波状口縁下には4単位の鎖状突起を有している。口縁部には隆帯により三角形状の区画文を形成し、隆帯に沿って爪形文を施している。区画文内にはペン先状工具により刺突文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1035 50% P L33 外面ス付着
11	深鉢 縄文土器	B (6.5)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口縁部直下に交互刺突による連続した字状文を巡らしている。口縁部にはRの単筋横文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1028 5%
12	深鉢 縄文土器	B (3.9)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾し、内面に稜を有する。口縁部直下に沈線による側面状文を巡らしている。地文はR Lの単筋横文で、口縁部外周には横方向に、口縁部には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1029 5%
13	深鉢 縄文土器	B (5.7)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾する。口縁部は厚縁し、内面に隆帯を巡らして、受け口状にしている。無文。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1030 5%

第384号土坑 (第321図)

位置 調査1区の中央部、B5Ⅱ区。

重複関係 本跡は第379号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 開口部は第379号土坑に掘り込まれているため長径0.73m、短径0.68mの円形と推定され、底面は長径1.73m、短径1.52mの円形である。深さは78cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

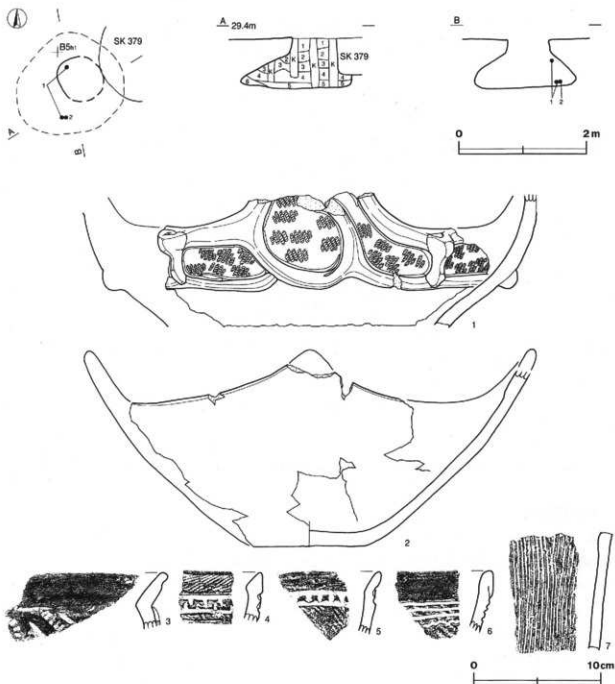
覆土 6層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|-------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 |
| 3 | 棕褐色 | ローム粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 棕褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 6 | 棕褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック微量 |

遺物 縄文土器片100点が出土している。このうち、縄文土器片7点を抽出・図示した。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、2は浅鉢の口縁部から底部の破片で、いずれも覆土下層から出土している。3～6は深鉢の口縁部片、7は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、その出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第321図 第384号土坑・出土遺物実測図

第384号土坑出土遺物観察表 (第321図)

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	B (11.3)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部はわずかに内傾する。波頂部は欠損するが、4単位の波状口縁を呈している。口縁部は隆帯により区画文を形成し、隆帯に沿って沈線文を施している。地文としてRLの半節縄文を施し、頸部は無文である。	灰石・石英・雲母 褐色 普通	P1043 15% 外面スリ付帯
2	浅鉢 縄文土器	A [35.6] B (15.7) C 9.0	口縁部から頸部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。4単位の波状口縁を呈し、波頂部は山形状である。無文。	灰石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1044 30%
3	深鉢 縄文土器	B (4.6)	口縁部片。口縁部は内傾し、口縁部直下で屈折して、口唇部は狭く外傾する。口唇部外面は無文である。口縁部は隆帯により区画文を施し、隆帯に沿って爪形文を施している。	灰石・石英・雲母 黒赤褐色 普通	T P1032 5%
4	深鉢 縄文土器	B (3.9)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾し、内面に横を有する。口唇部には交り刺突による連続コの字状文を施している。口唇部外面にはLの無節縄文を横方向に施している。	灰石・石英・雲母 褐色 普通	T P1033 5%
5	深鉢 縄文土器	D (5.0)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾し、内面に横を有する。口唇部には交り刺突による連続コの字状文を施している。口唇部外面は無文で、口唇部にはLの無節縄文を施している。	灰石・石英・雲母 褐色 普通	T P1034 5%
6	深鉢 縄文土器	D (5.0)	口縁部片。口縁部は直立する。口唇部外面は屈折し、無文である。口唇部には沈線文を施し、地文としてRLの半節縄文を横方向に施している。	灰石・石英・雲母 褐色 普通	T P1035 5%
7	深鉢 縄文土器	B (9.3)	胴部片。胴部はほぼ直立する。胴部にはタシ状工具により交線文を縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1036 5%

第386号土坑 (第322・323図)

位置 調査1区の中央部、B 5h2区。

重複関係 本跡は第387号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。本跡と第23号住居跡は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は長径1.76m、短径1.72mの円形、底面は長径1.94m、短径1.90mの円形で、深さは68cmである。

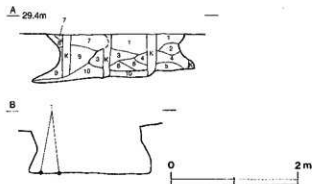
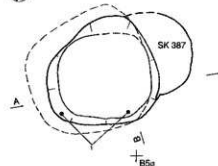
壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

覆土 第1～6層は第387号土坑の覆土であり、第7～10層が木跡の覆土である。本跡の覆土は4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

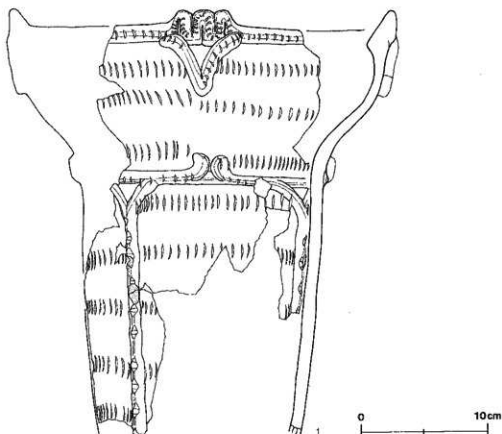
- 7 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微塵
- 8 黒褐色 ローム粒少量、ローム小ブロック・炭化粒少量
- 9 黒褐色 炭化粒少量、ローム粒子微量
- 10 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量



第322図 第386号土坑実測図

遺物 縄文土器片3点が出土している。このうち、縄文土器片1点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、底面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第323図 第386号土坑出土遺物実測図

第386号土坑出土遺物観察表 (第323図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [30.2] B (33.6)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で折出して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。4単位の突起を有し、口縁部外面にはキザミを有する縞帯を巡らしている。突起の下部には縞帯によるV字状文を施している。胴部と胴部の境にはキザミを有する縞帯を巡らし、胴部には横江文を有するV字状の縞帯を垂下させている。器面にはキザミ行列を巡らしている。	長石・石英・雲母 黒褐色(上平) 褐色(下平) 普通	F1045 40% P.L.33

第387号土坑 (第324～326図)

位置 調査1区の中央部、B 5 h2区。

重複関係 本跡が第386号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。木跡と第23号住居跡は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡は第386号土坑と重複しているため、開口部は長径1.44m、短径1.34mの円形と推定され、底面は長径1.60m、短径1.34mの円形と推定される。深さは59cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

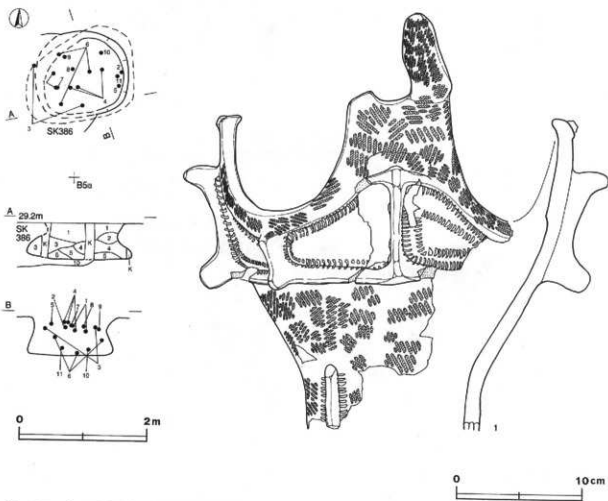
覆土 6層に分層される。覆土上層は、遺物が廃棄されたような状態で出土していること、ロームブロックを多く含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

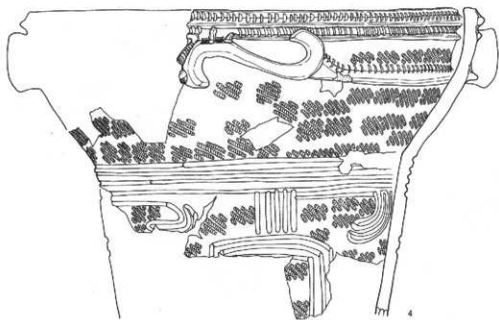
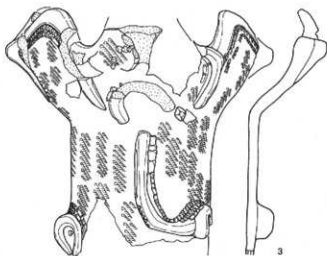
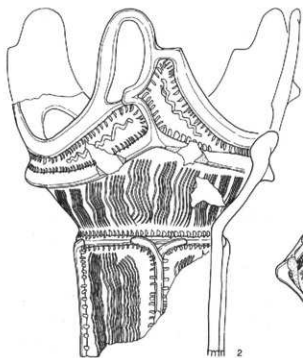
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片294点が主に覆土上層から廃棄されたような状態で出土している。このうち、縄文土器13点を抽出・図示した。1は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2・3は底部が欠損し、波状口縁を呈する深鉢、4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、5は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、7は小波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、8・9は深鉢の底部から胴部にかけての破片で、いずれも覆土上層から出土している。6は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、覆土中層から出土している。10はミニチュア土器、11は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土下層から出土している。12・13は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

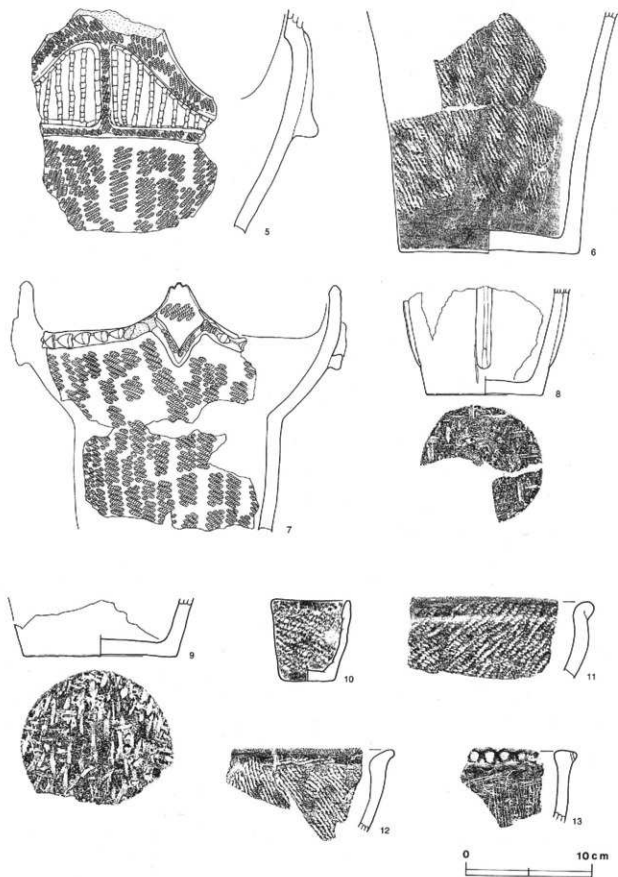
所見 1～5の土器は覆土上層堆積時に一括廃棄されたものである。本跡の廃絶時期は人為堆積した覆土上層の堆積時期とほとんど時間差がないと考えられ、その出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と思われる。



第324図 第387号土坑・出土遺物実測図



第325号 第387号土坑出土器物实测图(1)



第326图 第387号土坑出土文物实测图(2)

第387号土坑出土遺物観察表(第324~326図)

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A [26.8]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、腹部で屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。4単位の大波状口縁を呈し、その内の1単位は円筒状の把手を有し、その他の波頂部には縦溝状の裝飾帯を付けている。口縁部は波頂部下に波底部下に筋部を突出させた隆帯を垂下させて8単位の区画文を形成し、隆帯に沿って半軌竹管による爪形文を施している。胴部には波底部下に隆帯に沿って半軌竹管による爪形文を施している。地文はRLの単筋縄文である。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1046 25% P1.34
		B (32.9)			
2	深鉢 縄文土器	A [21.5]	口縁部・腹部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、腹部で屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。3単位の大波状口縁を呈し、波頂部は左右非対称の反拗となる。口縁部は波頂部下に低い隆帯を垂下させて3単位の区画文を形成し、隆帯に沿って爪形文を施している。腹部と胴部の地には隆帯を垂らし、胴部にはV字状の隆帯を垂下させている。胴部と胴部にはクシ状工具による波状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色(上半) 良好	P1047 60% P1.34
		B (27.4)			
3	深鉢 縄文土器	A [19.0]	口縁部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、腹部で屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。6単位の大波状口縁を呈し、その内の1単位は欠損しているが、把手を有している痕跡がある。口縁部は波頂部下に低い隆帯を垂下させて2単位の区画文を形成し、隆帯に沿ってペン先状の工具により縮線施文を施している。胴部には3単位の直線的な隆帯を垂下させ、その中に環状の突起を付加している。地文としてLの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P1048 70%
		B (19.6)			
4	深鉢 縄文土器	A [37.0]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、腹部で屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。口縁部底下に2単位の隆帯を垂らし、隆帯に沿って爪形文を施している。口縁部には隆帯による狭5字状文を施し、その間を隆帯で連絡している。胴部と胴部の地には4単位の爪形文を垂らし、胴部には比喩により曲線的な文様を提出している。地文としてRLの単筋縄文を横方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1049 25% P1.33
		D (24.4)			
5	深鉢 縄文土器	B (16.1)	大波状口縁を呈する口縁部から胴部にかけての破片。腹部は外傾し、口縁部はわずかに内彎する。口縁部は波頂部下に隆帯を垂下させて区画文を形成し、区画文内に縦方向の縮線施文を施している。RLの単筋縄文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1050 5%
6	深鉢 縄文土器	B (19.0) C 14.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P1052 20%
7	深鉢 縄文土器	A [24.6]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、腹部で屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。4単位の波状口縁を呈し、波頂部は山形状を呈する。波頂部下に隆帯によるV字状文を施し、口縁部底下に押圧文を有する隆帯を垂下している。地文としてLRの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1051 10%
		B (19.7)			
8	深鉢 縄文土器	B (8.5) C 9.3	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には4単位の隆帯を懸垂させている。無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1053 15% 底部に網代文
9	深鉢 縄文土器	B (4.6) C 12.1	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1054 5% 底部に網代文
10	ミニチュア 土器 縄文土器	A 5.9 B 6.4 C 4.2	口縁部から胴部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。LRの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1055 60% P1.33
11	深鉢 縄文土器	B (6.0)	口縁部。口縁部はわずかに内彎する。口縁部には2単位の単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P1037 5%
12	深鉢 縄文土器	B (6.5)	口縁部。口縁部はわずかに内彎する。口縁部内面に隆帯を有する。Lの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P1038 5%
13	深鉢 縄文土器	B (5.8)	口縁部。口縁部はわずかに内彎する。口縁部外側に押圧文を有する隆帯を垂下している。クシ状工具による無筋文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P1039 5%

第388号土坑 (第327・328図)

位置 調査1区の中央部, B 5j2区。

規模と平面形 本跡は開口部の一部が崩落しているため, 開口部は長径1.60m, 短径1.26mの楕円形と推定され, 底面は長径2.11m, 短径1.92mの円形である。深さは85cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

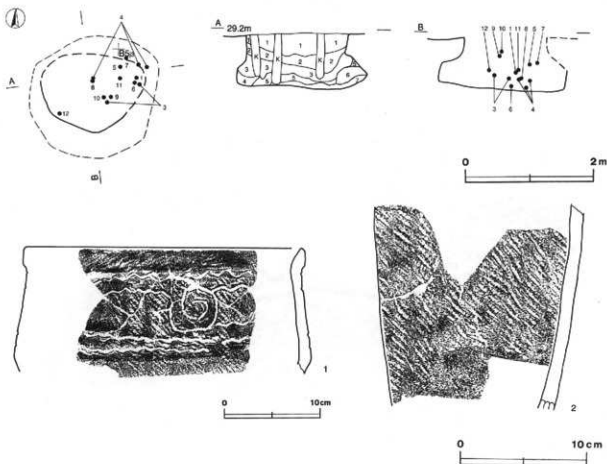
覆土 7層に分層され, 第4・5層はローム粒子を多く含むことから, 北壁の崩落土と考えられる。

土層解説

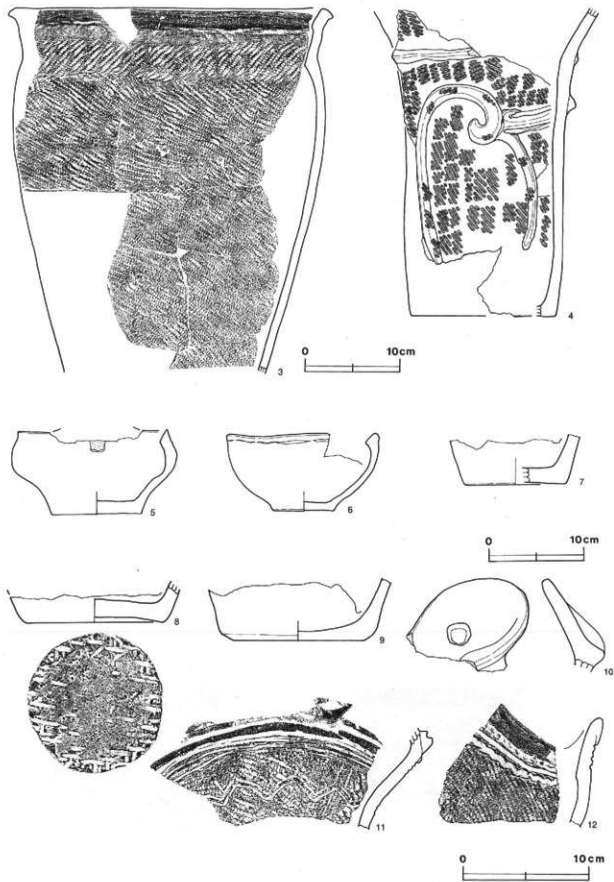
- 1 黒褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量, ローム中ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量
- 7 褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック少量

遺物 縄文土器片96点が出土している。このうち, 縄文土器片12点を抽出・図示した。3は堯の口縁部から胴部にかけての破片, 4は深鉢の頸部から底部にかけての破片, 6は口縁部の一部が欠損する小形鉢, 8は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 12は深鉢の口縁部片で, いずれも覆土下層から出土している。1は深鉢の口縁部片, 5は把手部が欠損する小形鉢, 7・9は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 10は深鉢の把手部片, 11は深鉢の頸部片で, いずれも覆土上層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台IV式期)と考えられる。



第327図 第388号土坑・出土遺物実測図



第328图 第388号土坑出土文物实测图

第388号土坑出土遺物観察表 (第327・328図)

図録番号	器 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・施成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A [28.8] B (13.3)	口縁部片、口縁部と胴部の境で歪曲し、口縁部はわずかに内傾する。 口縁部内面に残を有する。口縁部には底部より高直状文を施し、 その間に斜線文を施している。本文はLの無筋縄文で、口唇部外側には 横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・褐色障泥 黒褐色 青濁	P 1057 10%
2	深鉢 縄文土器	B (16.1)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無筋縄文を縦方向に施し ている。	長石・石英・雲母 黒褐色 青濁	P 1058 10%
3	深鉢 縄文土器	A [32.4] B (38.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、胴部で くびれて折曲し、口縁部は短く外傾する。口唇部外側は突出し、口唇部 内面に残を有する。地文はLの半筋縄文で、口縁部は縦方向に、胴 部は横方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 (上半) 灰褐色 (下半) 良好	P 1056 30% P 1.33
4	深鉢 縄文土器	B (24.5) C [11.4]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で 折折して外傾する。胴部と胴部の境に隆帯を高め、胴部には虚線的 な隆帯を下下させ、隆帯の連結部は扇状となる。Lの半筋縄文を施 している。	長石・石英・雲母 黒褐色 (上半) 灰褐色 (下半) 良好	P 1059 15%
5	鉢 縄文土器	A 11.6 B (6.6) C 7.0	口縁部一部欠損。胴部は外放して立ち上がり、口縁部は内傾する。口 縁部内面に残を有し、口縁部に突起を有していた痕跡がある。内・外 面にほぼ研磨されている。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P 1063 90% P 1.34
6	鉢 縄文土器	A [11.7] B 6.1 C 4.6	口縁部から胴部の一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部はわ ずかに内傾する。口縁部内面に残を有する。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P 1064 50%
7	深鉢 縄文土器	B (3.9) C 7.8	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 灰褐色 青濁	P 1062 5%
8	深鉢 縄文土器	B (3.4) C 11.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は内傾的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 灰褐色 青濁	P 1061 5% 底部に物欠。
9	深鉢 縄文土器	B (5.0) C 10.3	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 灰褐色 青濁	P 1060 5%
10	深鉢 縄文土器	B (7.4)	把手部片。円盤状を呈し、中心部に円形のくぼみがある。	長石・石英・雲母 灰褐色 青濁	P 1065 3%
11	深鉢 縄文土器	B (8.0)	頸部片。頸部で屈曲して外傾する。口縁部と胴部の境に隆帯を高め、 胴部は半筋竹管による半筋縄文で文様を描出している。地文として Lの半筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 青濁	T P 1040 5%
12	深鉢 縄文土器	B (8.7)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は直線的に立ち上がり、内傾し、内 面に残を有する。口唇部外側に隆帯を高め、半筋竹管による筋面状 縄文を施している。地文としてLの半筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 青濁	T P 1041 5%

第390号土坑 (第329図)

位置 調査1区の南西部、C 4 d5区。

規模と平面形 開口部は長径1.68m、短径1.52mの円形、底面は長径1.82m、短径1.80mの円形で、深さは66cmである。

壁 フラスコ状を呈する。南壁だけはほぼ直立する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 2か所。P 1は南西壁際に位置し、径27cmの円形で、深さ38cmである。P 2は北西壁寄りに位置し、径28cmの円形で、深さ19cmである。

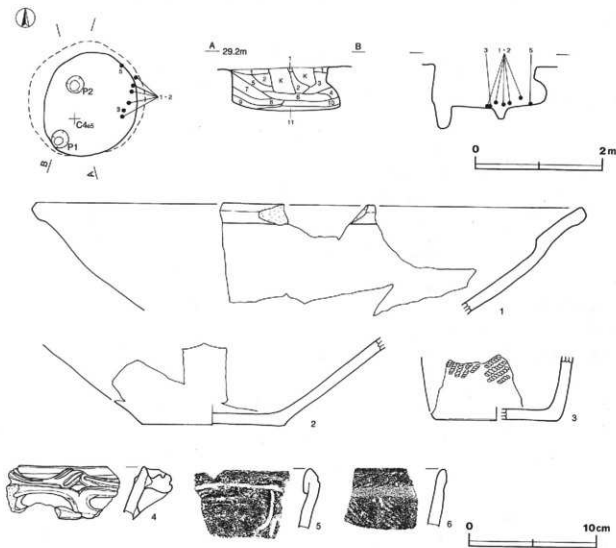
覆土 11層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子・焼石パミス粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 9 黒褐色 ローム粒子微量
- 10 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器片56点が出土している。このうち、縄文土器片6点を抽出・図示した。1・2は同一個体の浅鉢で、1は口縁部から胴部にかけての破片、2は胴部から底部にかけての破片で、いずれも覆土下層から出土している。3は深鉢の胴部から底部にかけての破片、5は深鉢の口縁部片で、いずれも底面から出土している。4・6は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期)と考えられる。



第329図 第390号土坑・出土遺物実測図

第390号土坑出土遺物観察表 (第329図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	浅鉢 縄文土器	A [43.0] B (8.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。口縁部に布文。口縁部内面に横を有する。無文。内・外面ともに研磨している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P1066 A 10% 口縁部内面赤彩
2	浅鉢 縄文土器	B (7.1) C [10.9]	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。内・外面ともに研磨している。	長石・石英・雲母 暗褐色 普通	P1066 B 10% P1066 A と同一 個体
3	深鉢 縄文土器	B (5.2) C [9.8]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。RLの平部輪文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P1068 5%
4	深鉢 縄文土器	B (3.8)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。口縁部には上下に重なる條状の突起を連続させて高らしている。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1067 3%
5	深鉢 縄文土器	B (4.7)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部内面は肥厚させ、口唇部直下に沈線文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P1042 3%
6	深鉢 縄文土器	B (4.6)	口縁部片。口縁部は直立する。口唇部直下に沈線文を施している。本文はLの無節縄文で、口唇部外面は横方向に、口縁部は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	T P1043 3%

第392号土坑 (第330・331図)

位置 調査1区の南西部、C4g4区。

重複関係 本跡は第393号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。本跡と第404号土坑は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は第393号土坑を掘り込んでいるため、長径1.20m、短径1.08mの円形と推定され、深さは36cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほほ平坦である。

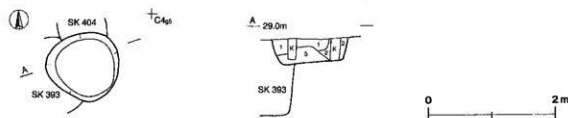
覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

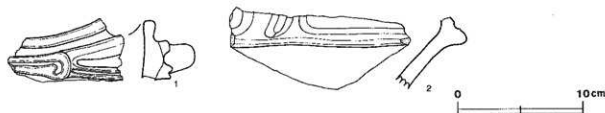
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片19点が出土している。このうち、縄文土器片2点を抽出・図示した。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、2は浅鉢の口縁部付近から胴部にかけての破片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅠ式期)と考えられる。



第330図 第392号土坑実測図



第331図 第392号土坑出土遺物実測図

第392号土坑出土遺物観察表 (第331図)

図位番号	器 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	B (4.7)	波状口縁を呈する口縁部片、口縁部は直立する。口縁部には隆帯により支線を描出し、隆帯の交点には渦巻文を施している。	長石・石英・雲母に多い赤褐色普通	P1075 3%
2	浅鉢 縄文土器	B (6.6)	口縁部付近から胴部にかけての破片。胴部は縦やかに傾斜して立ち上がり、口縁部と胴部の境は同曲して突出し、口縁部は内傾する。口縁部は波状により支線を描出している。	長石・石英・雲母に多い褐色普通	P1077 5%

第393号土坑 (第332・333図)

位置 調査1区の南西部，C 4 g4区。

重複関係 本跡は第392号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。本跡と第404号土坑は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は長径1.28m，短径1.20mの円形，底面は長径2.08m，短径1.50mの楕円形で、深さは136cmである。

壁 フラスコ状を呈する。北東壁はほぼ直立する。

底 ほぼ平坦である。

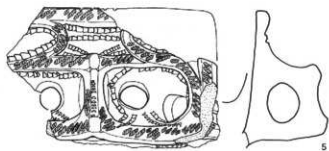
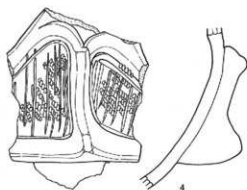
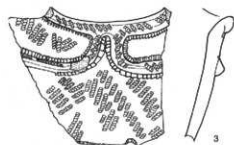
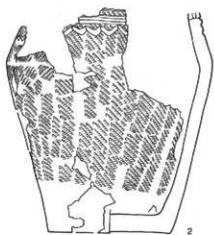
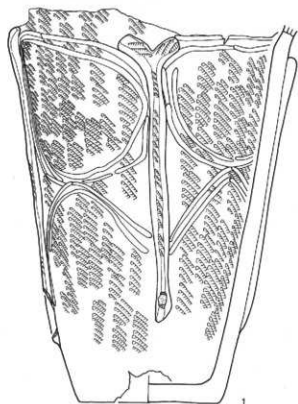
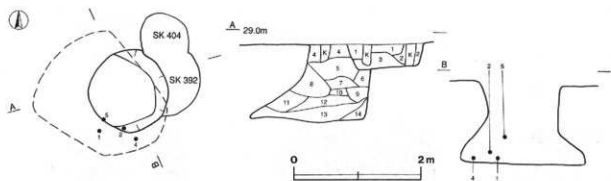
覆土 第1～3層は第392号土坑の覆土で、第4～14層が本跡の覆土である。11層に分離され、覆土下層(第9～14層)はローム粒子を多量に含んでいることから、内傾していた北東壁の崩落土と考えられる。

土層解説

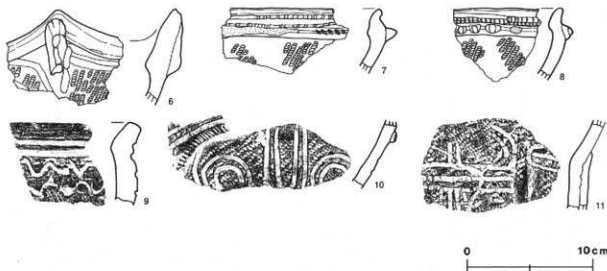
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，焼十小ブロック・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・炭沼バミス粒子微量
- 7 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子多量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 12 褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 13 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
- 14 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片127点が出土している。このうち、縄文土器11点を抽出・図示した。1は上半部が欠損する深鉢，2は深鉢の胴部から底部にかけての破片，4は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、いずれも覆土下層から出土している。5は楕状把手を有する深鉢の口縁部片で、覆土中層から出土している。3・6は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，7～9は深鉢の口縁部片，10は深鉢の頸部片，11は深鉢の頸部から胴部にかけての破片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、1・2・4の出土土器から中期中葉(阿玉台IV式期)と考えられる。



第332图 第393号土坑·出土文物实测图



第333図 第393号土坑出土遺物実測図

第393号土坑出土遺物観察表（第332～333図）

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (30.0) C 11.0	上半部欠損。胴部は直線的立ち上がり、頸部で屈曲して外傾する。頸部と胴部の境からY字状の隆帯を垂下させて器面を縦位に4分割し、沈線により上下に対向するX字状文を施している。地文はLの無筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色（上半） にぶい褐色（下半） 普通	P1118 60% P L 34 外面上半部スス 付着
2	深鉢 縄文土器	B (17.7) C 9.6	頸部から底部にかけての破片。胴部は直線的立ち上がり、頸部でびれる。頸部に沈線による雲状文を施している。地文はLの無筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色（上半） にぶい褐色（下半） 普通	P1076 30% P L 34
3	深鉢 縄文土器	B (9.9)	大波状口縁を呈する口縁部片。波底部を起点に隆帯により区画文を形成し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。RLの単筋縄文を地文にしている。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P1070 5%
4	深鉢 縄文土器	B (12.8)	波状口縁を呈する口縁部片。波頂部直下に肩部を突出させた隆帯を起点に区画文を形成し、隆帯に沿って沈線文を施している。地文としてRLの単筋縄文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1071 5%
5	深鉢 縄文土器	B (11.0)	立体的な楕状把手を有する口縁部片。口縁部はほぼ直立する。把手の上部は横長の長方形形状を呈し、把手の下部は中央と両端に縦位の楕状把手を付加している。隆帯に沿って結節沈線文を施し、LRの単筋縄文を地文にしている。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P1069 5%
6	深鉢 縄文土器	B (7.6)	波状口縁を呈する口縁部片。口唇部外面に隆帯を巡らし、波頂部直下に縦長の隆帯を付加している。隆帯に沿って沈線文を施し、RLの単筋縄文を地文にしている。	長石・石英・雲母 刷灰色 普通	P1072 3%
7	深鉢 縄文土器	B (5.1)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎し、口唇部は短く外反する。口唇部に隆帯を巡らして幅狭の口縁部文様帯を形成し、文様帯内に結節沈線文を巡らしている。文様帯の下部には、RLの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P1073 3%
8	深鉢 縄文土器	B (5.8)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎し、口唇部は短く外反する。口唇部に押圧文を有する隆帯を巡らして幅狭の口縁部文様帯を形成し、文様帯内に結節沈線文を巡らしている。文様帯の下部には、RLの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	P1074 3%
9	深鉢 縄文土器	B (6.5)	口縁部片。口縁部は内彎し、口唇部は外傾する。口唇部直下に沈線を巡らし、口縁部には沈線による波状文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	T P1044 3%
10	深鉢 縄文土器	B (5.2)	頸部片。頸部は外傾する。キザミを有する隆帯により区画文を形成し、沈線により文様を描出している。地文はRLの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	T P1045 5%
11	深鉢 縄文土器	B (7.1)	頸部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾する。胴部は結節沈線文により文様を描出している。地文はRLの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	T P1046 5%

第395号土坑 (第334図)

位置 調査1区の南西部, C 4 e5区。

重複関係 本跡は第381号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第381号土坑に掘り込まれているため, 開口部は長径1.60m, 短径1.54mの円形と推定され, 底面は長径2.04m, 短径2.02mの円形である。深さは62cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

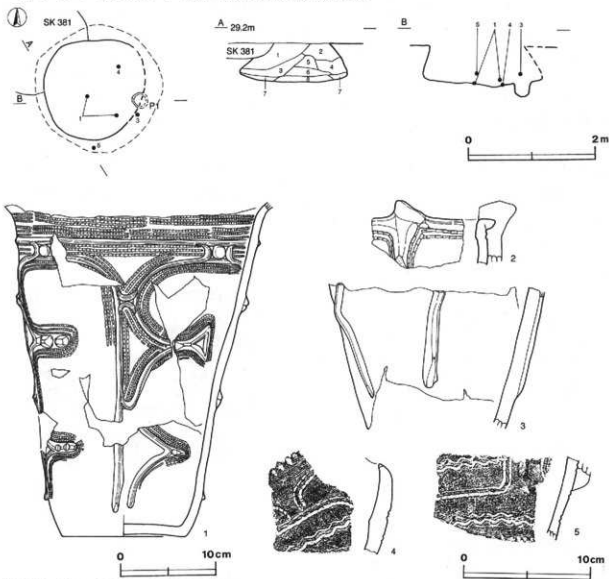
底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P 1は長径27cm, 短径25cmの円形で, 深さ22cmである。P 1は本跡に伴うピットと考えたが, 別な遺構のピットである可能性もある。

覆土 8層に分層され, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解部

- | | | |
|---|-----|------------------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 黒褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・燻土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子微量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量, 第3層より色調が明るい |
| 7 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 8 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・産沼バミス粒子少量, 炭化粒子微量 |



第334図 第395号土坑・出土遺物実測図

遺物 縄文土器片65点が出土している。このうち、縄文土器5点を抽出・図示した。1は上半部が欠損する深鉢、4は深鉢の口縁部片で、いずれも底面から出土している。3は深鉢の胴部片、5は深鉢の頸部片で、いずれも覆土下層から出土している。2は突起を有する深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。

第395号土坑出土遺物観察表(第334図)

図記番号	器種	高径値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・紋様	備考
1	深鉢 縄文土器	B(3.5.6) C 13.1	上半部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部は屈曲して外傾する。胴部直下に降帯を巡らして斗形の筋付文を4単位施し、その間に区画文を形成している。胴部には降帯による三角形区画文を縦位に重ねたようなモチーフを胴部直下の区画文から承下させている。降帯に沿って3条一組の横筋沈線文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P 1078 50% P L 34
2	深鉢 縄文土器	B(5.2)	口縁部片。口縁部はわずかに内傾し、内面に突起を有する。口唇部に縦状の突起を有し、突起を起点として降帯により区画文を形成している。降帯に沿って半横竹管による結節平行沈線文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P 1080 3%
3	深鉢 縄文土器	B(11.3)	胴部片。胴部は直線的にわずかに外傾して立ち上がる。胴部には4単位の降帯を施下させている。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P 1079 10%
4	深鉢 縄文土器	B(7.2)	波状口縁を呈する口縁部片。口唇部はわずかに内傾する。口唇部にキズミを有し、口唇部には半横竹管により結節平行沈線文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P 1047 3%
5	深鉢 縄文土器	B(6.6)	頸部片。頸部はわずかに外傾する。降帯により文様を抽出し、降帯に沿って半横竹管による結節平行沈線文を施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P 1048 3%

第396号土坑(第335・336図)

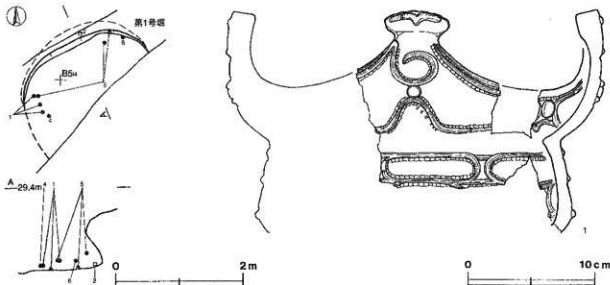
位置 調査1区の東部、B 5j4区。

重複関係 本跡は第1号堀にその大半を掘り込まれていることから、本跡が古く、一部だけが残存している。

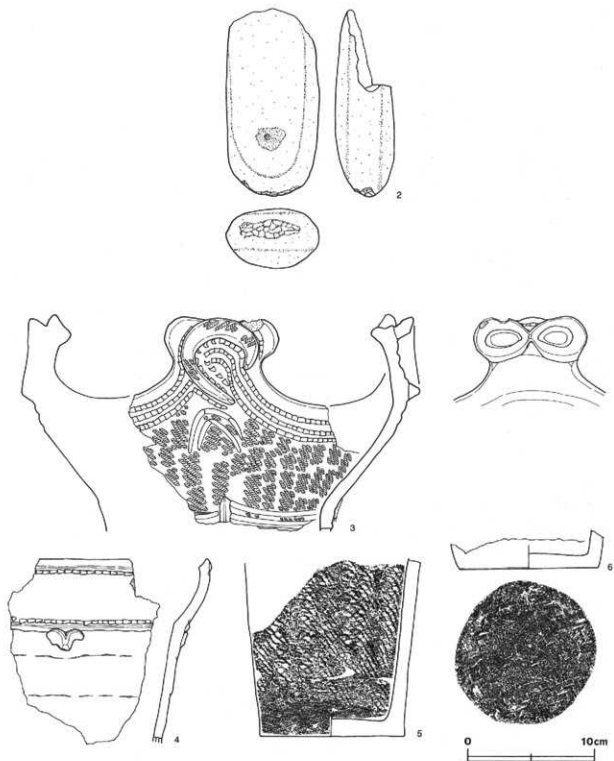
規模と平面形 開口部は残存していないため不明である。底面は長径2.28m、短径2.20mの円形と推定される。深さは50cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 はほぼ平坦である。



第335図 第396号土坑・出土遺物実測図



第336図 第396号土坑出土遺物実測図

遺物 縄文土器片70点、敲石1点が出土している。このうち、縄文土器6点、敲石1点を抽出・図示した。1は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、4は深鉢の口縁部片、5・6は深鉢の底部から胴部にかけての破片、2は敲石で、いずれも底面に近い位置から出土している。3は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、覆土から出土している。

所見 時期は、中期中葉(阿玉台I b式期)と考えられる。

第396号七坑出土遺物観察表 (第335・336図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [28.8] B (17.6)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部はわずかに内傾して立ち上がり、腹部と口縁部の境で屈曲して外傾し、口縁部は内彎する。4稜角の大穴状口縁を呈し、隆起部には肩状の把手を有する。口縁部には隆起部下と底底部とに凹形の貼付文を付け、断面三角形の隆帯により文様を突出している。隆帯は隆帯により凹形区画文を形成し、二段に施している。隆帯に沿って結節沈線文を施している。	長石・石英 にぶい褐色 良好	P1081 15% P L34
3	深鉢 縄文土器	A [30.2] B (17.0)	口縁部から側部にかけての破片。側部は直線的に立ち上がり、頸部で屈折して外傾し、口縁部は内彎する。4稜角の大穴状口縁を呈し、底底部には内面が凹形となる把手を有する。底底部直下には隆帯による十字状文を施し、口縁に沿って結節沈線文を施している。隆帯は垂下する隆帯により器を縦に4分割し、頸部と側部の境には沈線文を施している。貼文としてLRの半筋線文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P1082 10% F L34 外面スリ付痕
4	深鉢 縄文土器	B (14.6)	口縁部から側部にかけての破片。側部は直線的に立ち上がり、口縁部と側部の境で屈曲し、口縁部は内彎しながら内彎する。口縁部直下と、口縁部と側部の境に断面三角形の隆帯を施して区画文を形成し、隆帯に沿って結節沈線文を施している。頸部は無文である。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1083 5%
5	深鉢 縄文土器	B (13.7) C 11.3	頸部から底部にかけての破片。側部は直線的に立ち上がる。Lの半筋線文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1084 10%
6	深鉢 縄文土器	B (2.5) C 11.0	側部から底部にかけての破片。側部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1085 5% 底部に磨代痕

図版番号	器種	計測値				石	質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)				
2	灰石	(14.8)	7.3	4.8	(60)	砂	石	自然産を素材にしている、四石家蔵	Q1002

第399号土坑 (第337~342図)

位置 調査1区の南西部、C 415区。

規模と平面形 開口部は長径1.54m、短径1.22mの円形、底面は長径2.74m、短径2.58mの円形で、深さは102cmである。

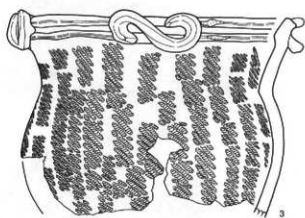
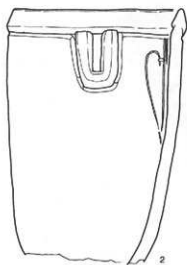
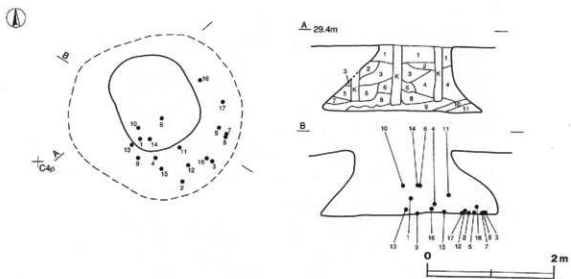
壁 フラスコ状を呈する。

底 はほぼ平坦である。

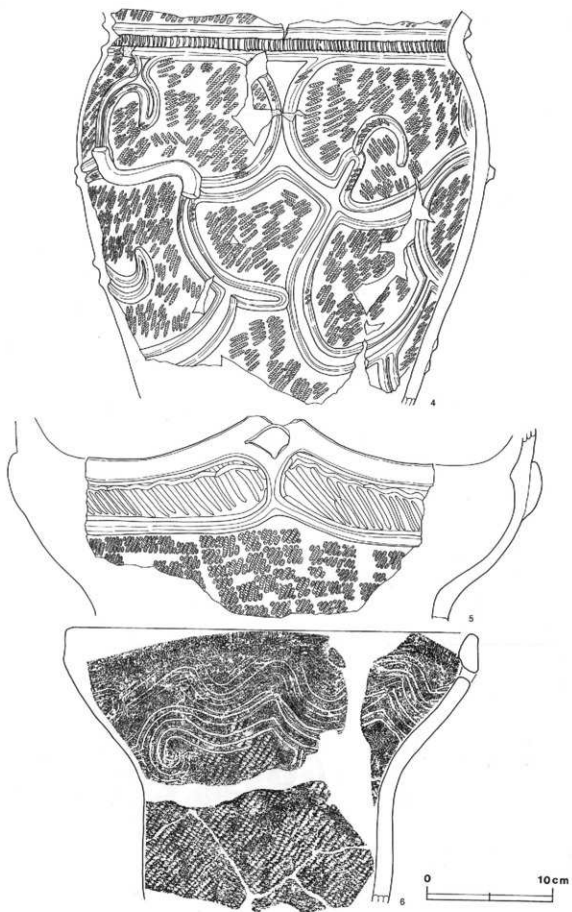
覆土 11層に分層される。ほぼ完形の土器や大形破片が底面から覆土下層にかけて多量に廃棄されたような状態で出土していることから、覆土下層は人為堆積と考えられる。

土層解説

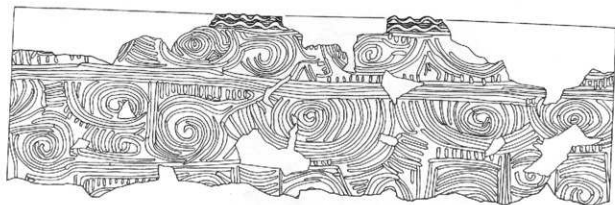
- 1 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 炭化物少量、ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 11 褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量



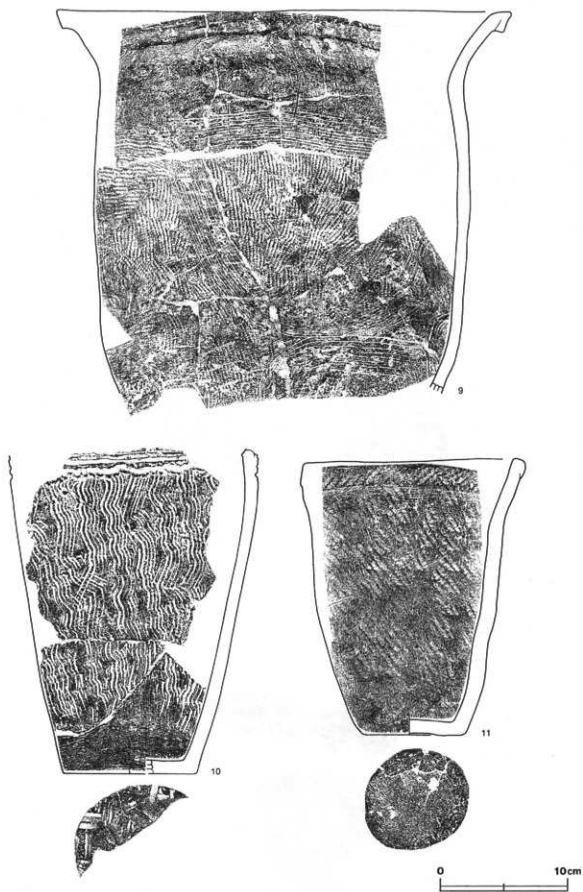
第337图 第399号土坑·出土器物实测图



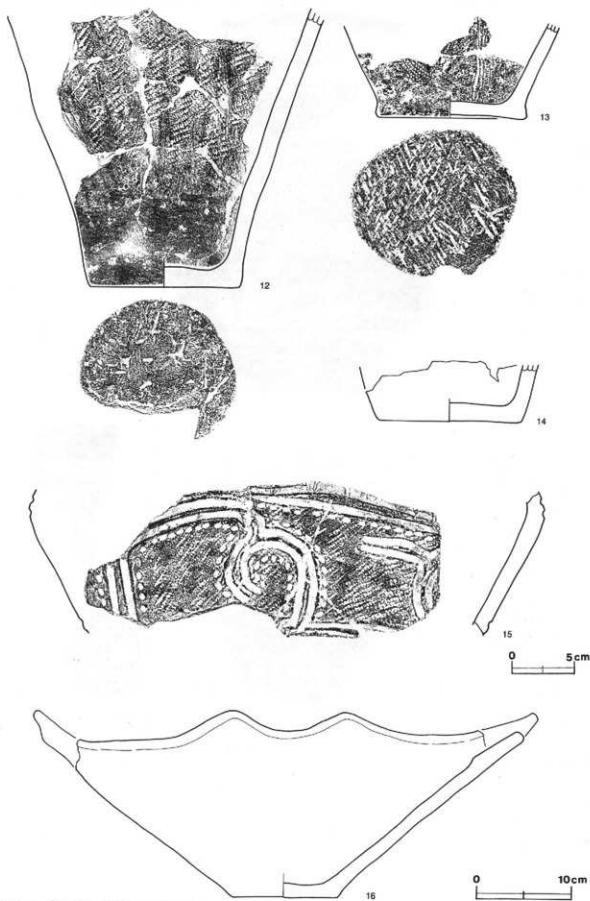
第338图 第399号土坑出土遗物实测图(1)



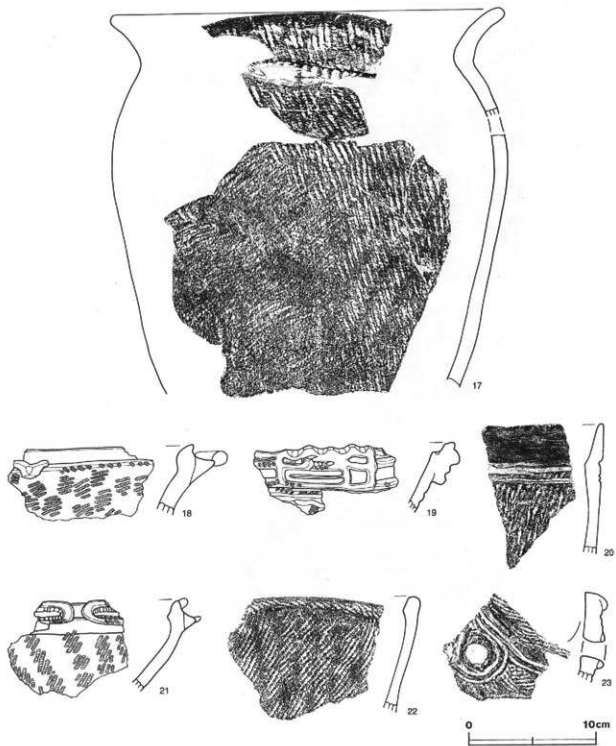
第339图 第399号土坑出土文物实测图(2)



第340图 第399号土坑出土遗物实测图(3)



第341图 第399号土坑出土遗物实测图(4)



第342図 第399号土坑出土遺物実測図(5)

遺物 縄文土器片709点が、主に底面から覆土下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。このうち、縄文土器23点を抽出・図示した。2・3は底部が欠損する深鉢、5は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、7・8は同一個体で、7は深鉢の上半部、8は深鉢の胴部から底部にかけての破片、9は口縁部の一部及び底部が欠損する甕、16は双頭の波状口縁を呈する浅鉢、17は甕の口縁部から胴部にかけての破片で、いずれも底面から出土している。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、4は深鉢の頸部から胴部

にかけての破片, 12・13は胴部から底部にかけての破片, 15は深鉢の頸部片, 18は深鉢の口縁部片で, いずれも覆土下層から出土している。6は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片, 10・14は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 11はほぼ定形の深鉢で, いずれも覆土中層から出土している。19-23は深鉢の口縁部片で, いずれも覆土から出土している。

所見 ほぼ定形の土器及び大形破片は, 本跡の廃絶時から覆土中層堆積時にかけて一括廃棄されたものと思われる。時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。

第399号土坑出土遺物観察表(第337~342頁)

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深 鉢 縄文土器	A [26.0] B (25.5)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり, 頸部で屈折し, 口縁部は外傾する。口唇部の断面形は三角形を呈し, 内面に浅を有する。口縁部に隆起による十字状文を4単位施している。無文。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1086 40% P L 34 外面スス付着
2	深 鉢 縄文土器	A 13.4 B (20.2)	底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり, 口縁部に至る。口唇部の断面形は三角形を呈し, その下部に隆起による十字状文を3単位施している。口縁部は沈線により文様を描出している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にぶい赤褐色(下半) 普通	P 1089 90% P L 34 外面上スス付着
3	深 鉢 縄文土器	A 21.3 B (16.3)	底部欠損。胴部は内湾気味に外傾して立ち上がり, 胴部中位に最大径を持つ。頸部は屈曲して外傾し, 口縁部に至る。口唇部直下に2本の隆起を巡らし, 隆起による横S字状文を施している。LRの半部状文を縦方向に施している。	石英・雲母 黒褐色 普通	P 1087 50% P L 35
4	深 鉢 縄文土器	B (30.5)	胴部から胴部にかけての破片。胴部は内湾して立ち上がり, 胴部中位に最大径を持つ。頸部は屈曲して外傾する。頸部と胴部の境に2本の隆起を巡らし, その間に爪形文を施している。胴部には2本一組の隆起により層部が渦巻文となる文様を連続させて施している。底文はRLの単面縄文で, 縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P 1088 30% P L 34
5	深 鉢 縄文土器	A [41.4] B (15.6)	口縁部から胴部にかけての破片。頸部で屈曲して外傾し, 口縁部は開口ながら内湾する。4単位の波状口縁部を呈し, 波部には欠損している。口縁部には波頂部下部で区切られた隆起による直文を形成し, 区画内には波溝を連続させて斜位に施している。底部にはLRの単面縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1091 10%
6	深 鉢 縄文土器	A [31.4] B (21.4)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり, 頸部で屈折して外傾し, 口縁部は開口ながら内湾する。口縁部には平行波状文による波状の平行沈線文を巡らし, 胴部にはRLの単面縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1092 40% P L 35
7	深 鉢 縄文土器	A [27.5] B (30.6)	口縁部及び胴部の 欠欠損。胴部は内湾気味に外傾して立ち上がり, 胴部中位に最大径を持つ。頸部はくびれて外傾し, 口縁部は開口ながら内湾する。口唇部直下に2本の隆起を巡らし, 隆起による2本の波状文を施している。頸部と胴部の境には3本の隆起を巡らして頸部と胴部を区画している。胴部と胴部には沈線による渦巻文を施し, 渦巻文の内側に沈線文を光輝している。地文としてLRの半部状文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P 1090A 30% 外面上スス付着 P L 34
8	深 鉢 縄文土器	B (5.0) C [13.2]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり, 沈線により文様を描出している。地文はLRの半部状文で, 縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 普通	P 1090B 5% P 1090Aと同一体 底部に削代痕
9	委 縄文土器	A 36.2 B (30.4)	口縁部の 部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり, 口縁部は外反する。RLの半部状文を地文とし, クラシ工により条線文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 1093 50% P L 35
10	深 鉢 縄文土器	B (25.7) C 10.6	胴部から底部にかけての破片。胴部はほぼ直線的に立ち上がり, 胴部と胴部の境に沈線を巡らし, 胴部にはクシ状1只により波状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1094 30% 底部に削代痕
11	深 鉢 縄文土器	A 16.0 B 22.0 C 7.9	ほぼ定形。胴部は直線的に立ち上がり, 口縁部はわずかに外傾する。口唇部外面は肥厚する。Lの無節縄文を, 口唇部外面には横方向に, それ以外には縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい赤褐色(下半) 普通	P 1358 98% P L 35 底部に削代痕
12	深 鉢 縄文土器	B (22.1) C 12.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は開口ながら直線的に立ち上がり, RLの半部状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色	P 1095 30% 底部に削代痕

図版番号	器種	許測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
13	深鉢 縄文土器	B (7.7) C 11.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は肉きながら直線的に立ち上がる。Lの単節縄文を横文とし、クシ状L具により皮状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1096 10% 底部に副代紙
14	深鉢 縄文土器	B (4.8) C 11.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1098 10%
15	深鉢 縄文土器	B (11.5)	胴部片。口縁部と胴部の境及び胴部と頸部の境に沈線を巡らし、胴部には沈線より文様を描用している。沈線に沿って縄文取体による比喩文を施している。地文としてRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1100 10%
16	浅鉢 縄文土器	A 51.8 B 19.7 C 11.2	L縁部一部欠損。胴部は外傾し、口縁部に至る。4単位の変次L縁を呈し、流頂部は反頂となる。無文。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P1097 90% P L 35
17	浅鉢 縄文土器	A [30.8] B (30.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎気味に外傾して立ち上がり、胴部中に幾人様を持つ。頸部は折曲して外傾し、L縁部に至る。Lの無節縄文を縦方向に、一部は横方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1099 10% 外面スチ付着
18	深鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。L縁部は外傾する。L縁部下部に筒状の隆帯を巡らし、その上部に隆帯による変状文を施している。地文はRLの単節縄文で、筒状の隆帯には横方向に、L縁部には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1101 5%
19	深鉢 縄文土器	B (5.5)	L縁部片。口縁部は外傾する。口唇部直下に2本の隆帯を巡らし、L唇部に押折文を施す突起を有している。隆帯の下部には沈線を巡らしている。地文はRLの単節縄文で、隆帯には横方向に、その下縁には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1102 5%
20	深鉢 縄文土器	B (10.2)	L縁部片。L縁部は直立し、内面に横を有する。口縁部に2本の沈線を巡らし、その上部は幅狭の無文帯としている。口縁部にはLの基節縄文を斜方向に巡らしている。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1051 5%
21	深鉢 縄文土器	B (7.2)	L縁部片。口縁部は肉きながら内彎する。口縁部に隆帯を巡らし、幅狭のL縁部文帯帯を形成し、隆帯により区別文を施している。隆帯に沿って輪節沈線を施している。口縁部にはRLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1103 5%
22	深鉢 縄文土器	B (9.1)	口縁部片。口縁部は外傾し、内面に横を有する。地文はRLの単節縄文で、口唇部には横方向に、L縁部には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1052 5%
23	深鉢 縄文土器	B (7.1)	流状沈線を呈するL縁部片。L縁部は肉きながら内彎する。口唇部直下に隆帯を巡らし、隆帯に沿って手載竹管による平行沈線文を施している。L縁部には孔を有し、孔に沿って隆帯を施している。地文としてLの無節縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1050 5%

第402号土坑 (第343図)

位置 調査1区の中央部、B 4j8区。

確認状況 トレンチャーによる擾乱が著しく、確認面における残存状況は不良である。

規模と平面形 開口部は長径1.06m、短径0.94mの円形と推定され、底面は長径2.14m、短径1.76mの円形である。深さは80cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 2か所・いずれも北際に位置し、ピットの深さはP1が43cm、P2が20cmである。

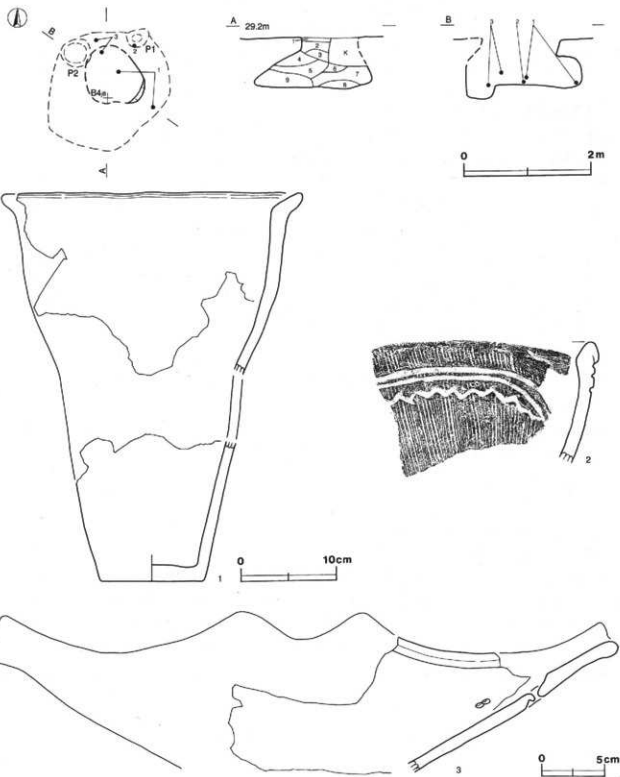
覆土 9層に分層される。覆土下層は不規則な堆積状況を呈し、大形のL器片が覆土下層に廃棄されたような状態で出土していることから、覆土下層は廃棄活動に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
| 2 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼七粒了・炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子少量、炭化物微量、ローム小ブロック・ローム粒子微量 | 7 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子微量 | 8 暗褐色 | ローム粒子少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| | | 9 褐色 | ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子・鹿沼ハミス粒子微量 |

遺物 縄文土器片29点が出土している。このうち、縄文土器3点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から底部にかけての破片、2は深鉢の口縁部片、3は浅鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、いずれも覆土下層から出土している。

所見 図示した土器は、本跡の廃絶時から覆土下層堆積時にかけて一括廃棄されたものと思われる。時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第343図 第402号土坑・出土遺物実測図

第402号土坑出土遺物観察表 (第343回)

調査番号	器種	計測値(cm)	形状及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 31.4	口縁部及び胴部から底部にかけての破片。胴部は双層的に立ち上がり、口縁部は聞きながら内傾する。口唇部は外傾して突出し、内面に稜を有する。無文でよく研磨している。	長石・石英・雲母 黒色 (上半) にぶい褐色 (下半) 貫通	P1104 40% 外周上半スチラス
		B 40.6			
		C 10.9			
2	深鉢 縄文土器	B (6.3)	口縁部片。口縁部は聞きながら内傾する。口唇部直下に陸帯を隔らし、陸帯によるV字状文を施している。クシ状ノミによる条線文を施文とし、陸帯に沿って沈線文を施している。	長石・石英・雲母 黒色 貫通	T P1053 5%
		A 47.0 B (10.3)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾し、口縁部に至る。液状口縁を呈し、口縁部内面に稜を有する。無文。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 貫通	P1105 10% 口縁部内面赤彩 胴部に縮痕あり

第403号土坑 (第344~346回)

位置 調査1区の中央部, B4h3区。

規模と平面形 平面形は長径2.98m, 短径2.46mの楕円形で、深さは68cmである。

壁 ほは直立し、西壁の一部は内傾する。

底 ほは平坦である。

ピット 7か所。P1は中央部に位置し、径30cmの円形で、深さ88cmである。P2は北壁際、P3は東壁際、P4は南壁際、P5は西壁際にそれぞれ位置し、いずれも中央部に向かって内傾している。P2は径34cmの円形で、深さ62cmである。P3は長径38cm, 短径28cmの楕円形で、深さ56cmである。P4は径34cmの円形で、深さ72cmである。P5は長径76cm, 短径46cmの楕円形で、深さ63cmである。P6・7は中央部付近に位置し、P1よりは小形である。P6は長径33cm, 短径29cmの楕円形で、深さ45cmである。P7は長径25cm, 短径22cmの楕円形で、深さ45cmである。

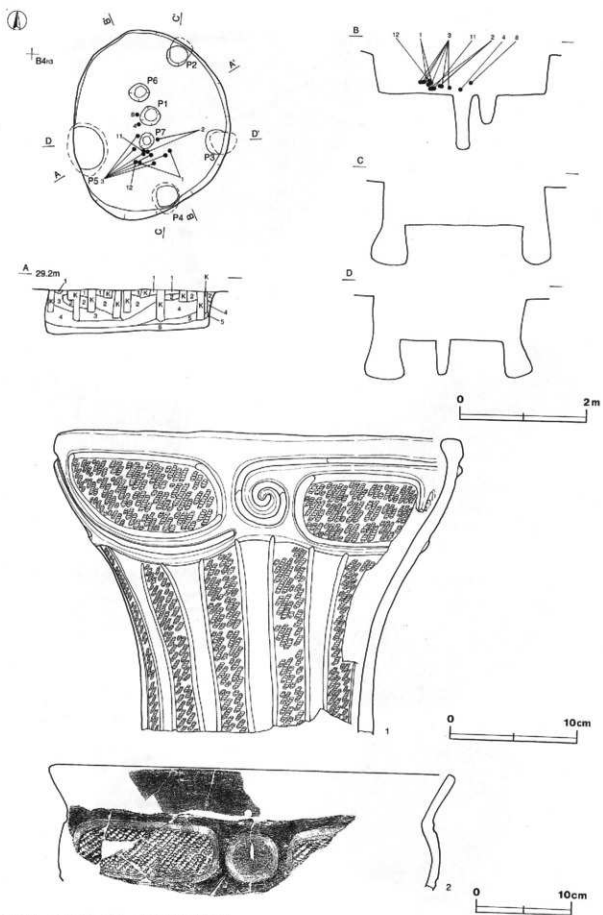
覆土 6層に分層される。大形の土器片が覆土下層に廃棄されたような状態で出土していることから、覆土下層は廃棄活動に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

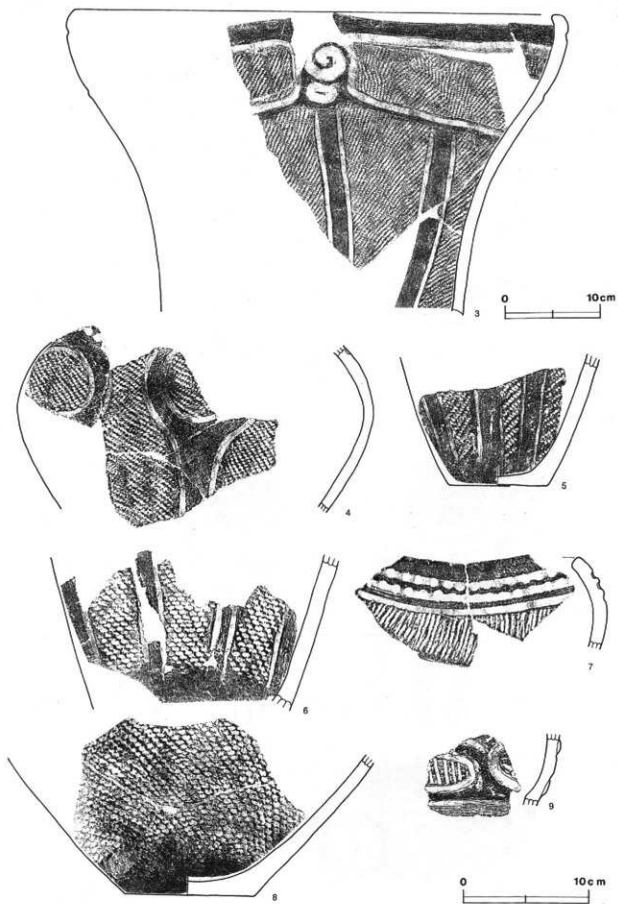
- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 出褐色 ローム粒子少量, 炭化物・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック少量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量
- 6 黒褐色 ローム粒子微量

遺物 縄文土器片283点が主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。このうち、縄文土器12点を抽出・図示した。1・3は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片, 2は深鉢の口縁部片, 4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片, 8は鉢の胴部から底部にかけての破片, 11は深鉢の頸部から胴部にかけての破片, 12は鉢の口縁部片で、いずれも覆土下層から出土している。5は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 6は深鉢の胴部片, 7・9は深鉢の口縁部片, 10は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

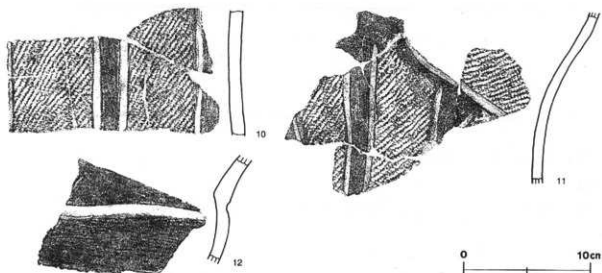
所見 大形の土器片は、本跡の覆土下層堆積時に一括廃棄されたものと思われる。本跡の廃絶時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第344图 第403号土坑·出土遗物实测图



第345图 第403号土坑出土遗物实测图(1)



第346図 第403号土坑出土遺物実測図(2)

第403号土坑出土遺物観察表(第344~346図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・装成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 31.2 B (23.7)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で外反し、口縁部は開きながら内彎する。口縁部には沈線が沿う隆帯による大形の流布文を4単位施し、その間に楕円形区画文を形成している。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はRLの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 良好	P1107 40% P.L.35 内面灰化物付着
2	浅 縄文土器	A [41.2] B (12.3)	口縁部片、口縁部は内彎し、口縁上部で屈曲して外傾する。口縁上部は無文帯を形成し、よく磨り消している。口縁部には隆帯と沈線による円形と楕円形の区画文を形成し、地文としてRLの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P1108 10%
3	深鉢 縄文土器	A [51.0] B (32.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で外反し、口縁部は開きながら内彎する。口縁部には隆帯と沈線による大形の流布文を4単位施し、その間に楕円形区画文を形成している。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はRLの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P1106 30% P.L.35
4	鉢 縄文土器	B (13.2)	口縁部付近から胴部にかけての破片。胴部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。最大径は胴部上位にある。口唇部は欠損しているが、口縁部付近には円形刺突文を連続させて磨り消している。胴部上位には沈線による円形文を施し、円形文を磨り消すように沈線文を重下させ、その間を磨り消している。地文としてLRの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1110 10%
5	深鉢 縄文土器	B (10.0) C 6.8	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はRLの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	P1112 10%
6	深鉢 縄文土器	B (12.4)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はLRの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1109 10%
7	深鉢 縄文土器	B (7.3)	口縁部片。口縁部は内彎する。口唇部直下に3本の沈線を通り、円形刺突文を連続させて施している。地文として熟赤文を施している。	長石 にぶい褐色 普通	T P1054 5%
8	鉢 縄文土器	B (10.7) C 10.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。LRの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P1111 10%
9	深鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部付近の破片。口縁部は開きながら内彎する。口縁部には隆帯と沈線による楕円形区画文を形成し、区画文内は短沈線を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P1055 5%
10	深鉢 縄文土器	B (9.8)	胴部片。胴部は外反する。胴部は沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はRLの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P1057 5%

図版番号	器種	寸法(㎝)	器形及び文様の特徴	胎土・色澤・施成	備考
11	深鉢 縄文土器	B (13.5)	胴部から胴部にかけての破片、胴部は直線的に立ち上がり、肩部は外反する。胴部には足跡による彫文を帯り消している。胎文はRの半輪縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 黄褐色	T P 1056 5%
12	鉢 縄文土器	B (8.6)	口縁部片、口縁部は内巻し、口縁上部で傾斜して外傾する。胎文で、よく研磨している。	長石・石英・雲母 凝灰色 良好	T P 1058 5% 口縁上部内・外面 赤彩

第418号土坑 (第347・348図)

位置 調査1区の南西部、C 4 e4区。

規模と平面形 平面形は長径3.02m、短径2.12mの楕円形で、深さは35cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 はほぼ平坦である。

ピット 3か所。いずれも中央部から東壁寄りに位置し、深さは浅い。P 1は長径32cm、短径26cmの楕円形で、深さ12cmである。P 2は長径40cm、短径34cmの楕円形で、深さ7cmである。P 3は長径24cm、短径23cmの円形で、深さ7cmである。

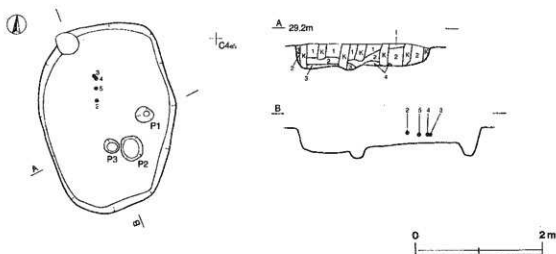
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

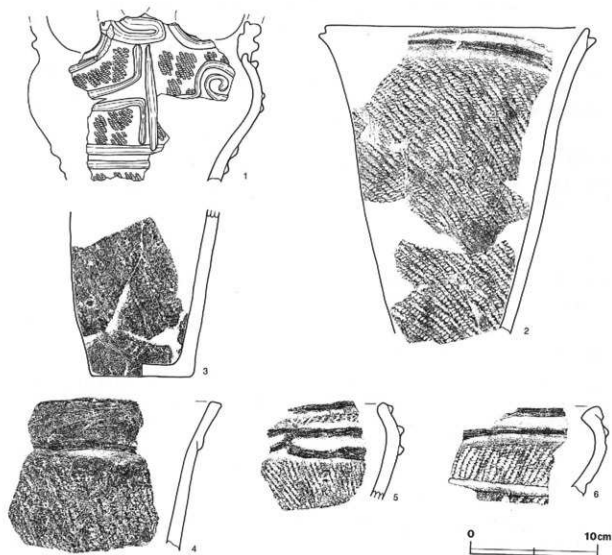
- 1 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器片142点が上に覆土中層から廃棄されたような状態で出土している。このうち、縄文土器6点を抽出・図示した。2と4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、3は深鉢の胴部から底部にかけての破片、5は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土中層から出土している。1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、6は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 図示した土器は、本跡の覆土中層堆積時に一括廃棄されたものと思われる。本跡の廃絶時期は、一括廃棄された覆土中層堆積時とほとんど時間差がないと判断できることから、その出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と思われる。



第347図 第418号土坑実測図



第348図 第418号土坑出土遺物実測図

第418号土坑出土遺物観察表 (第348図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [16.0] B (12.6)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外反し、口縁部は内彎する。把手は欠損するが、孔を有する把手であると推定される。口唇部直下と頸部に陰帯を巡らして口縁部を区画し、口縁部には陰帯により文様を描出している。地文はLRの単節縄文で、縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P1113 10%
2	深鉢 縄文土器	A [20.8] B (24.3)	口縁部から頸部にかけての破片。胴部はわずかに開きながら直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口唇部直下に陰帯を巡らしている。LRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒色(上半) にふい褐色(下半) 普通	P1114 20% 内面灰化物附着
3	深鉢 縄文土器	B (13.7) C 8.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1115 20%
4	深鉢 縄文土器	B (11.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁部と胴部の境に段を有し、口唇部は無文帯としている。胴部はLの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1065 5%
5	深鉢 縄文土器	B (7.5)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下に陰帯を巡らし、口縁部には陰帯により文様を描出している。地文はLの無節縄文で、口唇部直下には横方向に、口縁部には縦方向に施している。	長石・石英 黒色 普通	T P1066 5%

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部片、口縁部は開きから内響する。口縁部には沈線が沿う隆帯により区画文を施している。地文としてRLの単純縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 良好	T P1067 5%

第423号土坑 (第349図)

位置 調査1区の中央部, B5jl区。

重複関係 本跡は第424号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 開口部は長径1.84m, 短径1.68mの円形で, 底面は長径2.48m, 短径2.42mの円形で, 深さは100cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

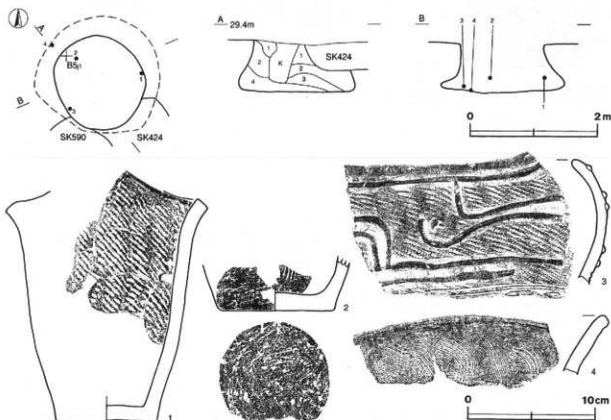
覆土 4層に分層され, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・産沼バミス粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片67点が出土している。このうち, 縄文土器片4点を抽出・図示した。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から底部にかけての破片, 2は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 3は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片, 4は壺の口縁部片で, いずれも覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第349図 第423号土坑・出土遺物実測図

第423号土坑出土遺物観察表 (第349図)

図版番号	器 種	計測値(cm)	形状及び文様の特徴	胎土・色調・装成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A [14.4] B [18.0]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は聞きながらわずかに内厚して立ち上がり、口縁部は外反する。浅灰11層を呈しているが、破片部の形跡は欠損しているため不詳である。1.の原始縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1116 40% P L 35
2	深鉢 縄文土器	B (4.5) C 9.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。熟赤文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1117 10% 底部に側代痕
3	深鉢 縄文土器	B (9.7)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は内厚する。口縁部底下及び口縁部と胴部との境に隆帯を帯出し、口縁部には本一取の隆帯により文様を提出している。胴部には半炭竹管による平行沈線文を施している。地文としてLRの原始縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい小褐色 良好	TP1068 10%
4	盆 縄文土器	B (4.7)	口縁部片。口縁部は外反する。クシ状工具による波状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	TP1069 5%

第434号土坑 (第350・351図)

位置 調査1区の西部、C4b6区。

重複関係 本跡は第446号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。本跡と第19号住居跡の新旧関係は、出土遺物から本跡が古い。本跡と第18号住居跡、第435号土坑は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡は第446号土坑に掘り込まれているため、開口部は長径1.28m、短径1.16mの円形と推定され、底部は長径2.24m、短径2.04mの円形である。深さは60cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

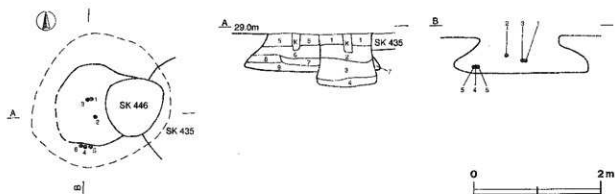
底 はほぼ平坦である。

覆土 第1～4層は第446号土坑の覆土であり、第5～9層が本跡の覆土である。5層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック少量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量、第6層より明るい
- 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム小ブロック微量

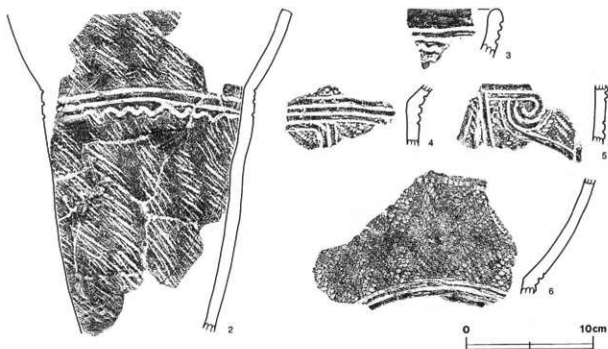
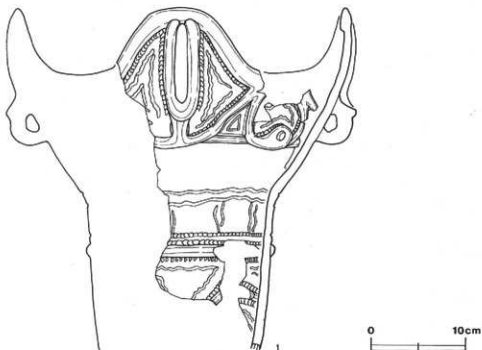
遺物 縄文土器片178点が出土している。このうち、縄文土器片6点を抽出・図示した。1は大波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2は深鉢の頸部から胴部にかけての破片、3は口縁部片で、いざ



第350図 第434号土坑実測図

れも覆土中層から出土している。4～6は同一個体の深鉢で、4・6は頸部片、5は胴部片で、覆土下層から出土している。また、1と同一個体の深鉢片が第307号土坑から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第351図 第434号土坑出土遺物実測図

第434号土坑出土遺物観察表 (第351図)

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色表・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A { 34.8 } B { 36.4 }	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で彎曲して外傾し、口縁部は直まがらずかに内彎する。4單位の大波状口縁を呈し、波頂部は先みを帯びた山形状を呈する。口縁部は隆帯により文様を抽出し、波頂部に筒状把手を、波状部下部に塔状の突起を描いている。隆帯に沿ってペン先状1.1㎝より絞筋沈線文を抽出している。頸部は隆帯により文様を抽出し、隆帯に沿って爪形文を描いている。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	P1119 25%
2	深鉢 縄文土器	B { 25.5 }	頸部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で彎曲して外傾する。頸部と胴部の境に沈線を描いている。地文としてLの基筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 (上半) にぶい褐色 (下半) 普通	P1120 30%
3	深鉢 縄文土器	B { 4.0 }	口縁部片。口縁部は直まがらずに内彎する。口唇部直下に沈線を描き、地文としてR Lの単筋縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	T P1073 3%
4	深鉢 縄文土器	B { 5.0 }	頸部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で彎曲して外傾する。頸部と胴部の境に半截竹管による平行沈線文を施し、胴部は半截竹管による平行沈線文により文様を抽出している。地文としてR Lの単筋縄文を施文方向を変えて波状縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒色 良好	T P1075 3% T P1074-1075と同一体
5	深鉢 縄文土器	B { 5.0 }	頸部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部は半截竹管による平行沈線文により文様を抽出している。地文としてR Lの単筋縄文を施文方向を変えて波状縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	T P1076 3% T P1074-1075と同一体
6	深鉢 縄文土器	B { 9.1 }	胴部片。胴部は外傾する。隆帯が施された胴部に沿って絞筋沈線文を施している。頸部と胴部の境に半截竹管による平行沈線文を施し、地文としてR Lの単筋縄文を施文方向を変えて波状縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒色 良好	T P1074 5%

第436号土坑 (第352図)

位置 調査1区の西部、C4b7区。

重複関係 本跡は第435号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。本跡と第18・19号住居跡は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡は第435号土坑と重複しているため、開口部は長径1.75m、短径1.46mの楕円形と推定され、底面は長径2.22m、短径2.12mの円形である。深さは44cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は南東隅寄りに位置し、長径48cm、短径39cmの円形で、深さは36cmである。

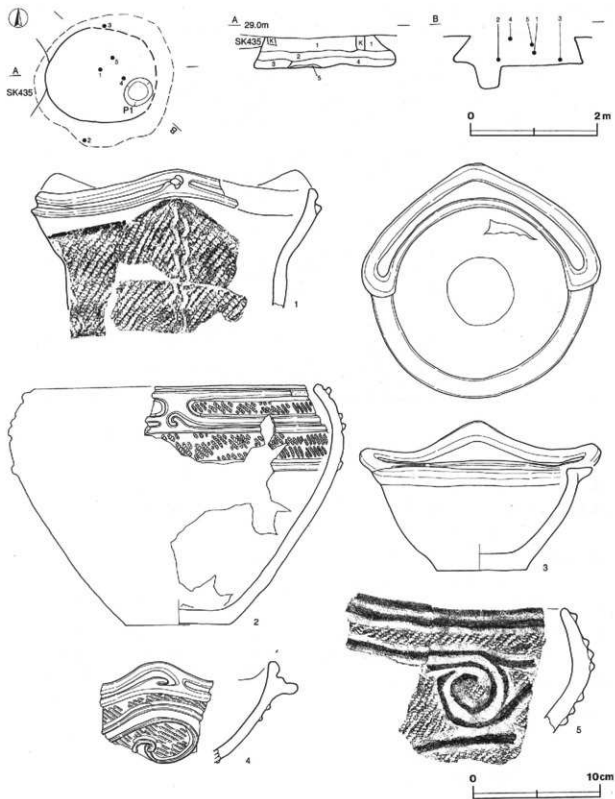
覆土 5層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 炭化物少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭活バミス粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭活バミス中ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・炭活バミス粒子微量

遺物 縄文土器片80点が出土している。このうち、縄文土器片5点を抽出・図示した。1は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2は鉢の口縁部から底部にかけての破片、3はほぼ完形の鉢で、いずれも覆土下層から出土している。4は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片、5は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曽利E I 式期)と考えられる。



第352图 第436号土坑·出土器物实测图

第436号土坑出土遺物観察表 (第352図)

図面番号	器 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・装成	備 考
1	深 鉢 縄文土器	A [21.4]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は開きながらわずかに内彎する。3単位の波状口縁を呈し、波頂部は丸みを帯びた山形状を呈する。波頂部直下には別突起を施し、口唇部直下に隆帯と沈帯を施している。器面にはR Lの扉部縄文を縦方向に施し、波頂部下と波底部下に2条の波線文を垂下させている。	長石・石英 黒褐色 青油	P 1121 15%
		B (11.0)			
2	鉢 縄文土器	A [21.9]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。口唇部直下及び口唇部と胴部の間に隆帯を施し、口唇部文飾帯を形成している。文様部内には沈帯が約2本一組の隆帯により文様を抽出し、文様の交点に染帯文を施している。地文としてR Lの扉部縄文を横方向に施している。胴部は無文でよく簡素化している。	長石・石英 黒褐色 青油	P 1122 30%
		B (18.9)			
		C 8.4			
3	鉢 縄文土器	A 17.2	胴部一部欠損。胴部は開きながら内彎して立ち上がり、口縁部に至る。3単位の波状口縁を呈し、内1単位は大形である。波状口縁の内面には口唇部直下に隆帯を施している。無文でよく簡素化している。	長石・石英 灰褐色 青油	P 1123 95% P L 35
		B 11.9			
		C 7.1			
4	深 鉢 縄文土器	B (10.0)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。波状口縁を呈し、波頂部には隆帯と沈帯により染帯文を施している。口唇部には隆帯により染帯文を施している。地文としてLの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 青油	P 1124 5%
5	深 鉢 縄文土器	B (9.7)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下及び口唇部と胴部の間に隆帯を施し、口唇部文飾帯を形成している。文様部内には2本一組の隆帯により染帯文を施している。地文としてR Lの扉部縄文を縦方向に施している。	長石・石英 暗赤褐色 良好	T P 1077 5%

第444号土坑 (第353図)

位置 調査1区の中央部、C 5a1区。

重複関係 本跡は第421号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第421号土坑に掘り込まれているため、開口部は長径1.04m、短径0.98mの円形と推定され、底面は長径1.30m、短径1.20mの円形である。深さは74cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1はほぼ中央部に位置し、長径56cm、短径44cmの楕円形で、深さは56cmである。

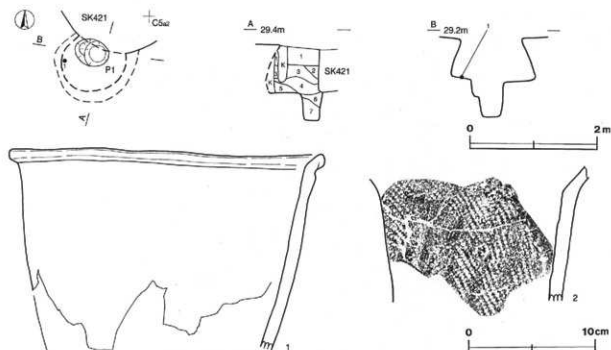
覆土 7層に分層され、第6・7層はP1の覆土である。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 和暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス粒少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス粒少量

遺物 縄文土器片64点が出土している。このうち、縄文土器2点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、覆土下層から出土している。2は深鉢の頸部から胴部にかけての破片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第353図 第444号土坑・出土遺物実測図

第444号土坑出土遺物観察表 (第353図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 24.4 B (15.9)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口唇部外面は肥厚して突出し、内面に稜を有する。無文で、よく研磨している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P 1125 30% P L 35
2	深鉢 縄文土器	B (10.7)	頸部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾する。LRの準縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 1126 10%

第446号土坑 (第354図)

位置 調査1区の西部, C 4 b6区。

重複関係 本跡が第434・435号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。本跡と第18・19号住居跡は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は長径0.96m、短径0.90mのほぼ円形で、深さは84cmである。

壁 わずかにフラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

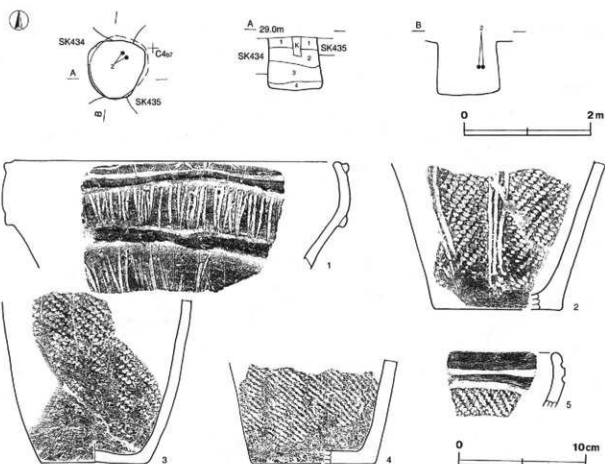
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子微量

遺物 縄文土器片97点が出土している。このうち、縄文土器片5点を抽出・図示した。2は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、覆土中層から出土している。1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、3は深鉢の胴部から底部にかけての破片、4は深鉢の胴部から底部にかけての破片、5は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I 式期)と考えられる。



第354図 第446号土坑・出土遺物実測図

第446号土坑出土遺物観察表 (第354図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [26.4] B (8.5)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部は内彎する。口唇部直下及び口縁部と頸部の境に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。地文として浅い沈線文を縦方向に連続させて施している。	長石・石英 灰褐色 良好	P1127 10% P2017と同一体
2	深鉢 縄文土器	B (11.7) C [10.4]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。3本一組の沈線文を懸垂させ、地文としてR Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 褐色 良好	P1128 10%
3	深鉢 縄文土器	B (12.9) C 8.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。L R Lの複節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P1129 15%
4	深鉢 縄文土器	B (8.3) C 9.8	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。L Rの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P1130 5%
5	深鉢 縄文土器	B (4.3)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。L1縁部には隆帯と沈線により文様を演出している。地文としてR Lの単節縄文を横方向に施している。	長石・石英 褐灰色 普通	T P1078 3%

第448号土坑 (第355・356図)

位置 調査1区の中央部、B 5j2区。

規模と平面形 開口部は長径1.13m、短径1.08mの円形、底面は長径2.18m、短径1.90mの円形で、深さは106cmである。

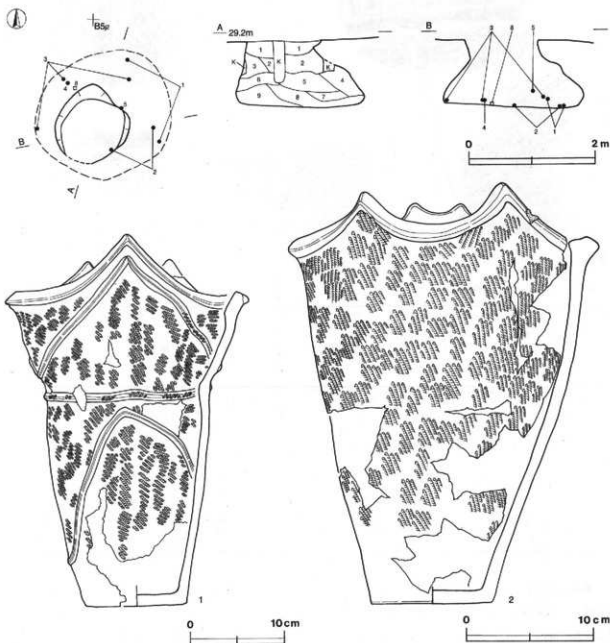
壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

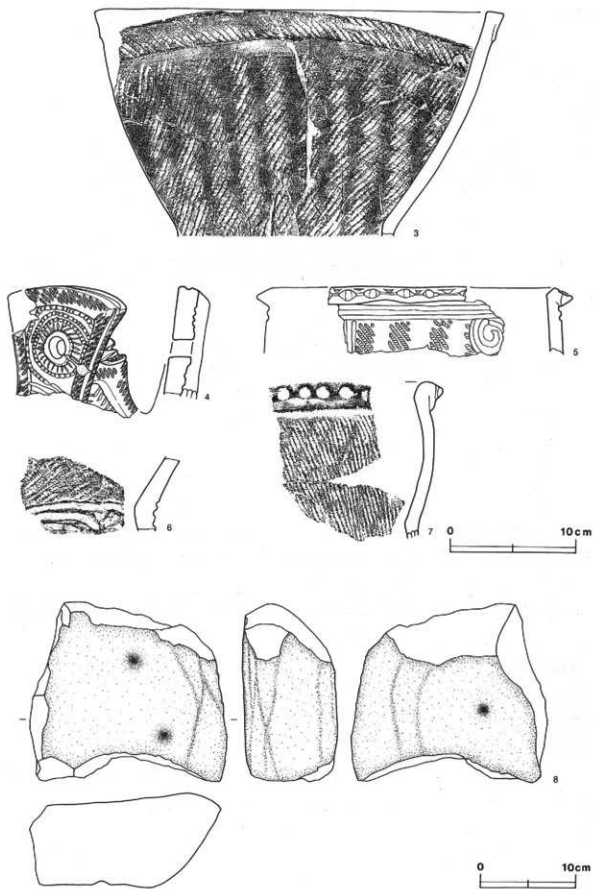
覆土 9層に分層され、覆土下層は褐色を呈し、ローム粒子を多量に含むこと、ほぼ完形の土器や大形破片が覆土下層から廃棄されたような状態で出土していることから、覆土下層は人為地積と考えられる。

土層解説

- 1 柿褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 8 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化物・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量



第355図 第448号土坑・出土遺物実測図



第356图 第448号土坑出土文物实测图

遺物 縄文土器片211点、石皿片1点が主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。このうち、縄文土器片7点、石皿片1点を図示した。1・2は2単位の波状口縁を呈する深鉢、3は下半部が欠損する深鉢、4は大波状口縁を呈する口縁部片、5は深鉢の口縁部片、8は石皿片で、いずれも覆土下層から出土している。6は深鉢の頸部片、7は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期)と考えられる。

第448号土坑出土遺物観察表(第355~356図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	土質・包埋・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 23.2	ほぼ完形。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は屈曲して外傾する。2単位の波状口縁を呈し、内1単位の波頂部は取面となる。口縁部と胴部には隆帯による波状文を施し、地文としてL Rの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上平) 普通	P1131 95% P L 36
		B 39.2			
		C 10.8			
2	深鉢 縄文土器	A 23.2	口縁部及び胴部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。2単位の波状口縁を呈し、どちらも波頂部は取面である。口唇部外面は肥厚して突出し、内面に縦を有する。Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上平) 普通	P1132 70% A面下平反物片有 P L 36
		B 33.0			
		C 9.6			
3	深鉢 土器	A 32.4 B (17.9)	胴部下平欠損。胴部で屈曲して外傾し、口縁部に至る。口縁部は肥厚している。口縁部にはR Lの単節縄文を横方向に、頸部にはR Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1133 40% P L 35
		B (9.9)			
4	深鉢 土器	B (9.9)	大波状口縁を呈する波頂部片。波頂部の形態は扇状を呈し、中央に径1.3cmの孔を有する。口唇部底下に隆帯を施し、波頂部から隆帯を有する隆帯を垂下させている。孔及び隆帯に沿って糸割文を施し、ペン先状の工具による結節点線文により文様を抽出している。R Lの単節縄文を施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P1134 5%
		A [22.2] B (5.3)			
5	深鉢 縄文土器	A [22.2] B (5.3)	口縁部片。口縁部は直立する。口唇部底下に押圧文を有する隆帯を施している。口縁部には沈線により文様を抽出し、地文としてL Rの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗灰色 普通	P1135 5%
		B (5.9)			
6	深鉢 縄文土器	B (5.9)	頸部片。胴部は外傾する。胴部と胴部の間に沈線を通らし、地文としてR Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗灰色 普通	T P 1080 5%
		B (12.3)			
7	深鉢 縄文土器	B (12.3)	口縁部片。口縁部はわずかに剛きながら内傾する。口唇部底下に押圧文を有する隆帯を施し、Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 ぶい褐色 普通	T P 1079 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
8	石皿	(18.8)	(20.1)	10.2	(5016.9)	砂	岩	自然石を素材。表・裏ともに凹石に転用。Q1003

第456号土坑(第357~359図)

位置 調査1区の南西部、C 4 h5j区。

重複関係 本跡は第1号堀に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は上部が第1号堀に掘り込まれているため、下部のみが残存している。第1号堀の底面で確認された平面形は長径2.24m、短径1.78mの楕円形と推定され、底面は長径2.92m、短径2.60の円形である。深さは44cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平川である。

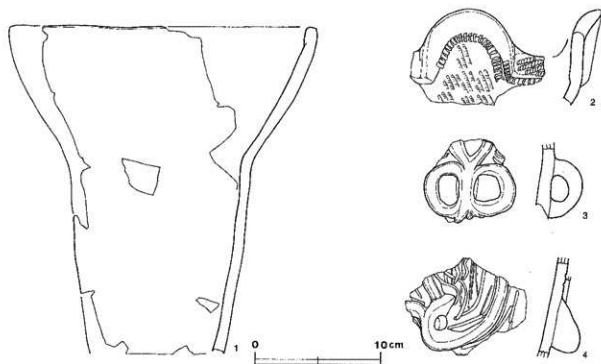
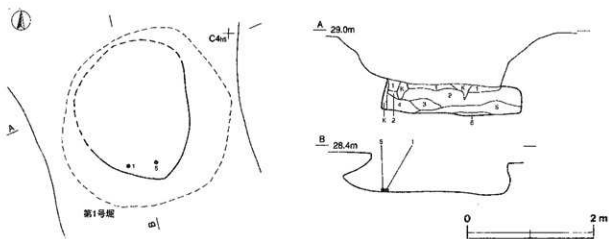
覆土 6層に分層され、ロームブロックを多く含んでいることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

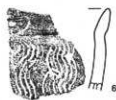
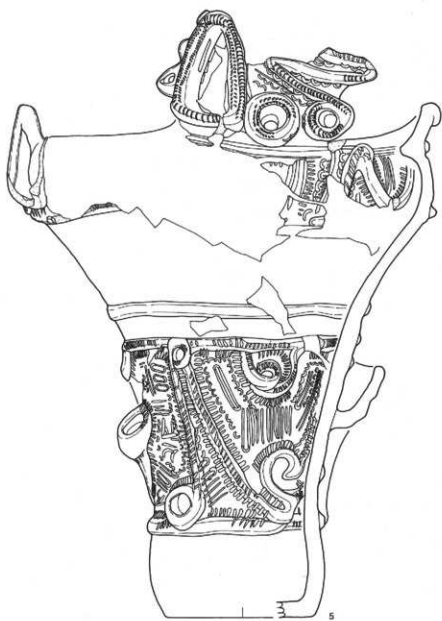
- 1 地相色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、炭化物・炭化灰土・炭泥パミス粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭泥パミス粒子中等、炭化物・炭化灰土少量
- 3 褐色 ローム粒子多量、炭泥パミス粒子少量、ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 6 黒褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片82点が出土している。このうち、縄文土器7点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、5は立体的な把手を有する深鉢で、いずれも底面から横位の状態で出土している。2・6は深鉢の口縁部片、3・4は深鉢の胴部片、7は深鉢の頸部片で、いずれも覆土から出土している。

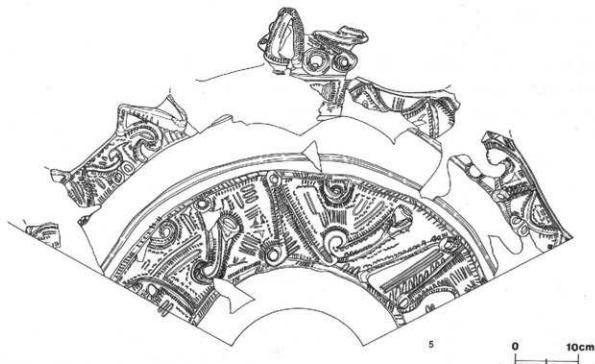
所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期)と考えられる。



第357図 第456号土坑・出土遺物実測図



第358图 第456号出土物实测图(1)



第359図 第456号土坑出土遺物実測図(2)

第456号土坑出土遺物観察表(第357~359図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [24.2] B (25.9)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾し、口縁部はわずかに内彎する。無文でよく研磨されている。	長石・石英・雲母 黒褐色(上手) におい赤褐色(下手) 普通	P1137 30%
2	深鉢 縄文土器	B (7.5)	半円状の突起を有する口縁部片。口縁部は凹きながら内彎する。口唇部直下に隆帯を巡らし、隆帯に沿って爪形文を施している。口唇部直下にはL及の単節縄文を横方向に、口縁部にはLの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 におい褐色 普通	P1139 5%
3	深鉢 縄文土器	B (6.2)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には縦線状の突起を有し、爪形文を施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	P1140 3%
4	深鉢 縄文土器	B (8.0)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部は隆帯により文様を露出し、文様の交点は塊状となる。沈線文と条線文を施している。	長石・石英・雲母 におい褐色 普通	P1141 3%
5	深鉢 縄文土器	A 32.2 B 42.7 C 11.8	口縁部及び底部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾し、口縁部は内彎する。4単位の把手を有し、内1単位は大形で環状突起とキザミを有する隆帯で文様を露出している。口縁部は口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。口縁部文様帯はキザミを有する隆帯で波状文を施し、その波状文によって形成された三角形の区画内にはキヤクピラー文と沈線で加飾している。胴部は無文である。胴部は頸部と胴部の境及び胴部下部に隆帯を巡らし、胴部文様帯を形成している。胴部文様帯は環状突起とキザミを有する隆帯で不整三角形の区画文を施し、区画内にはキヤクピラー文と沈線で加飾している。	長石・石英 におい赤褐色 普通	P1136 70% P L 36
6	深鉢 縄文土器	B (6.4)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。口唇部は肥厚し、無文である。口縁部にはクシ状工具による波状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1081 3%
7	深鉢 縄文土器	B (6.8)	頸部片。頸部は外傾する。頸部と胴部の境に隆帯を巡らし、隆帯に沿って結節沈線文を施している。頸部には沈線により波状文を巡らしている。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	T P 1082 5%

第457号土坑 (第360・361図)

位置 調査1区の南西部, C4e4区。

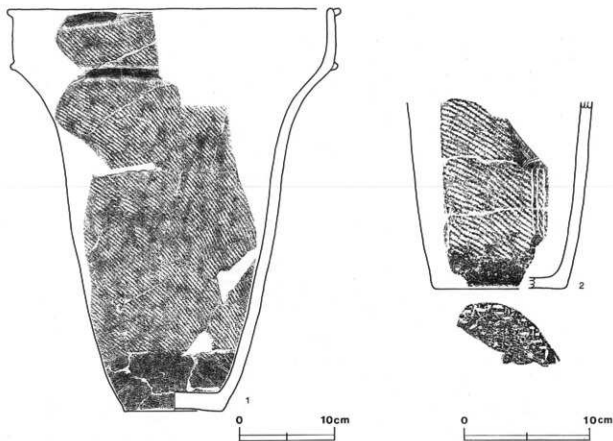
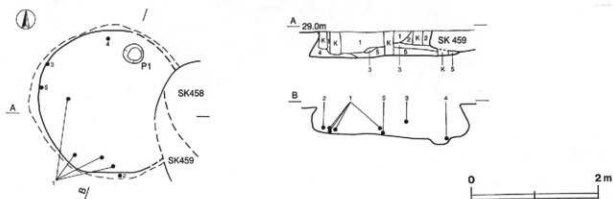
重複関係 本跡は第458・459号土坑に掘り込まれていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第459号土坑に掘り込まれているため, 開口部は長径2.38m, 短径2.24mの円形で, 底面は長径2.60m, 短径2.40mの円形と推定される。深さは60cmである。

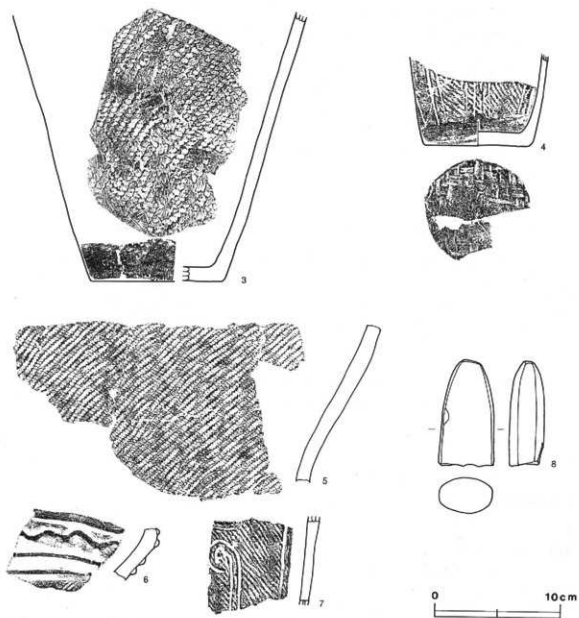
壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は北壁寄りに位置し, 径32cmほどの円形で, 深さ12cmである。



第360図 第457号土坑・出土遺物実測図



第361図 第457号土坑出土遺物実測図

覆土 5層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子多量

遺物 縄文土器片207点、磨製石斧1点が出土している。このうち、縄文土器7点、磨製石斧1点を抽出・図示した。1は口縁部の一部が欠損する深鉢、2・4は深鉢の胴部から底部にかけての破片、5は深鉢の頸部片で、いずれも覆土下層から出土している。3は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、覆土中層から出土している。6は深鉢の口縁部付近の破片、7は深鉢の胴部片、8は磨製石斧で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。

第457号土坑出土遺物観察表 (第360・361図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [34.0]	口縁部及び胴部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で外反し、口縁部は直立する。口唇部点下及び口縁部と胴部の境に隆帯を流らしている。胎文としてL,Rの半印縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) ぶい褐色(下半) 普通	P1142 75% P L 36
		B 42.5			
		C 10.6			
2	深鉢 縄文土器	B [15.2]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。半截竹管による平行沈線文を垂下させ、胎文としてL,Rの半印縄文を縦方向に施している。	長石・石英 ぶい褐色 普通	P1187 10% 底部に割代痕
		C 10.6			
3	深鉢 縄文土器	B [20.8]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。R L,Rの縦印縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) 明赤褐色(下半) 普通	P1144 20%
		C 10.4			
4	深鉢 縄文土器	B [7.4]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。半截竹管による平行沈線文を垂下させ、胎文としてLの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 ぶい褐色 良好	P1186 10% 底部に割代痕
		C [8.4]			
5	深鉢 縄文土器	B [13.0]	胴部。胴部は外傾する。R Lの半印縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	TP1087 5%
6	深鉢 縄文土器	B [5.1]	口縁部付近の破片。口縁部は開きながら内傾する。口縁部と胴部の境に2本一組の隆帯を流らし、口縁部に隆帯による波状文を流している。	石英・雲母・砂粒 黒褐色 良好	TP1084 3%
7	深鉢 縄文土器	B [7.0]	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。半截竹管による平行沈線文により文様を構成し、胎文としてLの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 ぶい褐色 良好	TP1085 3%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
8	磨製石斧	(8.4)	4.4	2.8	(171.8)	緑色炭灰岩	刃部欠損。定向式。	Q1004

第458号土坑 (第362図)

位置 調査1区の南西部、C 4区5区。

重複関係 本跡は第459・460号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。本跡と第457号土坑は重複するが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.06m、短径1.78mの楕円形で、深さは28cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 はほぼ平坦である。

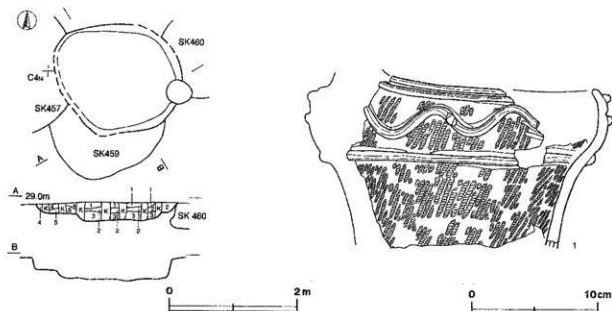
覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック散見
- 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒散見
- 暗褐色 ローム粒子・焼土粒散見

遺物 縄文土器片91点が出土している。このうち、縄文土器1点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第362図 第458号土坑・出土遺物実測図

第458号土坑出土遺物観察表 (第362図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [22.0] B (12.3)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で外反し、口縁部は内彎する。口縁部が一部波状となることから、口縁部に把手を有する可能性がある。口唇部直下及び口縁部と胴部の境には降巻を認め、口唇部には降巻による波状文を施している。地文としてRLの半形縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	P1145 20%

第460号土坑 (第363図)

位置 調査1区の西部、C4e5区。

重複関係 本跡は第458号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第458号土坑に掘り込まれているため、開口部は長径1.42m、短径1.14mの楕円形と推定され、底面は長径1.58m、短径1.42の楕円形である。深さは42cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は、北壁際に位置し、長径34cm、短径25cmの楕円形で、深さ35cmである。

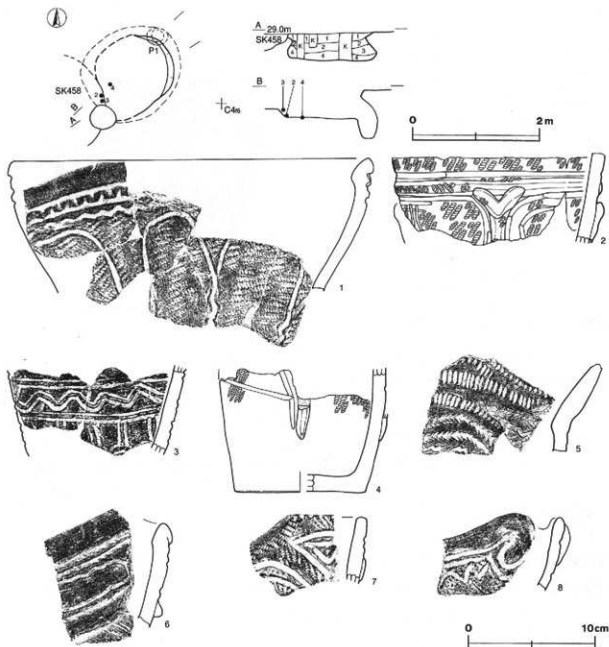
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼し粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土小ブロック・焼し粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片112点が出土している。このうち、縄文土器片8点を抽出・図示した。2は深鉢の胴部片、4は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、いずれも底面から出土している。3は深鉢の胴部片で、覆土下層から出土している。1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、5～8は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台IV式期)と考えられる。



第363図 第460号土坑・出土遺物実測図

第460号土坑出土遺物観察表（第363図）

図版番号	器 種	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A [28.0] B (10.4)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部はわずかに内傾する。口縁部直下に交互斜突による連続コの字状文を施している。頸部は沈線により文様を描出している。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1148 5%
2	深鉢 縄文土器	B (7.1)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部に隆帯を巡らし、その隆帯からY字状文を垂下させている。隆帯に沿って沈線文を施している。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1147 5%
3	深鉢 縄文土器	B (7.1)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部に半截竹管により平行沈線文と波状文を巡らしている。	長石・石英・雲母 灰黄褐色 普通	P1149 5%

区画番号	器 種	許容径(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・施成	備 考
4	深鉢 縄文土器	B (9.8)	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部に3単位の隆帯を懸垂させ、隆帯に沿って沈線文を施している。施文としてR Lの半筋縄文を縦方向に施している。	灰石・雲母・小礫 灰褐色 普通	P 1150 10%
		C 10.3			
5	深鉢 縄文土器	B (7.1)	小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾し、内側に閉塞な襷を有する。口唇部直下は肥厚してキザミを施し、肥厚した口縁に沿ってペン先状工具による結節状沈線文を施している。	灰石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P 1089 5%
6	深鉢 縄文土器	B (8.2)	波状口縁を呈する口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は外傾し、内面に襷を有する。口唇部直下と口縁部に隆帯を有する。口唇部直下帯を形成し、隆帯に沿って沈線文を施している。頸部にはクシ状工具により条線文を施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1088 5%
7	深鉢 縄文土器	B (5.7)	小波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部にはキザミを施し、隆帯により文様を突出している。R Lの半筋縄文を施文とし、隆帯に沿って沈線文を施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1090 3%
8	深鉢 縄文土器	B (5.8)	双頭の波状口縁を呈する口縁部片。口唇部は外傾する。口唇部直下と隆帯を有する。隆帯に沿って沈線文を施している。施文としてLの半筋縄文を施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P 1091 3%

第461号土坑 (第364・365図)

位置 調査1区の中央部、C 4 b9区。

重複関係 本跡は第398・663号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 開口部は長径1.46m、短径1.35mの円形で、底面は長径1.90m、短径1.68mの楕円形と推定される。深さは72cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

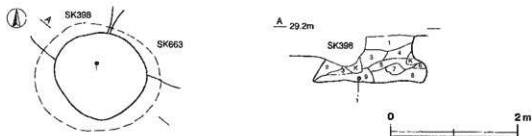
覆土 9層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

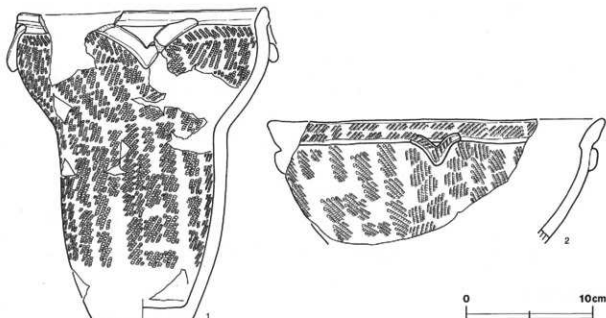
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器片51点が出土している。このうち、縄文土器2点を抽出・図示した。1は口縁部と胴部の一部が欠損する深鉢で、底面から出土している。2は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台IV式期)と考えられる。



第364図 第461号土坑実測図



第365図 第461号土坑出土遺物実測図

第461号土坑出土遺物観察表 (第365図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 19.4 B 24.9 C 7.8	口縁部・頸部一部欠損。頸部は直線的に立ち上がり、頸部で閉鎖して外傾し、口縁部は内傾する。口唇部直下に陰帯を巡らし、口縁部に陰帯による4単位のV字状文を施している。地文はR Lの単節縄文で、口縁部の一部は横方向、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P1151 70% P L 35
2	深鉢 縄文土器	A [27.0] B (9.8)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部は短く外反する。口唇部直下に陰帯を巡らし、口縁部に陰帯による4単位のV字状文を施している。地文はLの無節縄文で、口唇部直下は横方向、それ以外は主に縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1152 10%

第474号土坑 (第366図)

位置 調査1区の南東部, C 6 e7区。

規模と平面形 開口部は長径1.70m, 短径1.54mの楕円形, 底面は長径1.66m, 短径1.56mの円形で, 深さは103cmである。

壁 ほぼ直立する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は, 南東壁際に位置し, 長径40cm, 短径29cmの楕円形で, 深さは10cmである。

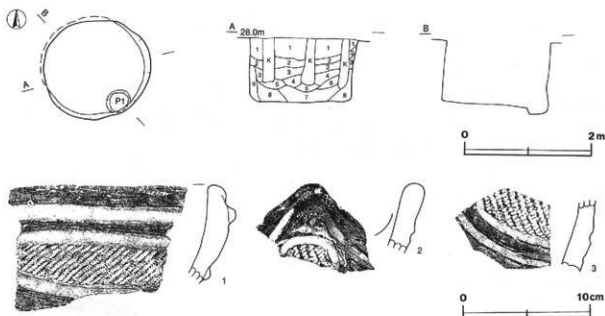
覆土 9層に分層される。覆土中層(第4～6層)はロームブロックを多く含んでいることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- 黒褐色 炭化粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物微量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 褐色 ローム小ブロック中量, ローム中ブロック・ローム粒子少量, 鹿沼パミス粒子微量
- 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量, ローム粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片31点が出土している。そのうち縄文土器片3点を抽出・図示した。1・2は深鉢の口縁部片、3は深鉢の口縁部付近の破片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第366図 第474号土坑・出土遺物実測図

第474号土坑出土遺物観察表 (第366図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (7.9)	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。地文としてR Lの単節縄文を縦方向に施し、隆帯と沈線により長楕円形の区画文を形成している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	TP1093 5%
2	深鉢 縄文土器	B (5.7)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は開きながらわずかに内彎する。地文としてR Lの単節縄文を横方向に施し、沈線により文様を突出している。	長石・石英 黒褐色 良好	TP1094 5%
3	深鉢 縄文土器	B (6.0)	口縁部付近の破片。口縁部は開きながらわずかに内彎する。地文としてR Lの単節縄文を横方向に施し、沈線により文様を突出している。	長石・石英 黒褐色 良好	TP1095 5%

第509号土坑 (第367図)

位置 調査1区の南部, C 4 d8区。

重複関係 本跡は第510・511号土坑を掘り込んでいるため本跡が新しく、第1号堀に掘り込まれているため本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第510・511号土坑、第1号堀と重複しているため、規模及び平面形はともに推定で、長径2.12m, 短径2.04mの円形である。深さは81cmである。

壁 ほぼ直立する。

底 ほぼ平坦である。

ピット 2か所。P1は南壁際に位置し、長径39cm, 短径35cmのほぼ円形で、深さは18cmである。P2は南西壁際に位置し、長径51cm, 短径48cmのほぼ円形で、深さは72cmである。

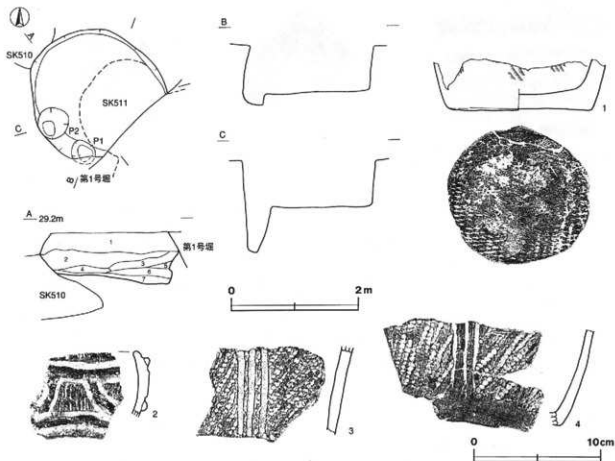
覆土 7層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量、焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 7 黒褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器片104点が出土している。そのうち縄文土器片4点を抽出・図示した。1と4は深鉢の胴部から底部にかけての破片、2は深鉢の口縁部片、3は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I～II式期)と考えられる。



第367図 第509号土坑・出土遺物実測図

第509号土坑出土遺物観察表(第367図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (4.0) C 11.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無繪縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母にぶい褐色 普通	P1153 10% 底部に朝代痕
2	深鉢 縄文土器	B (5.3)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。地文として条線文を縦方向に施し、沈線に沿う隆帯により文様を描出している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	TP1096 5%
3	深鉢 縄文土器	B (6.7)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。地文としてR Lの半節縄文を縦方向に施し、3条一組の沈線文を垂下させている。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	TP1098 5%

国政庁号	器 種	計測値 (cm)	彫形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
4	深鉢 縄文土器	B (7.6)	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。地文としてR.Lの黒鉛縄文を縦方向に施し、3条一組の沈線文を系下させている。	灰石・石灰・雲母にふい褐色 良好	TF1099 5%

第510号土坑 (第368・369図)

位置 調査1区の南部，C4d8区。

重複関係 本跡は第509号土坑に掘り込まれていることから本跡が古い。本跡と第457号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 本跡は第457・509号土坑と重複しているため、開口部付近は残存していない。くびれ部付近の平面形は長径1.08m，短径0.94mの円形，底面は長径2.62m，短径2.40mの円形である。深さは132cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

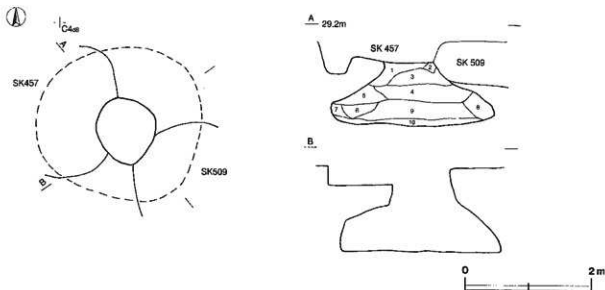
覆土 10層に分層され，覆土中層から下層にかけてはローム粒子を多く含む褐色土と暗褐色土が互層となって堆積していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

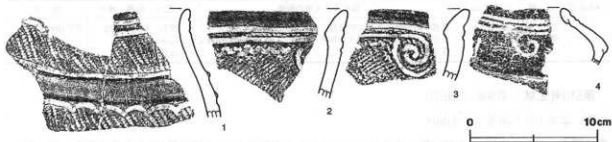
- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・炭化物微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
- 5 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック少量，炭化粒少量
- 7 暗褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック少量
- 8 褐色 ローム粒子多量，ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 9 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック微量
- 10 褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック少量，ローム大ブロック・ローム中ブロック微量

遺物 縄文土器片84点が出土している。そのうち縄文土器片4点を抽出・図示した。1～3は深鉢の口縁部片，4は鉢の口縁部片で，いずれも覆土から出土している。

所見 時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台IV式期)と考えられる。



第368図 第510号土坑実測図



第369図 第510号土坑出土遺物実測図

第510号土坑出土遺物観察表 (第369図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (8.7)	口縁部片。口縁部は内傾する。地文としてL Rの早節縄文を縦方向に施し、2本一組の縦帯を巡らしている。口唇部直下に縦帯に沿って短節沈線文を施している。	長石・石英 褐色 良好	TP1100 5%
2	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部片。口縁部は直立し、内面に稜を有する。地文としてR Lの早節縄文を縦方向に施し、口唇部直下に沈線文を巡らしている。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	TP1101 5%
3	深鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。口縁部は直立し、内面に稜を有する。地文としてR Lの早節縄文を縦方向に施し、口唇部直下に沈線文を巡らしている。口縁部には沈線により渦巻文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	TP1102 5% TP1101と同一器体
4	鉢 縄文土器	B (4.5)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部で屈曲し、口縁部は内傾する。口唇部直下に沈線文を巡らし、口縁部には沈線により渦巻文を施している。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	TP1103 5%

第511号土坑 (第370~374図)

位置 調査1区の南部, C 4 d8区。

重複関係 本跡は第509号土坑と第1号堀に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第509号土坑と第1号堀に掘り込まれているため、底部付近だけが残存している。底部は長径2.84m、短径2.74mの円形である。深さは142cmである。

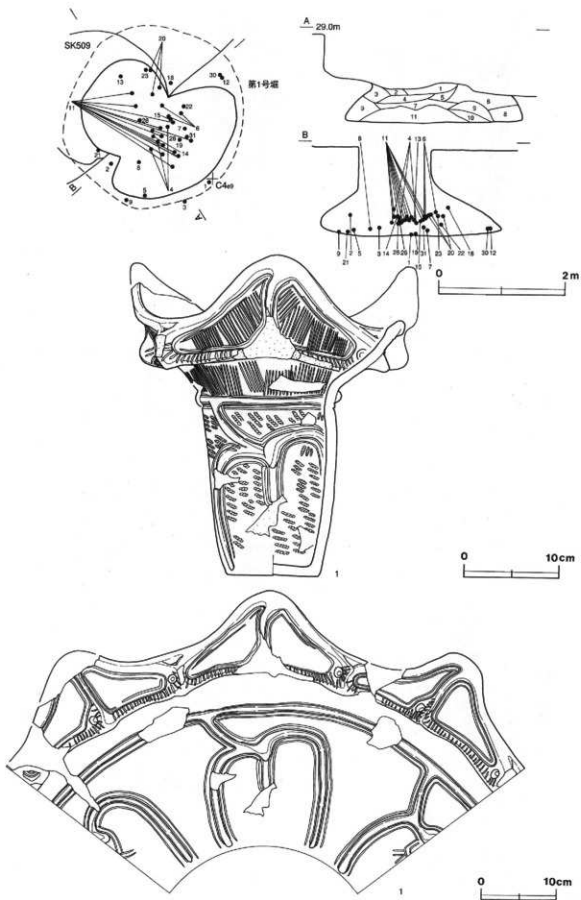
壁 フラスコ状を呈する。

底 はほぼ平坦である。

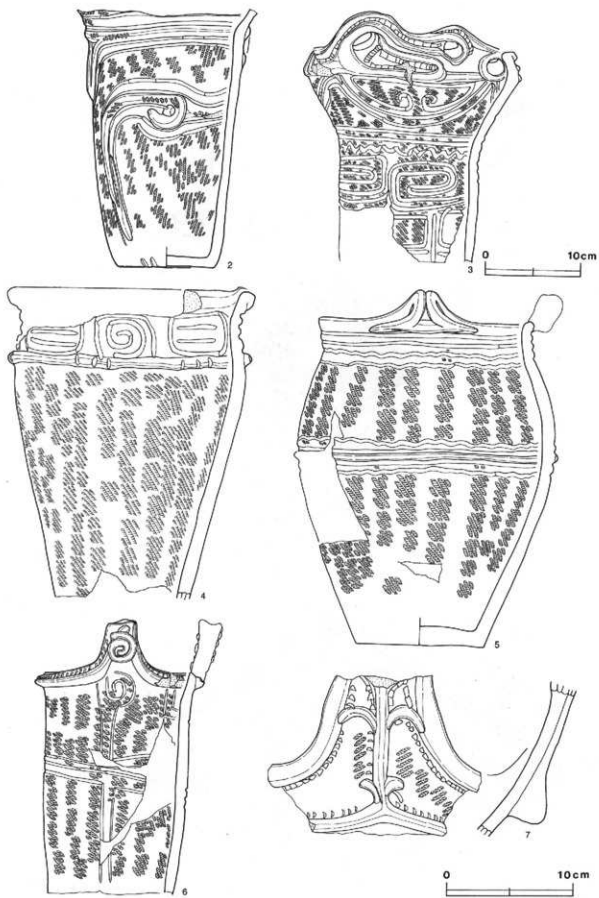
覆土 11層に分層される。第8・11層は褐色を呈し、ローム粒子を多く含んでいること、ほぼ完形の土器及び大形破片が覆土下層から廃棄されたような状態で出土しているから、覆土下層は人為堆積と考えられる。

土層解説

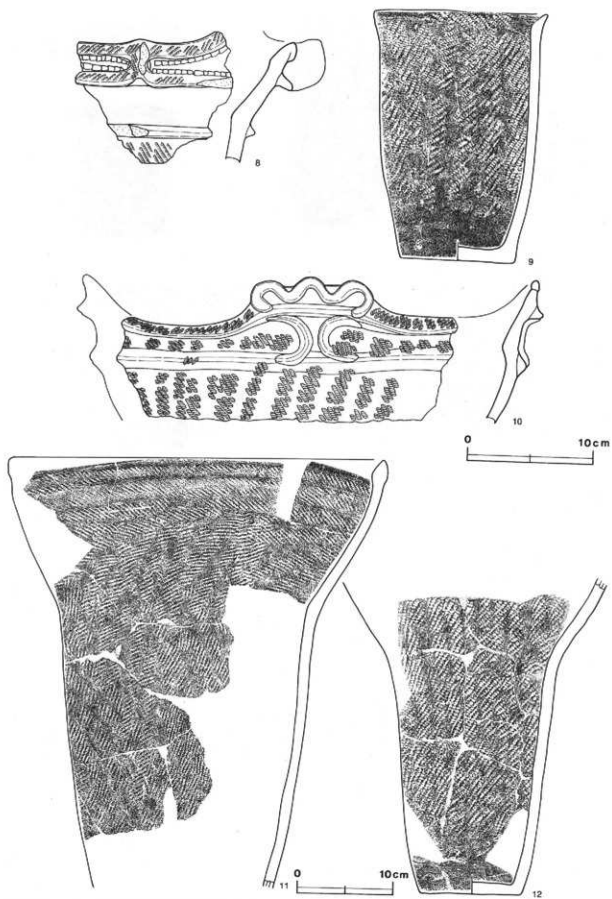
- 1 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック少量
- 2 極暗褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 7 黒色 炭化粒子少量、炭化物微量
- 8 褐色 ローム粒子多量、底沼バミス粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子少量、焼土小ブロック微量
- 10 黒褐色 炭化粒子中量、炭化物少量、焼土粒子微量
- 11 褐色 ローム粒子多量、ローム中ブロック少量



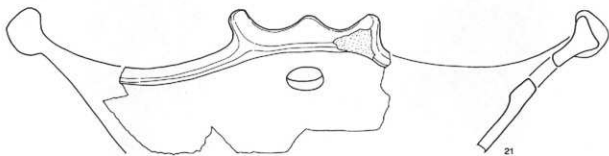
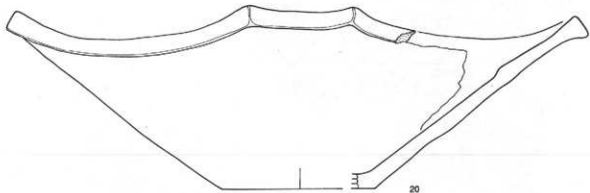
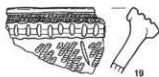
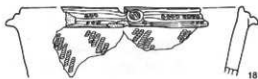
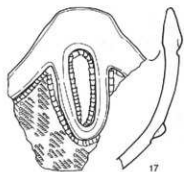
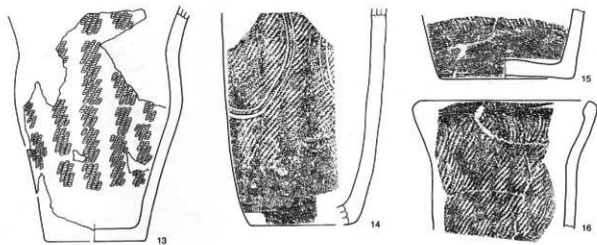
第370图 第511号土坑·出土遗物实测图



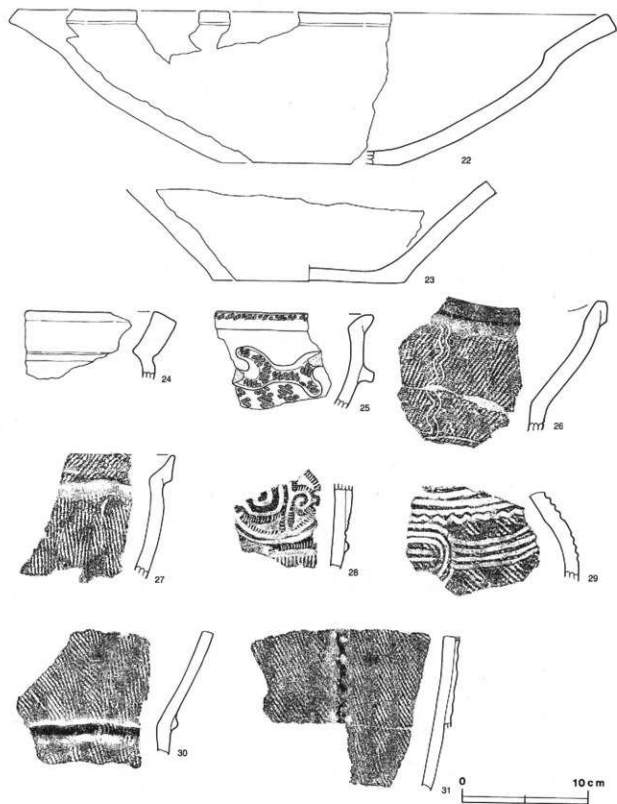
第371图 第511号土坑出土遗物实测图(1)



第372图 第511号土坑出土遗物实测图(2)



第373图 第511号土坑出土遗物实测图(3)



第374图 第511号土坑出土遗物实测图(4)

遺物 大量の縄文土器片425点が、主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。そのうち縄文土器32点を抽出・図示した。1は3単位の人波状口縁を呈する深鉢，9は円筒形を呈する深鉢で、いずれも壘際の底面から横位の状態でも出土している。2は上半部が欠損する深鉢，3は底部が欠損する深鉢，4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，5は口縁部が内傾する椀形の深鉢，6は小把手を有する深鉢，7は人波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，8・10は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片，11は底部が欠損する人形の深鉢，12は口縁部及び頸部が欠損する深鉢，13～15は深鉢の胴部から底部にかけての破片，18・19は深鉢の口縁部片，20～22は深鉢の口縁部から底部にかけての破片，23は浅鉢の胴部から底部にかけての破片，26・28は深鉢の口縁部付近の破片，30は深鉢の頸部片，31は深鉢の胴部片で、いずれも覆土下層から出土している。16・17・25・27は深鉢の口縁部片，24は鉢の口縁部片，29は深鉢の頸部付近の破片で、いずれも覆土から出土している。

所見 図示したほぼ完形の土器及び大形破片は、底面から覆土下層にかけての堆積時に一括廃棄されたもので、1・2のような阿玉台Ⅳ式土器と3・5のような大木8a式とが伴って出土している。時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。

第511号土坑出土遺物観察表 (第370～374図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び支縁の特徴	胎土・色澤・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 26.2	ほぼ完形。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾し、口縁部に至る。口縁部は3単位の人波状口縁を呈し、口唇部内面に稜を有する。口縁部には袋頸部下と底縁部下と交差を有する隆帯を垂下させて6単位の屈曲文を形成している。地文として半弦竹管による平行沈線文を縦方向に施し、隆帯に沿って半弦竹管による平行沈線文を施している。胴部には半弦竹管による平行沈線文を縦方向に施している。胴部にはL Rの半節縄文を地文とし、隆帯の頂点に交差を有する2単位のキギミを施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) ぶい赤褐色(下半) 良好	P1154 95% P L36
		B 33.7			
		C 9.6			
2	深鉢 縄文土器	B (27.5)	上半部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲する。頸部と胴部の境に隆帯を巡らし、胴部に縦状の突起を有する2単位のモチアを施している。地文としてR Lの半節縄文を縦方向に施し、隆帯に沿って沈線文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) ぶい橙褐色(下半) 普通	P1155 60% P L36
		C 9.9			
3	深鉢 縄文土器	A 20.8	口縁部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、底部で屈曲して外傾し、口縁部は内傾する。孔を有する裏面の把手を有し、把手の反対側が欠損しているため、1単位か2単位かは不明である。口縁部には口唇部直下及び口縁部と頸部の境に隆帯を巡らして縦状の口縁部支縁帯を形成している。文様帯内には前面沈線文を施している。胴部と頸部の境に比線を巡らし、頸部と胴部を区別している。胴部から胴部にかけては地文としてL Rの半節縄文を縦方向に施し、沈線により文様を抽出している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) ぶい赤褐色(下半) 普通	P1156 70% P L36 外面スス付着
		B (26.3)			
4	深鉢 縄文土器	A (18.6)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部外反する。口唇部に把手を有していた痕跡がある。口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らして口縁部支縁帯を形成し、支縁帯内には沈線により文様を抽出している。胴部にはLの半節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 灰褐色(上半) 黒褐色(下半) 普通	P1157 40%
		B (24.6)			
5	深鉢 縄文土器	A 16.2	胴部一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、胴部中央に最大径を持つ。胴部は内傾し口縁部は外反する。口唇部に1単位の小突起を有する。口縁部には比線を、胴部中央には隆帯と沈線を巡らしている。地文としてL Rの半節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) ぶい赤褐色(下半) 普通	P1158 90% P L36
		B 25.8			
		C 10.1			
6	深鉢 縄文土器	A 11.6	胴部一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外傾する。口唇部には1単位の把手を有し、把手の内・外面に隆帯による溝巻文を施している。把手の反対側には隆帯による縦S字状文を施している。口唇部直下には隆帯を巡らし、その上部にキギミを施している。胴部は地文としてL Rの半節縄文を縦方向に施し、沈線により文様を抽出している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) ぶい橙褐色(下半) 普通	P1159 70% P L36
		B (21.6)			
7	深鉢 縄文土器	B (12.4)	大波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は直線的に立ち上がり、口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らして口縁部支縁帯を形成している。地文としてR Lの半節縄文を縦方向に施し、隆帯に沿って前面沈線文を施している。	長石・石英・雲母 ぶい赤褐色 普通	P1160 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	深鉢 縄文土器	B (9.6)	波状口縁を呈する口縁部から胴部にかけての破片。胴部は厚直して外傾し、口縁部に至る。口縁部には波頂部に定位の突起を施し、口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らして縦伏の口縁部文様帯を形成している。文様帯内には結節状縄文を施している。口縁部の隆帯文上にはしの無節縄文を横方向に、胴部にはしの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 良好	P1161 5%
9	深鉢 縄文土器	A 13.7 B 19.7 C 9.3	定形。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。R1の単節縄文を口唇部外面には横方向に、それ以外には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) 明赤褐色(下半) 良好	P1164 100% P.L.36 内面炭化物付着
10	深鉢 縄文土器	A [35.6] B (11.5)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾し、口縁部は厚直して外傾す。波状口縁を呈し、波頂部には隆帯による縦伏文を施している。口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らして縦伏の口縁部文様帯を形成している。L Rの単節縄文を口唇部外面には横方向に、それ以外には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1162 10%
11	深鉢 縄文土器	A 39.0 D (45.6)	胴部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で厚直して外傾し、口縁部に至る。R1の単節縄文を口唇部外面には横方向に、それ以外には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 良好	P1163 60%
12	深鉢 縄文土器	B (33.5) C 10.9	口縁部及び胴部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で厚直して外傾する。R1の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にぶい赤褐色(下半) 普通	P1165 60%
13	深鉢 縄文土器	B (18.6) C 7.8	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部でくびれてわずかに外傾する。R1の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1166 40% 内面炭化物付着
14	深鉢 縄文土器	B (17.1) C [8.4]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。R1の単節縄文を縦方向に施し、半環状竹管による平行状縄文で文様帯を突出している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1167 15%
15	深鉢 縄文土器	B (5.5) C 10.5	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。Lの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1168 10%
16	深鉢 縄文土器	A [13.2] B (10.2)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で厚直して外傾し、口縁部に至る。R1の単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1170 15%
17	深鉢 縄文土器	B (13.3)	波状口縁を呈する口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。隆帯により文様帯を突出し、隆帯に沿って結節状縄文を施している。無文としてしの無節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1169 5%
18	深鉢 縄文土器	A [17.3] B (5.6)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部直下に隆帯を巡らして縦伏の口縁部文様帯を形成している。文様帯内は縦列により文様帯を突出している。無文はR1の単節縄文で、口縁部文様帯内には横方向に、それ以外には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1171 5%
19	深鉢 縄文土器	B (5.3)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下にケザミを有する隆帯を巡らして縦伏の口縁部文様帯を形成している。文様帯内は沈線を通り、ケザミを施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1172 5%
20	浅鉢 縄文土器	A 44.0 B 14.5 C [12.0]	口縁部から胴部にかけての一部欠損。胴部は緩やかに外傾して立ち上がり、口縁部に至る。4単位の波状口縁を呈し、波頂部の形態は内形状を呈する。口唇部外面は厚直し、口縁部内面に後を有する。無文で、内面は研磨している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1174 50% 口唇部及び口縁部内面赤彩
21	浅鉢 縄文土器	A [43.4] B [11.6]	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部は緩やかに外傾する。波状口縁を呈し、波頂部は二稜となる。波頂部直下の口縁部には凹孔を有する。無文で、内面は研磨している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1175 10% 口唇部内・外面赤彩
22	浅鉢 縄文土器	A [46.4] B 12.1 C [13.8]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口唇部外面は厚直し、口縁部内面に後を有する。無文で、よく研磨している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1176 20% 口縁部内・外面赤彩
23	浅鉢 縄文土器	B (8.3) C 15.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。無文で、内面は研磨している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1177 10%
24	鉢 縄文土器	B (5.4)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部で厚直して、口縁部は厚く外傾する。無文でよく研磨している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 良好	P1179 5% 口唇部内・外面赤彩

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
25	深鉢 縄文土器	B (7.5)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下に隆帯を帯りして口唇部を広く外傾させている。口縁部は隆帯により文様を描出している。L Rの半節縄文を隆帯上は縦方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1178 5%
26	深鉢 縄文土器	B (10.1)	波状口縁を呈する口縁部から頸部にかけての破片。頸部で屈曲して外傾し、口唇部は開きながら内彎する。口唇部外面を肥厚させている。地文としてR Lの半節縄文を縦方向に施し、平截竹管による平行沈線文で文様を描出している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP1104 5%
27	深鉢 縄文土器	B (9.8)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎し、口唇部を短く外傾させている。口縁部内面に横帯を有する。Lの無節縄文を口唇部外面は縦方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	TP1105 5%
28	深鉢 縄文土器	B (6.3)	口縁部付近から胴部にかけての破片。口縁部付近は開きながらわずかに内彎する。口縁部と胴部の境にキザミを有する隆帯を帯りして口縁部と胴部を区別している。口縁部は沈線による文様を描出し、沈線間にキザミを施している。胴部は断糸文を施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	TP1106 3%
29	深鉢 縄文土器	B (7.0)	胴部片。胴部は内彎する。地文としてL Rの半節縄文を縦方向に施し、沈線により文様を描出している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	TP1107 5%
30	深鉢 縄文土器	B (9.6)	頸部片。頸部で屈曲して外傾する。地文としてL Rの半節縄文を縦方向に施し、頸部と胴部の境に隆帯を帯りしている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	TP1108 5%
31	深鉢 縄文土器	B (12.3)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。地文としてL Rの半節縄文を縦方向に施し、押圧文を有する隆帯を帯りさせている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	TP1109 5%

第516号土坑 (第375～377図)

位置 調査1区の中央部、B4j0区。

規模と平面形 開口部は長径1.28m、短径1.14mの円形、底面は長径1.74m、短径1.61mのほぼ円形で、深さは79cmである。

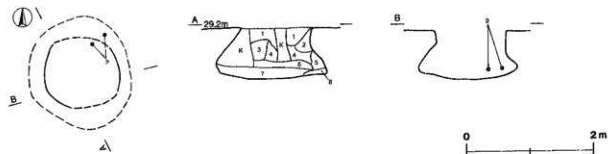
壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

覆土 8層に分層される。複雑な堆積状況をしていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

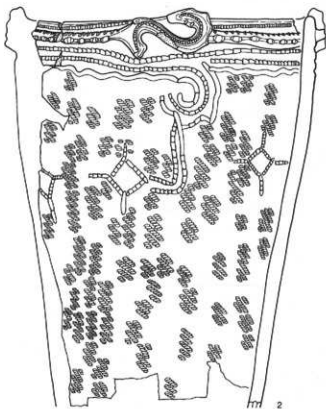
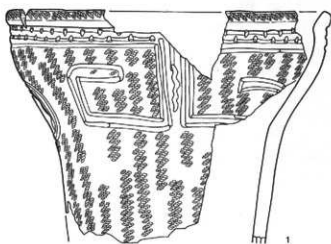
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子少量、炭化物微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 7 極暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子・炭屑バミス粒子微量
- 8 黒褐色 炭屑バミス粒子多量、ローム粒子微量



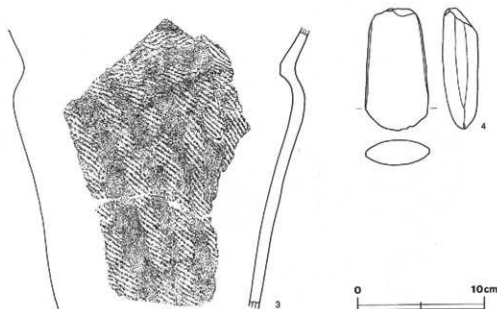
第375図 第516号土坑実測図

遺物 縄文土器片82点，磨製石斧1点が出土している。そのうち縄文土器3点，磨製石斧1点を抽出・図示した。2は底部が欠損する深鉢で，覆土下層から横位の状態で出土している。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，3は甕の頸部から胴部にかけての破片，4は磨製石斧で，いずれも覆土から出土している。

所見 時期は，出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式併行期)と考えられる。



第376図 第516号土坑出土遺物実測図(1)



第377図 第516号土坑出土遺物実測図(2)

第516号土坑出土遺物観察表(第376・377図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [25.0] B (18.2)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で前曲し、口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下交互刺突による連続の字状文を巡らしている。頸部には沈線により文様を描出している。地文としてLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1181 30% P L 36
2	深鉢 縄文土器	A [23.2] B (31.6)	胴部の一部・底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は直立する。口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らし、隆帯による4単位の連S字状文を横位に施している。地文としてLRの単節縄文を縦方向に施し、口縁部から胴部上位にかけて結節沈線文により文様を描出している。地文としてLRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P1180 50% P L 37
3	浅 縄文土器	B (22.5)	頸部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部でくびれて外傾する。LRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P1182 10%

図版番号	器種	計測値				石質	特 徴	備 考
		長さ(cm)	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	磨製石斧	(9.5)	5.1	2.8	(207.1)	緑色凝灰岩	基部欠損。定角式。	Q1005

第519号土坑(第378・379図)

位置 調査1区の西部、C4b7区。

重複関係 本跡は第518号土坑と第18号住居跡のP3に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第518号土坑に掘り込まれているため、平面形は長径2.50m、短径が2.01mの楕円形と推定される。深さは27cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほぼ平坦である。

ピット 3か所。P1は北東壁寄りに位置し、長径30cm、短径27cmの円形で、深さ17cmである。P2は南東壁寄りに位置し、長径30cm、短径24cmの楕円形で、深さ10cmである。P3は南東壁寄りに位置し、径20cmほどの円

形で、深さ16cmである。

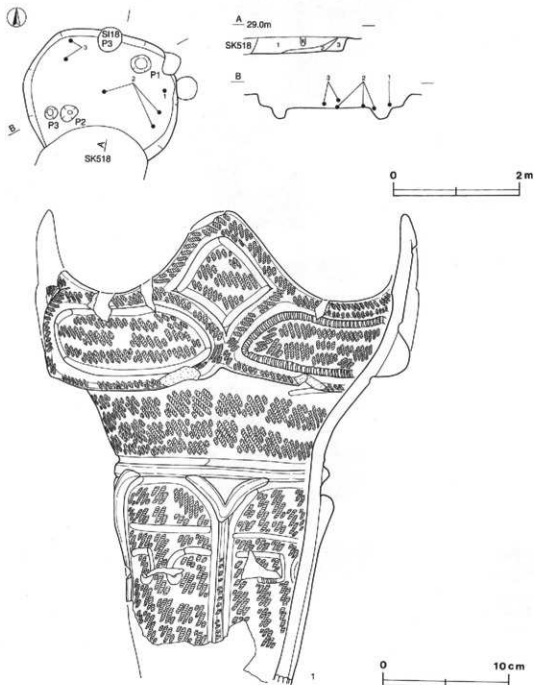
覆土 3層に分層される。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

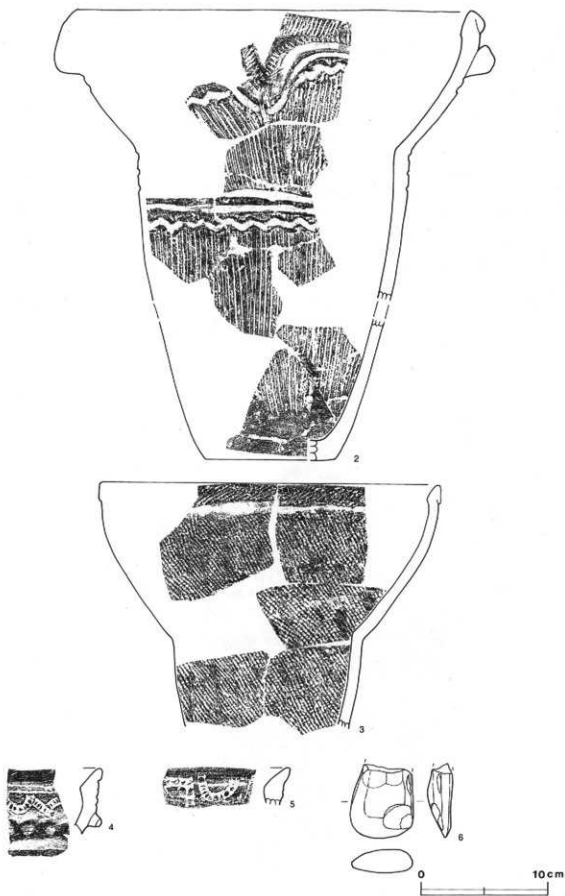
- | | | |
|---|-----|--|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物痕量 |
| 2 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、炭化粒子少量、ローム中ブロック微量 |
| 3 | 暗褐色 | ローム粒子多量、ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、焼土粒子微量 |

遺物 縄文土器片144点、磨製石斧1点が出土している。そのうち縄文土器5点、磨製石斧1点を抽出・図示した。1は4単位の大波状口縁を呈する深鉢、3は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片で、いずれも覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部から底部にかけての破片で、廃棄されたような状態で底面から出土している。4・5は深鉢の口縁部片、6は磨製石斧で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第378図 第519号土坑・出土遺物実測図



第379图 第519号土坑出土遗物实测图

第519号I坑出土遺物観察表 (第378・379図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [28.2]	口縁部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、 頸部で直出し、口縁部は開きながら内彎する。4単位の大 波状口縁を呈し、口縁部の形態は山形状である。口縁部は 隆帯により4単位の区画文を形成し、隆帯に沿って沈線文 と半截竹管による結節沈線文を施している。頸部と胴部 の境には隆帯を施している。胴部はY字状の隆帯を並べ させて縦位に4分節し、沈線により文様を描出している。地 文はLの単節縄文で、口縁部と胴部は横方向に、胴部は 縦方向に施している。	長石・石英・雲母 灰褐色(上半) ふいね色(下半) 普通	P1183 80% P L36
		B [37.3]			
2	深鉢 縄文土器	A [31.4]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上り、 胴部で直出し、口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下に隆帯を 施し、口縁部に隆帯によるV字状文を描出している。隆帯の下部及 び胴部と胴部の境には沈線文と沈線による斬断状文を施してい る。地文として系縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にふいね色 普通	P1184 25%
		B [35.4]			
		C [10.4]			
3	深鉢 縄文土器	A [26.8]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、 胴部で直出し、口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下に隆帯を 施し、口縁部に隆帯によるV字状文を描出している。隆帯の下部及 び胴部と胴部の境には沈線文と沈線による斬断状文を施してい る。地文として系縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にふいね色 普通	P1185 20%
		B [20.0]			
4	深鉢 縄文土器	B (5.3)	口縁部片。口縁部はほぼ直立し、内面に稜を有する。口縁部に 押土文を有する隆帯を施し、個々の口縁部文様を形成して いる。文様帯内は半截竹管による結節沈線文により文様を描出 している。	長石・石英・雲母 にふいね色 普通	T P1113 5% T P1114 同一器種
		B (2.8)			
5	深鉢 縄文土器	B (2.8)	口縁部片。口縁部はほぼ直立し、内面に稜を有する。半截竹管 による結節沈線文により文様を描出している。	長石・石英・雲母 灰褐色 普通	T P1114 5%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
6	磨製石斧	(5.9)	5.0	2.0	(83.7)	緑色凝灰岩	基部欠損。自然磨を著す。両端と月部を研磨。	Q1006

第530号土坑 (第380図)

位置 調査1区の南東部、C 5 e7区。

重複関係 本跡と第542・596号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径2.52m、短径2.20mの楕円形で、深さは54cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほほ平坦である。

ピット 5か所。P1は中央部に位置し、長径26cm、短径21cmの楕円形で、深さ36cmである。P2は東壁寄りに位置し、長径42cm、短径40cmの円形で、深さ46cmである。P3は南壁際に位置し、径24cmほどの円形で、深さ38cmである。P4は南壁際に位置し、長径40cm、短径35cmの楕円形で、深さ46cmである。P5は北西壁寄りに位置し、径50cmほどの円形で、深さ52cmである。

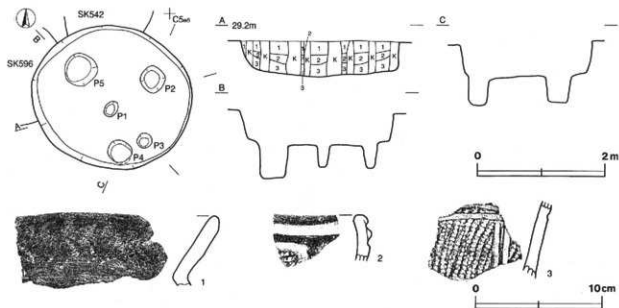
覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・機土粒子・炭化粒少量

遺物 縄文土器片110点が出土している。そのうち縄文土器片3点を抽出・図示した。1は甕の口縁部片、2は深鉢の口縁部片、3は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第380図 第530号土坑・出土遺物実測図

第530号土坑出土遺物観察表(第380図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	縄文土器	B (5.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部で屈曲し、口縁部は外傾する。黒文。	長石・石英・雲母にぶい褐色 普通	TP1115 5%
2	深鉢縄文土器	B (3.7)	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。沈線に沿う陰帯により文様を描出している。地文としてL R Lの縦筋縄文を描出している。	長石・石英・雲母にぶい褐色 普通	TP1116 3%
3	深鉢縄文土器	B (6.2)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施し、2条一組の沈線を懸垂させている。	長石・石英・雲母にぶい赤褐色 普通	TP1117 5%

第534号土坑(第381図)

位置 調査1区の西部, C 5 c3区。

規模と平面形 開口部は、長径0.98m, 短径0.88mの円形, 底面は長径1.40m, 短径1.16mの楕円形で、深さは62cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

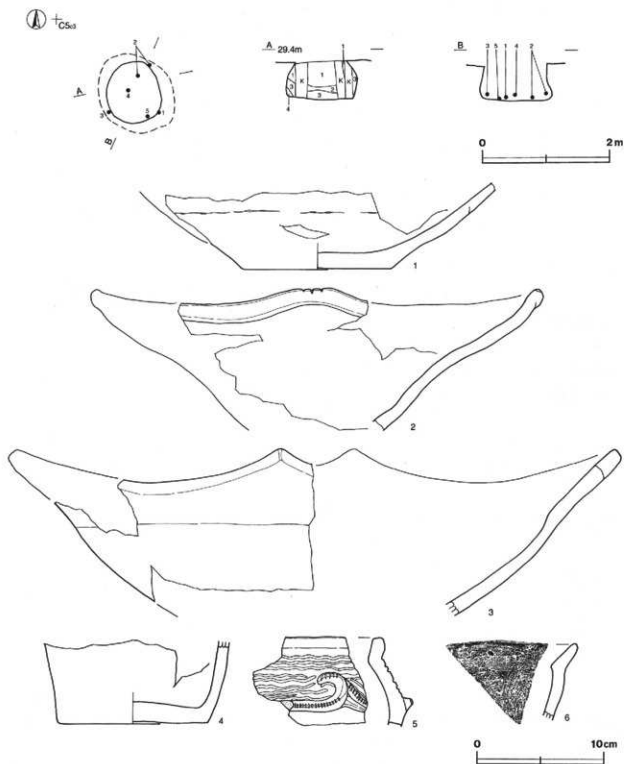
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック中量, ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

遺物 縄文土器片43点が主に覆土下層から廃棄されたような状態で出土している。そのうち縄文土器6点を抽出・図示した。1は浅鉢の胴部から底部にかけての破片, 2・3は浅鉢の口縁部から胴部にかけての破片, 4は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 5は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土下層から出土している。6は深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。

所見 図示した大形破片は、覆上下層堆積時に廃棄されたものである。時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期)と考えられる。



第381図 第534号土坑・出土遺物実測図

第534号七坑出土遺物観察表 (第381図)

図版番号	器種	計測値(cm)	形状及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
1	浅鉢 縄文土器	B (6.9) C 11.6	胴部から底部にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母にふい粉色 普通	P1190 20%
2	浅鉢 縄文土器	A [34.8] B (11.1)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は緩やかに内傾して立ち上がり、底部でわずかにくびれ、口縁部に至る。4単位の後状口縁と推定され、波状部にはキズミを強めている。無文。	長石・石英・雲母にふい粉色 普通	P1189 20%
3	深鉢 縄文土器	A [46.8] B (13.3)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部はわずかに内傾しながら緩やかに外傾して立ち上がり、口縁部に至る。4単位の後状口縁と推定され、波状部は双頭である。無文で、内面はよく研磨している。	長石・石英・雲母赤褐色 普通	P1188 20%
4	深鉢 縄文土器	D (6.6) C 12.0	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母にふい本褐色 普通	P1191 10%
5	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部片。口縁部は内傾し、内面に縁を有する。口縁部と胴部の境にキズミを有する隆帯を巡らし、隆帯の一部が尚巻状となる。口縁部には沈線による雲肩状文を施している。	長石・石英・雲母赤褐色 普通	P1192 5%
6	深鉢 縄文土器	B (6.0)	口縁部片。口縁部はほぼ直立し、内面に縁を有する。無文。	長石・石英・雲母黒褐色 普通	T P1118 5%

第552号土坑 (第382図)

位置 調査1区の南部，C 4h0区。

重複関係 本跡は第3号屋外炉に掘り込まれており，本跡が古い。

規模と平面形 長径2.16m，短径1.94mの円形で，深さは32cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほほ平坦である。

ピット 1か所。P1は東壁際に位置し，開口部は長径86cm，短径76cmの楕円形で，底部は長径84cm，短径74cmの楕円形である。深さ70cmで，東壁が内傾している。

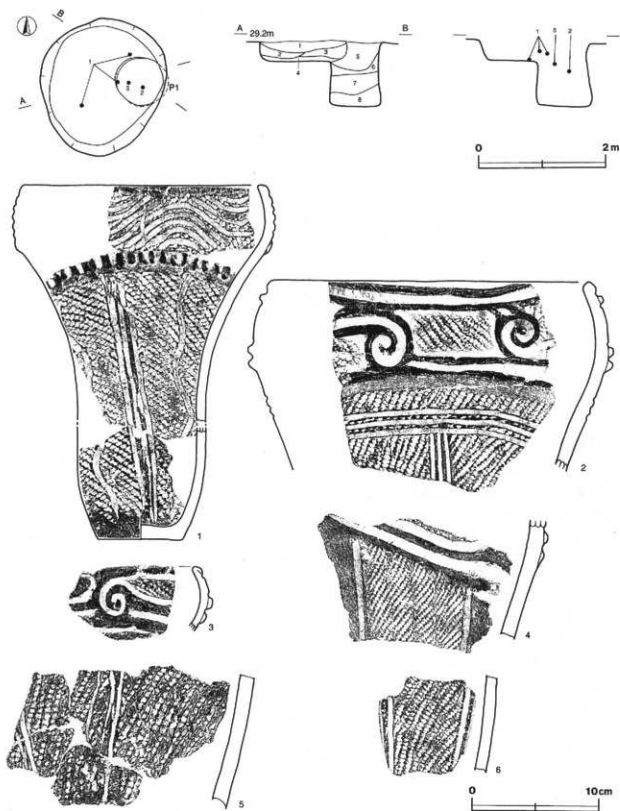
覆土 8層に分層され，第5～8層は本跡のP1の覆土である。レンズ状に堆積していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量，第2層より粘性がある。
- 4 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量，第4層より色調が明るい。
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量，第2層より粘まりがない。
- 8 暗褐色 ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片232点が出土している。そのうち縄文土器6点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から底部にかけての破片，2は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，5は深鉢の胴部片で，いずれも覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部片，4は深鉢の胴部から胴部にかけての破片，6は深鉢の胴部片で，いずれも覆土から出土している。

所見 時期は，出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第382图 第552号土坑·出土遗物实测图

第552号土坑出土遺物観察表(第382図)

調査番号	品 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深 鉢 縄文土器	A [19.0]	口縁部から腹部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部は外反し、口縁部は内彎する。口縁部と頸部の間にキズミを有する隆帯を帯りして口縁部を形成している。口縁部には沈線による隆帯文を施している。胴部には3条一組の沈線文と波状の沈線文を懸垂させ、懸垂文間は磨り消している。地文はR Lの単節縄文で、口縁部には縦方向に、頸部から胴部にかけては縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 普通	P1193 30%
		B [27.8]			
		C 6.7			
2	深 鉢 縄文土器	A [25.2]	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外反し、口縁部はわずかに内彎する。口縁部には沈線が沿う2本一組の隆帯により波状文を施している。頸部には3条一組の沈線文を帯りし、そこから3条一組の沈線文を懸垂させている。懸垂文間は磨り消している。地文はR Lの単節縄文で、口縁部には横方向に、頸部は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1194 10%
		B (15.0)			
3	深 鉢 縄文土器	B (5.0)	口縁部片。口縁部は内彎する。沈線が沿う2本一組の隆帯により波状文を施している。地文はR Lの単節縄文で、横方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1119 3%
4	深 鉢 縄文土器	B (9.4)	胴部片。口縁部と頸部の間は沈線が沿う2本一組の隆帯を帯りしている。胴部には沈線による懸垂文間を磨り消している。地文はR Lの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1120 5%
5	深 鉢 縄文土器	B (10.8)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。3条一組の沈線文を懸垂させ、懸垂文間は磨り消している。地文はR L Rの波節縄文で、横方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1121 5%
6	深 鉢 縄文土器	B (7.5)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。沈線文を懸垂させ、懸垂文間は磨り消している。地文はR Lの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1122 5%

第553号土坑(第383図)

位置 調査1区の南部, C 511区。

重複関係 本跡と第554号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 長径1.56m, 短径1.50mの円形で、深さは76cmである。

壁 直立する。

底 はほぼ平坦である。

ピット 2か所。P1は南東壁際に位置し、開口部の平面形は長径88cm, 短径78cmの楕円形で、底部の平面形は径78cmほどの円形である。深さは50cmで、南東壁が内傾している。P2は北西壁際に位置し、開口部の平面形は長径38cm, 短径25cmの楕円形で、底部の平面形は長径38cm, 短径30cmの楕円形である。深さは42cmで、北西壁が内傾している。

覆土 7層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

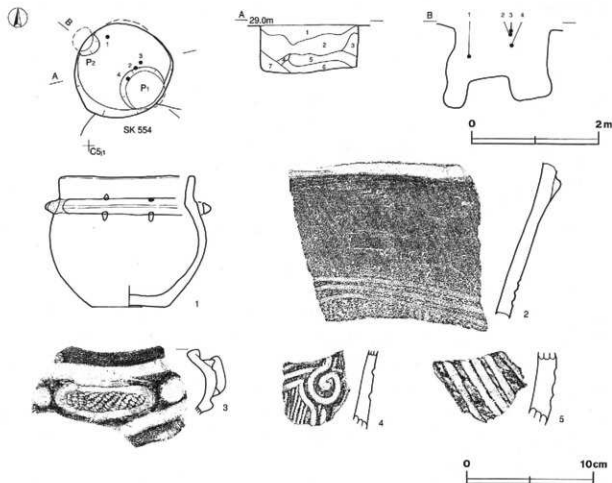
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック少量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片210点が出土している。そのうち縄文土器5点を抽出・図示した。1はほぼ完形の右孔鉋付土器で、覆土中層から出土している。2は深鉢の頸部から胴部上位にかけての破片, 3は深鉢の口縁部片, 4は深鉢の胴部片で、いずれも覆土上層から出土している。5は深鉢の胴部片で、覆土から出土している。

所見 右孔鉋付土器や深鉢の大形破片は、覆土中層から覆土上層までの堆積時に廃棄されたもので、中期後葉(加曽利EⅡ~Ⅲ期)と考えられる。本跡の廃絶時期は、底面や覆土下層から出土している遺物がないため明

確ではないが、廃絶時から覆土層の堆積時までの時間差はほとんどないと考えられることから中期後葉(加曾利EⅢ式期)と推定される。



第383図 第553号土坑・出土遺物実測図

第553号土坑出土遺物観察表 (第383図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	浅鉢形・ 縄文土器	A 10.4 B 10.3 C 5.8	ほぼ定形。胴部は開きながら内彎して立ち上がり、胴部上位に最大径がある。頸部で屈曲し、口縁部は直立する。口縁部と胴部の境に帯状の隆帯を巡らし、2孔一組の孔を3単位穿孔させている。	長石・石英・ 赤い黄褐色 普通	P1195 95% P L 37
2	深鉢 縄文土器	B (12.4)	胴部から胴部上位にかけての破片。口縁部と胴部の境には沈線に沿った隆帯を巡らしている。胴部上位には3条一組の沈線文を巡らし、そこから3条一組の沈線文を整形させている。胴部は無文である。胴部の地文はLJの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色 普通	TP1124 5%
3	深鉢 縄文土器	B (5.0)	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部には隆帯と沈線による長橋円形の区画文を施している。地文はLJの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 赤い赤褐色 普通	TP1123 5%
4	深鉢 縄文土器	B (6.3)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。胴部には沈線による渦巻文を起点に3条一組の沈線文を整形させ、整形文間は磨り消している。地文は熱赤文である。	長石・石英 褐色 普通	TP1125 10%
5	深鉢 縄文土器	B (5.9)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。沈線文を斜方向に施している。	長石・石英 褐色 普通	TP1126 5%

第558号土坑 (第384~387図)

位置 調査1区の中央部, C5c1区。

規模と平面形 開口部は長径1.70m、短径1.39mの楕円形、底面は長径2.88m、短径2.68mの円形で、深さは75cmである。

壁 フラスコ状を呈する。くびれ部は明瞭な稜があり、強くオーバーハンクしている。

底 ほぼ平坦である。

覆土 7層に分層される。第1~4層はレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。覆土下層からはほぼ完形の土器や大形の土器片が廃棄されたような状態で出土していること、第6・7層はロームブロックを多く含んでいることから、第5~7層は人為堆積と考えられる。

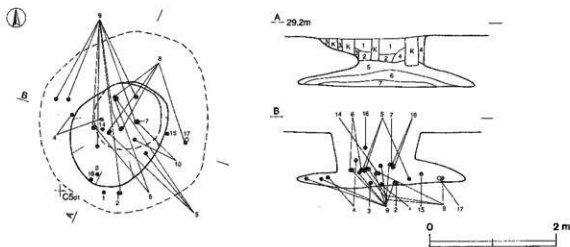
土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
- 7 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、炭化粒子微量

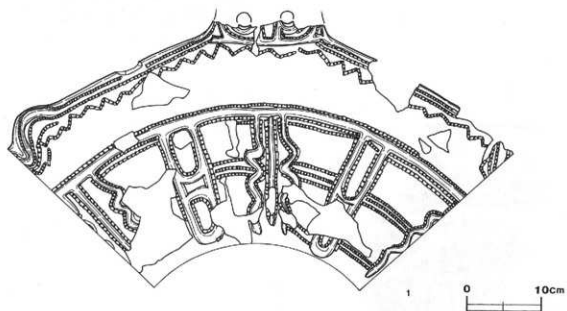
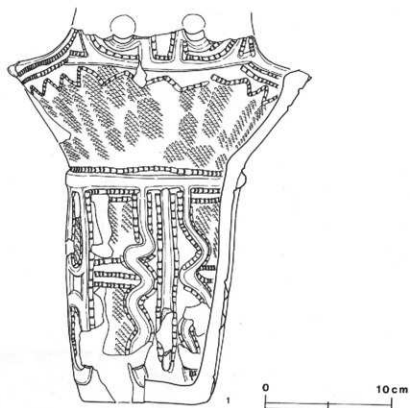
遺物 大量の縄文土器片449点、土器片円盤1点、磨製石斧1点が主に底面から覆土下層にかけて廃棄されたような状態で出土している。そのうち縄文土器片16点、土器片円盤1点、磨製石斧1点を抽出・図示した。

1・2はほぼ完形の深鉢、3は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、いずれも壘際の底面から横位の状態では出土している。4は深鉢口縁部から頸部にかけての破片、5は壘の口縁部から胴部にかけての破片、6・8・9は無文の深鉢、7・10は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、14・15は深鉢の胴部片、17は土器片円盤で、いずれも覆土下層から出土している。16は深鉢の胴部片で、覆土上層から出土している。11~13は深鉢の口縁部片、18は磨製石斧で、いずれも覆土から出土している。

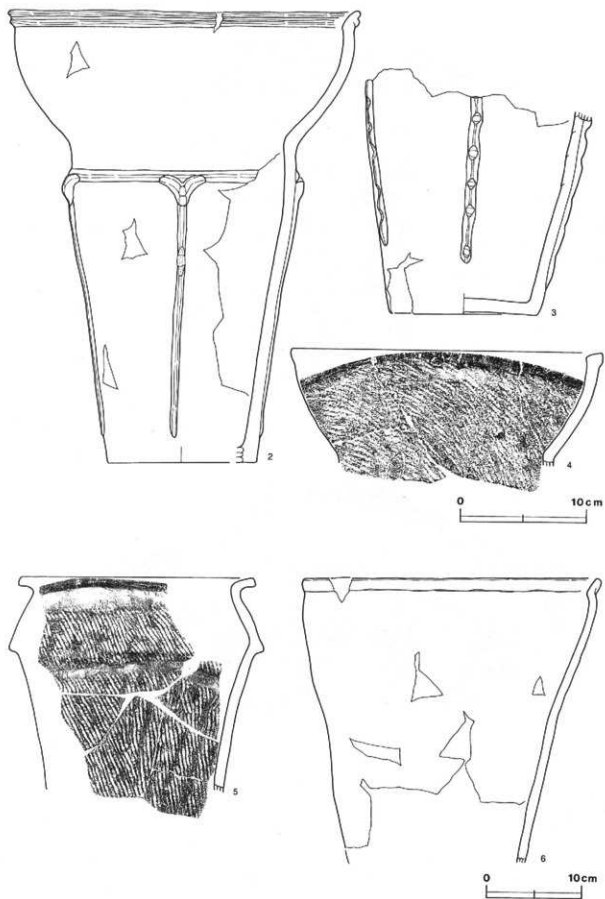
所見 1・2の深鉢は底面から出土しているが、一部が欠損しており、第6・7層の堆積範囲内に位置することから、廃棄されたものと考えられる。時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



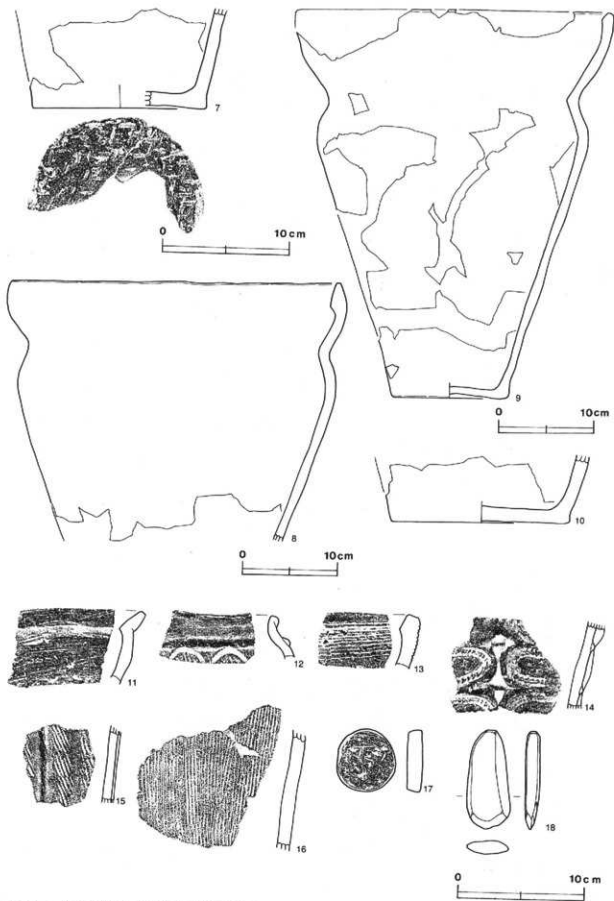
第384図 第558号土坑実測図



第385图 第558号土坑出土遗物实测图(1)



第386图 第558号土坑出土遗物实测图(2)



第387图 第558号土坑出土遺物実測图(3)

第558号-七坑出土遺物観察表 (第385~387図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・装成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [23.0]	胴部・口縁部・胴部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は外傾する。2層位の波状L線を描し、内1層位は人形である。大波状口縁部には隆帯により文様を描出し、2層位の円孔を穿孔している。小波状口縁部は双波帯、隆帯によるV字状文を施している。胴部と胴部の境には隆帯を施し、そこから隆帯による横帯区画文と波状文を垂下させている。口縁部と胴部の隆帯文に沿って結節状弧文を施している。地文はLの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にふい黄色(下半) 青褐色	P1196 70% P L37
		B [29.2]			
		C 10.0			
2	深鉢 縄文土器	A 27.6	胴部・底部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部は開きながら内傾する。口唇部外側に2本の隆帯を施し、内面に横を有する。胴部上位に隆帯を施し、隆帯によるV字状文を垂下させて、断面を縦位に4分割している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にふい黄色(下半) 青褐色	P1197 80% P L37
		B 35.7			
		C [11.8]			
3	深鉢 縄文土器	B [16.7]	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。押し文を有する隆帯を垂下させて、断面を縦位に4分割している。	長石・石英・雲母 黒褐色 青褐色	P1198 30%
		C 11.8			
4	深鉢 縄文土器	A [24.4]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部で屈曲し、口縁部は開きながら内傾する。Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 青褐色	P1200 10%
		B (9.0)			
5	深鉢 縄文土器	A 24.4	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して内傾し、口縁部は強く外傾する。胴部と胴部の境に隆帯を施している。Lの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 青褐色	P1199 30% P L37
		B (22.6)			
6	深鉢 縄文土器	A 30.7	口縁部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。口縁部の内面に横を有する。無文。	長石・石英・雲母 黒褐色 青褐色	P1249 70% P L37
		B (30.4)			
7	深鉢 縄文土器	B (8.1)	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にふい黄色 青褐色	P1204 5% 底部に現代灰
		C [13.6]			
8	深鉢 縄文土器	A 34.8	底部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、頸部でくびれて屈曲し、口縁部は開きながら内傾する。無文。	長石・石英・雲母 にふい黄色 青褐色	P1202 60% P L37
		B (27.6)			
9	深鉢 縄文土器	A [33.0]	口縁部及び胴部一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、頸部でくびれて屈曲し、口縁部は開きながら内傾する。折文。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 青褐色	P1201 50% P L37
		B 40.9			
		C 12.0			
10	深鉢 縄文土器	B (5.5)	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にふい黄色 青褐色	P1203 5%
		C 14.0			
11	深鉢 縄文土器	B (5.8)	口縁部片。口縁部は開きながら内傾し、口唇部は強く外傾する。口縁部内面に横を有する。無文。	長石・石英・雲母 にふい赤褐色 青褐色	T P1127 5%
12	深鉢 縄文土器	B (3.3)	口縁部片。口縁部は内傾し、口唇部は強く外傾する。口唇部直下に隆帯を施し、口唇部外周は無文である。地文としてLの単節縄文を縦方向に施し、結節状隆帯による弧状文を隆帯下に連続して施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 青褐色	T P1128 5%
13	深鉢 縄文土器	B (4.0)	口縁部片。口縁部は外傾し、口縁部内面に横を有する。平帯管による平行波状文を横方向に連続して施している。	長石・石英・雲母 にふい黄色 青褐色	T P1129 5%
14	深鉢 縄文土器	B (7.0)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。隆帯により縦位の地内帯区画文を形成し、隆帯に沿って平帯管による結節状弧文を描している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 青褐色	T P1130 5%
15	深鉢 縄文土器	B (6.1)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。地文としてLの単節縄文を縦方向に施し、隆帯を垂下している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 青褐色	T P1131 5%
16	深鉢 縄文土器	B (9.6)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。地文としてLの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にふい黄色 青褐色	T P1132 5%

図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
17	土器片(内)	4.9	4.1	1.3	36.3	土	縄文時代中期の土器片を素材にしている。円形。	D P 1001

図版番号	器 種	計測値				石 質	特 徴	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
18	磨製石斧	7.8	3.5	1.2	50.0	緑色凝灰岩	扁平な自然礫を素材にしている。刃部を研磨して作出している。	Q1007

第560号土坑（第388図）

位置 調査1区の南部，C5d1区。

規模と平面形 開口部は長径1.94m，短径1.68mの楕円形，底面は長径1.96m，短径1.66mの楕円形で，深さは60cmである。

壁 ほは直立するが，東壁だけは内傾する。

底 ほは平坦である。

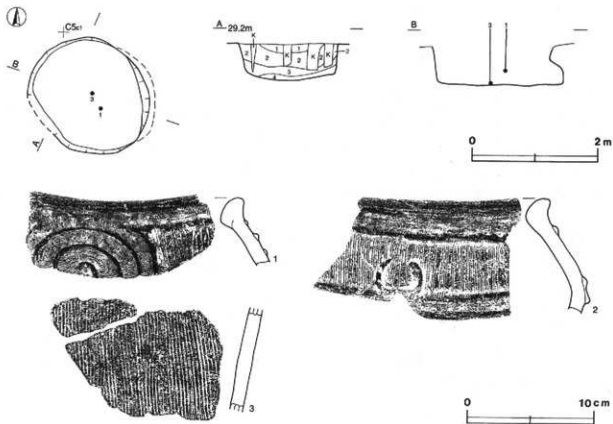
覆土 4層に分層され，レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量，単1層より色調が暗い
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量，ローム中ブロック・ローム粒子微量
- 4 黒 色 ローム小ブロック中量，ローム中ブロック・ローム粒子少量

遺物 縄文土器片83点，磨製石斧片2点が出土している。そのうち縄文土器片3点片を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部片で，覆土下層から出土している。3は深鉢の胴部片で，底面から出土している。2は深鉢の口縁部片で，覆土から出土している。

所見 時期は，出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第388図 第560号土坑・出土遺物実測図

第560号土坑出土遺物観察表 (第388回)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。口縁部は内彎し、口唇部は短く外傾する。微隆帯により文様を抽出し、文様の空白部に条線文を縦方向に充填している。	長石・石英 黒褐色 普通	TP1133 5%
2	深鉢 縄文土器	B (9.0)	口縁部片。口縁部は内彎し、口唇部は短く外傾する。口縁部と胴部の境には2本一組の隆帯を巡らして口縁部文様帯を形成している。口縁部には微隆帯により文様を抽出し、文様の空白部に条線文を縦方向に充填している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP1134 5% TP1133と同一個体
3	深鉢 縄文土器	B (8.1)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。条線文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	TP1135 5%

第561号土坑 (第389・390回)

位置 調査1区の東部、C5c5区。

重複関係 本跡は第528号土坑に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第528号土坑に掘り込まれているため、平面形は長径2.72m、短径は推定で2.46mの円形で、深さは14cmである。

壁 外傾する。

底 ほほ平坦である。

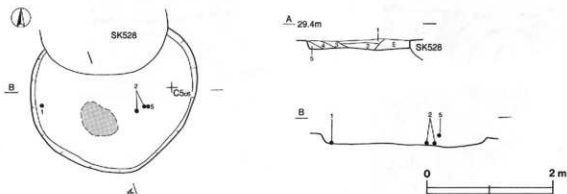
覆土 5層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。中央部からやや南西寄りの底面には、長径66cm、短径46cmの楕円形の範囲に焼土粒子を中量含んだ暗赤褐色土が堆積している。

土層解説

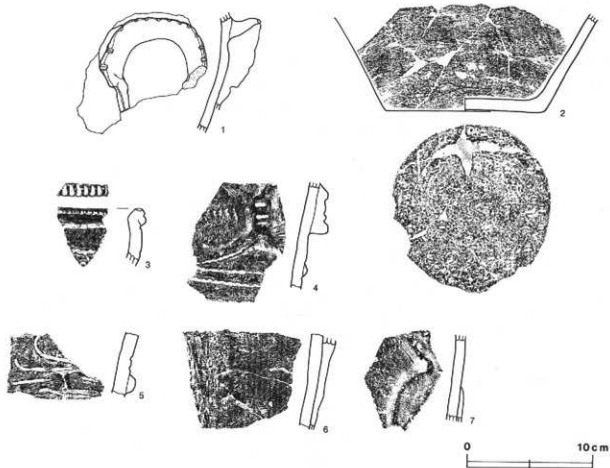
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片62点が出土している。そのうち縄文土器7点を抽出・図示した。1は把手を有する深鉢の口縁部付近の破片、2は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、いずれも覆土下層から出土している。5は深鉢の胴部片で、覆土上層から出土している。3は深鉢の口縁部片、4・6・7は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅱ式期)と考えられる。



第389回 第561号土坑実測図



第390図 第561号土坑出土遺物実測図

第561号土坑出土遺物観察表 (第390図)

区画番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色面・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (10.0)	口縁部付近の破片。口縁部にはキザミを有する幅状の突起を有し、その突起から隆帯を懸垂させている。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P1205 3%
2	深鉢 縄文土器	B (7.8) C 12.6	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1206 10% 底部に網代痕
3	深鉢 縄文土器	B (4.5)	口縁部片。口縁部はわずかに内彎する。口唇部にキザミを有し、口唇部外面は肥厚させて竹管状工具による刺突文を連続して施している。口縁部には沈線による歯歯状文を高くしている。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	T P1136 3%
4	深鉢 縄文土器	B (9.2)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。隆帯により横位の地内形区画文を形成し、区画文の交点を突出させてキザミを施している。隆帯に沿ってペン先状工具による箱筋沈線文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	T P1137 5%
5	深鉢 縄文土器	B (5.1)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。対向する小突起を有し、箱筋沈線文により文様を演出している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	T P1138 5%
6	深鉢 縄文土器	B (7.2)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。断面三角形の隆帯を垂下させている。	長石・石英 にぶい橙褐色 普通	T P1139 5%
7	深鉢 縄文土器	B (7.0)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。断面三角形で、並行する隆帯を垂下させている。	長石・石英・雲母 にぶい橙褐色 普通	T P1140 5%

第569号土坑 (第391～393図)

位置 調査1区の中央部, C5c3区。

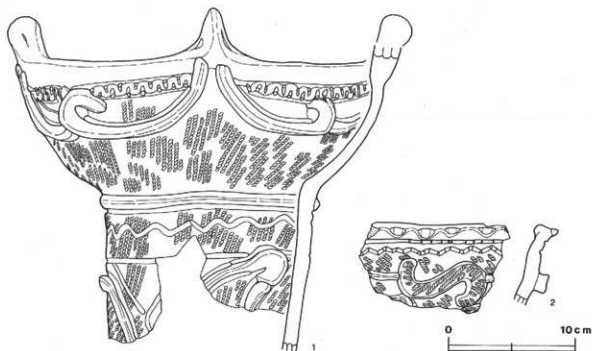
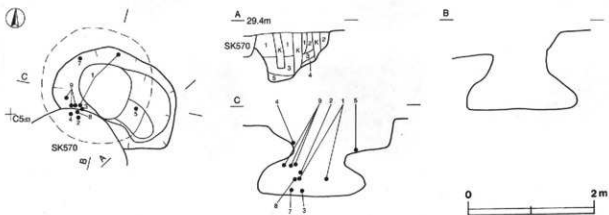
重複関係 第570号土坑に掘り込まれていることから本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第570号土坑に掘り込まれているため、開口部は長径2.00m、短径は推定で1.36mの楕円形である。くびれ部は開口部の北西寄りに位置し、長径0.90m、短径0.82mの不整形形で、くびれ部の南東側はテラス状となる。底部は径1.78mほどの円形で、深さは120cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほぼ平坦である。

覆土 土層観察用ベルトの設定位置が本跡の中心からはずれたため、覆土の観察は開口部における覆土上層のものとなり、くびれ部から底部に至る覆土中層以下の観察ができなかった。開口部の覆土は5層に分層され、レンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。



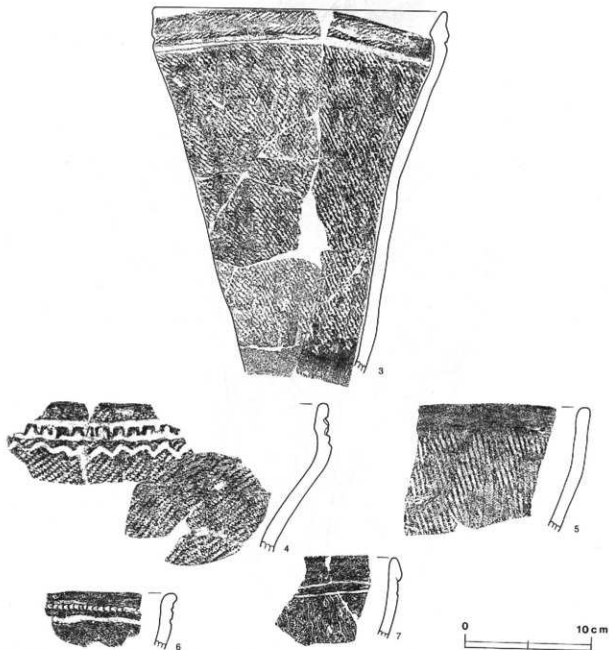
第391図 第569号土坑・出土遺物実測図

土層解説

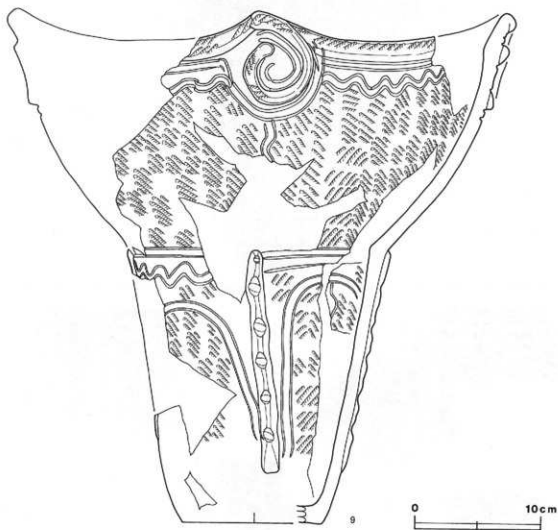
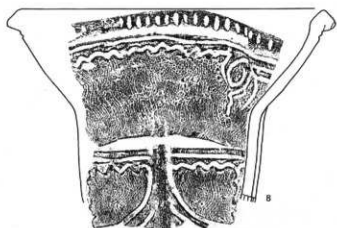
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量，ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

遺物 縄文土器片261点が出土している。そのうち縄文土器片9点を抽出・図示した。3は底部が欠損する深鉢，7は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土下層から出土している。1は底部が欠損する深鉢，2は深鉢の口縁部片，8は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片，9は口縁部と胴部の一部が欠損する深鉢で、いずれも覆土中層から出土している。4・5は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土上層から出土している。6は深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台N式期)と考えられる。



第392図 第569号土坑出土遺物実測図(1)



第393图 第569号土坑出土遗物实测图(2)

第569号土坑出土遺物観察表(第391~393図)

採取番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A [29.0] B (27.3)	把手及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で屈曲して外傾し、口縁部は聞きながら内彎する。4単位突起を有し、内1単位は隆帯部から大形の把手であることが想定される。口縁部には4単位の突起を起点に隆帯による区画文を形成し、区画内に入り剣状による連続口の字状文を施している。胴部と胴部の境には隆帯を巡らし、胴部には環状突起を起点に隆帯を繋ぎさせている。地文はR Lの単純縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) 濃い褐色(下半) 良好	P1208 60% P L37
2	深鉢 縄文土器	B (6.3)	口縁部片。口縁部はわずかに外彎する。口唇部外面には押圧文を有する隆帯を施している。口縁部には隆帯により横す字状文を施し、隆帯の一部に沿って精緻な縄文を施している。地文はL Rの単純縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 灰褐色 普通	P1211 5%
3	深鉢 縄文土器	A 23.1 B (28.6)	底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は聞きながら内彎する。胴部内面に横を有する。しの無筋縄文を、口唇部外面は横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) 褐色(下半) 普通	P1209 70% P L37
4	深鉢 縄文土器	B (11.6)	口縁部片。口縁部は聞きながら内彎する。口唇部直下に交互刺突による連続口の字状文を巡らしている。地文はR Lの単純縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1141 5%
5	深鉢 縄文土器	B (9.8)	口縁部片。口縁部は聞きながら内彎する。しの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1142 5%
6	深鉢 縄文土器	B (4.4)	口縁部片。口縁部は直立する。口唇部直下に精緻な縄文を巡らしている。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1144 5%
7	深鉢 縄文土器	B (6.4)	口縁部片。口縁部は聞きながら内彎する。口唇部はわずかに膨厚させ、口唇直下に沈帯を巡らしている。地文はクシ状工具による波状文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1143 5%
8	深鉢 縄文土器	A [24.0] B (15.3)	口唇部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で屈曲して外傾し、口縁部は聞きながら内彎する。口唇部外面は膨厚し、キザミを施している。口唇部直下及び胴部と胴部の境には沈帯文と沈帯による距離状文を巡らしている。胴部には垂直する隆帯で器面を縦位に分割し、分割された区画内には沈帯により文様を描出している。地文はクシ状工具による波状文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	P1210 20%
9	深鉢 縄文土器	A [39.1] B 40.2 C 11.2	口唇部から胴部にかけて一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、胴部で屈曲して外傾し、口縁部は聞きながら内彎する。4単位の放射状口縁を呈し、波頭部は山形状である。口縁部には波頭部から隆帯による距離文を垂下させ、口縁に沿って平載竹管による平行波状文と波状文を巡らしている。胴部は押圧文を有する隆帯で縦位に4分割している。分割された区画内には平載竹管による平行波状文と波状文を施している。地文はしの無筋縄文で、口唇部外面は横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) 褐色(下半) 普通	P1207 60% P L37

第571号土坑(第394図)

位置 調査1区の中央部、C5b2区。

規模と平面形 開口部は長径1.36m、短径1.28mの円形、底面は長径1.48m、短径1.44mの円形で、深さは68cmである。

壁 フラスコ状を呈する。北東壁だけは外傾して立ち上がるが、覆土下層の堆積状況から覆土上層が堆積する以前に崩落したと考えられる。

底 ほぼ平坦である。

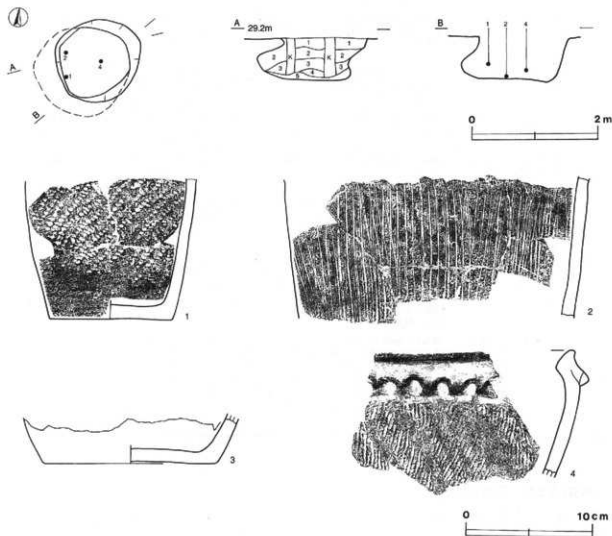
覆土 5層に分層され、第1~3層はレンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。第4層はローム粒とロームブロックを多く含む褐色土であり、北東壁側から堆積していることから、北東壁からの崩落上と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子微量

遺物 縄文土器片60点が出土している。そのうち縄文土器片4点を抽出・図示した。1は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 2は深鉢の胴部片, 4は深鉢の口縁部片で, いずれも覆土下層から出土している。3は深鉢の胴部から底部にかけての破片で, 覆土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅳ式期)と考えられる。



第394図 第571号土坑・出土遺物実測図

第571号土坑出土遺物観察表 (第394図)

図表番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (11.2) C 9.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。R Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英 明赤褐色 普通	P1212 10% 内面炭化物付着
2	深鉢 縄文土器	B (11.3)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。条線文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1214 10%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・産成	備考
3	深鉢 縄文土器	H (4.1) C 13.6	胴部から底部にかけての破片。胴部は真鍮跡に立ち上がる。蒸文。	長石・石英・雲母に多い橙色普通	P 1213 10%
4	深鉢 縄文土器	B (9.0)	口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下に押印文を有する降帯を巡らしている。Rの無節縄文を斜方向に施している。	長石・石英・雲母黒褐色普通	T P 1145 5%

第572号土坑 (第395・396図)

位置 調査1区の西南部, C 4 45区。

重複関係 第578号土坑と第1号堀に掘り込まれていることから本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第578号土坑と第1号堀に掘り込まれているため、開口部は長径1.72m、短径は推定で1.62mの円形である。底面は長径2.68m、短径2.53mのほぼ円形で、深さは100cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 はほぼ平坦である。

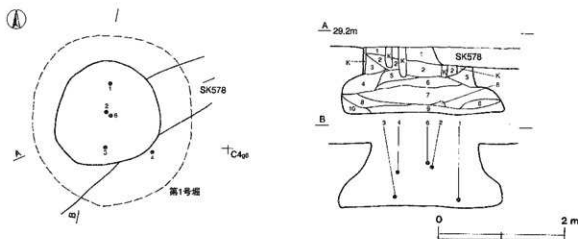
覆土 10層に分層され、第4~10層は多量のロームブロックが含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

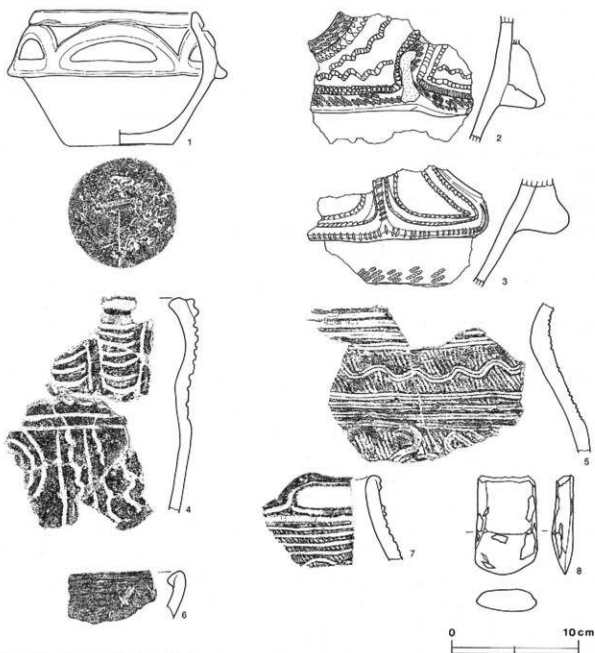
- 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子少量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子少量、焼土小ブロック・炭化物・炭化粒少量
- 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス粒子少量、炭化物微量
- 黒褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム大ブロック・ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・鹿沼バミス粒子少量、ローム大ブロック・炭化粒子・焼土粒子微量
- 暗褐色 ローム粒子・鹿沼バミス粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 褐色 ローム小ブロック・鹿沼バミス粒子中量、ローム中ブロック中量、ローム大ブロック・鹿沼バミス中ブロック少量
- 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、鹿沼バミス粒子少量、鹿沼バミス大ブロック微量
- 褐色 ローム中ブロック多量、ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器片84点、磨製石斧1点が出土している。そのうち縄文土器片7点、磨製石斧1点を抽出・図示した。1はほぼ完形の鉢、3は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頭部にかけての破片で、いずれも覆土上層から出土している。2は波状口縁を呈する深鉢の口縁部から頭部にかけての破片、4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、6は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土上層から出土している。5は深鉢の頭部片、7は深鉢の口縁部片、8は磨製石斧で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第395図 第572号土坑実測図



第396図 第572号土坑出土遺物実測図

第572号土坑出土遺物観察表 (第396図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	鉢 縄文土器	A 12.8	ほぼ定形。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎する。口 管部外面及び口縁部と胴部の境に隆帯を巡らし、口縁部に隆帯 による5単位の弧状文を施している。	灰石・石英 にふい赤褐色 普通	P1319 98% P L37 底部に木炭痕
		B 10.8			
		C 8.2			
2	深鉢 縄文土器	B (11.1)	口縁部から胴部にかけての破片。大流状口縁を呈し、口縁部と 胴部の境に鈎状の隆帯を巡らし、波頂部から隆帯を垂下させて いる。口縁部には隆帯に沿って平截竹管による結節平行沈線文 を施し、区画内には結節沈線による歯状文を施している。隆 帯にはR Lの単節横文を横方向に施している。	灰石・石英・雲母 にふい赤褐色 普通	P1215 10%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・施度	備考
3	深鉢 縄文土器	B (10.2)	口縁部から胴部にかけての破片。大波状口縁を呈し、口縁部と胴部の間にキザミを有する隆帯を呈らし、波頂部から隆帯を垂下させている。口縁部には隆帯に沿ってペン先状工具による結節平行沈線文を施している。胴部には反しの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 普通	P1216 10%
4	深鉢 縄文土器	B (17.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部と胴部の境でわずかにくびれ、口縁部は内彎する。口外部外面には背に比線を有する隆帯を呈らし、口縁部には沈線による筋状文を施している。口縁部と胴部の境には沈線を呈らし、胴部には沈線による曲線的な文様を描出している。	長石・石英・燧石 暗赤褐色 普通	TF1147 10%
3	深鉢 縄文土器	B (11.6)	頸部片。頸部は内傾しながら外反する。地文としてしの無筋縄文を縦方向に施し、平紋竹管による平行沈線文を呈らしている。	長石・石英・雲母 褐色 良好	TF1149 5%
6	深鉢 縄文土器	B (3.7)	口縁部片。口縁部は内きながら内彎する。口内部内面が肥厚している。地文。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 良好	TF1148 5% 内・外面半形
7	深鉢 縄文土器	B (6.6)	把手を有する口縁部片。口縁部は内傾する。把手は狭長の楕円形を呈し、口縁に沿って背に比線を有する隆帯を施している。地文としてしの無筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	TF1146 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
8	権雲石所	(7.7)	5.0	1.7	(91.6)	凝灰岩	胴部と刃部を研磨して作出している。	Q1008

第574号土坑 (第397・398図)

位置 調査1区の中央部、C5e21K。

規模と平面形 長径2.14m、短径2.02mの不整形円で、深さは50cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 はほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は長径24cm、短径18cmの楕円形で、深さは15cmである。

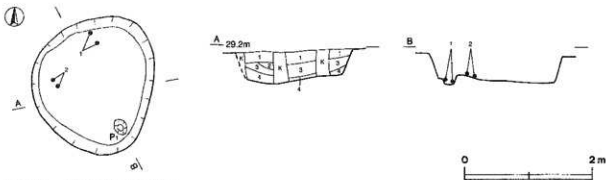
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから自然堆積と考えられる。

土層解説

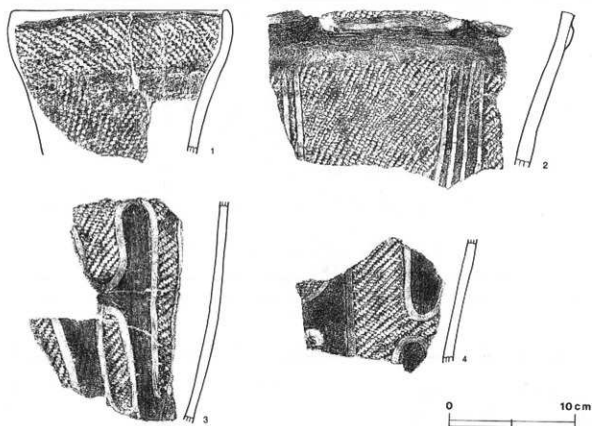
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子少量、炭化物微量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子少量、ローム大ブロック散在
- 4 褐色 ローム小ブロック多量、ローム中ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器片61点が出土している。そのうち縄文土器片4点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、2は深鉢の頸部から胴部にかけての破片で、いずれも底面から出土している。3・4は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土しているが、混入したものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曽利EⅢ式期)と考えられる。



第397図 第574号土坑実測図



第398図 第574号土坑出土遺物実測図

第574号土坑出土遺物観察表 (第398図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [17.1] B (11.4)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。R Lの単筋縄文を口縁部は縦方向に、胴部は縦方向に施している。	長石・石英 にふい赤褐色 普通	P1217 15%
2	深鉢 縄文土器	B (12.3)	胴部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、頸部に至る。口縁部と頸部の境に幅広の隆帯を巡らして、口縁部文様帯を形成している。胴部は地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施し、4本一組の壺重文面を磨り消している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	T P1151 5%
3	深鉢 縄文土器	B (17.5)	胴部片。胴部は外傾して立ち上がる。縦方向に施したR Lの単筋縄文を地文とし、沈線による区画文外を磨り消している。	長石・石英 褐色 良好	T P1153 5%
4	深鉢 縄文土器	B (9.8)	頸部片。頸部は外傾する。縦方向に施したR Lの単筋縄文を地文とし、沈線による区画文外を磨り消している。	長石・石英 褐色 良好	T P1152 5%

第575号土坑 (第399~401図)

位置 調査1区の中央部, C 5c2区。

重複関係 第576号土坑に掘り込まれていることから本跡が古い。

規模と平面形 開口部は長径1.32m, 短径0.98mの楕円形, 底面は長径2.72m, 短径2.35mの楕円形で, 深さは108cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

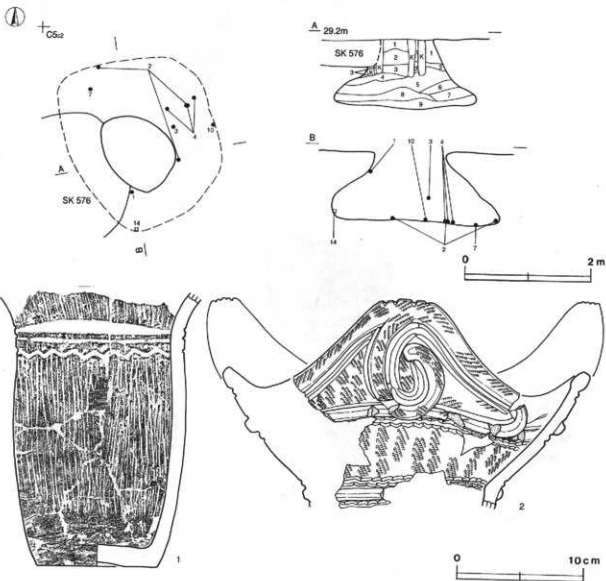
覆土 9層に分層され, レンズ状に堆積することから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

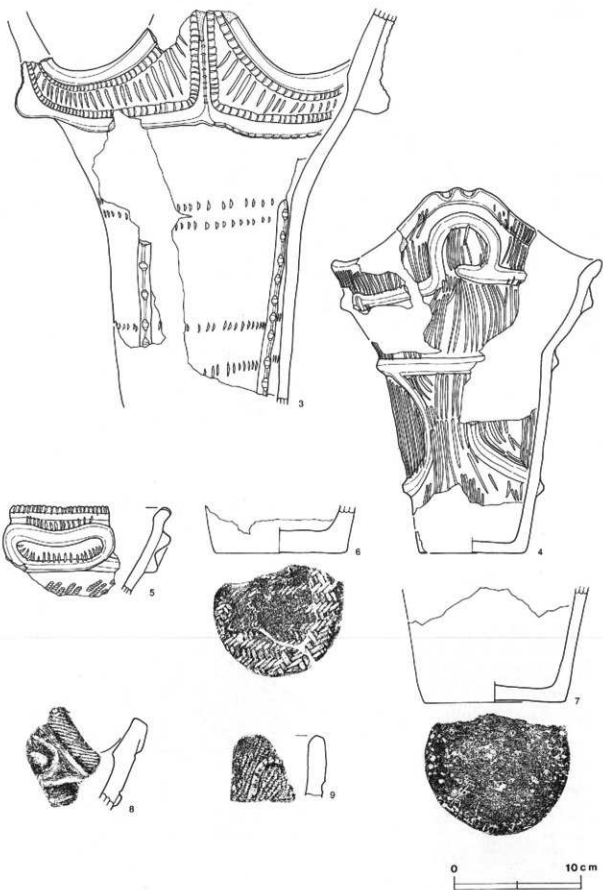
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 炭化物少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 炭化物・炭化粒子中量、焼土粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 鹿沼パミス粒子中量、ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・炭化物・鹿沼パミス粒子微量
- 9 極暗褐色 炭化粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物・鹿沼パミス粒子少量、ローム粒子微量

遺物 縄文土器片273点、石皿片1点が出土している。そのうち縄文土器片13点、石皿片1点を抽出・図示した。2は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、4は口縁部から胴部の一部が欠損する深鉢、7は深鉢の胴部から底部にかけての破片、10は深鉢の胴部片、14は石皿片で、いずれも覆土下層から出土している。1は上半部が欠損する深鉢、3は口縁部の一部及び底部が欠損する深鉢で、いずれも覆土上層から出土している。5は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、6は深鉢の胴部から底部にかけての破片、8・9・11・13は深鉢の口縁部片、12は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

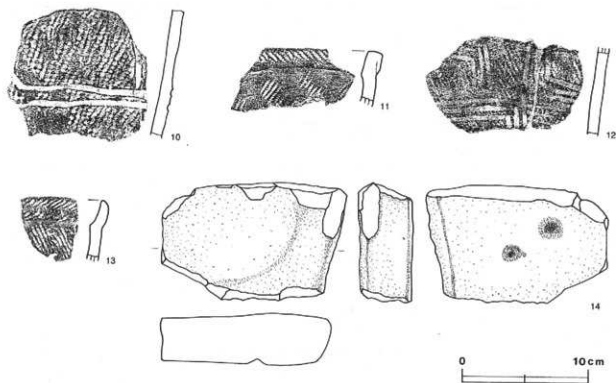
所見 時期は、出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



第399図 第575号土坑・出土遺物実測図



第400图 第575号土坑出土遗物实测图(1)



第401図 第575号土坑出土土遺物実測図(2)

第575号土坑出土土遺物観察表(第399~401図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B [21.2] C 9.4	上半部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾する。頸部と胴部の境に沈線と沈線による扇状口縁を呈している。地文として条線文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒灰色(上半) ぶい褐色(下半) 普通	P1220 50% P L 38
2	深鉢 縄文土器	A [28.2] B (17.7)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部で屈曲して外傾し、口縁部は開きながら内彎する。3単位の大波状口縁を呈する。口唇部外面及び口縁部に隆帯を巡らし、口縁部文様帯を形成している。文様帯内には波頂部下に隆帯による派意文を施し、隆帯に沿って沈線文を施している。Lの無節縄文を口唇部外面は横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1221 30% P L 38
3	深鉢 縄文土器	A [31.0] B (31.2)	口縁部・胴部の一部及び底部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾し、口縁部は開きながら内彎する。4単位の大波状口縁を呈する。口縁部と胴部の境に扇状の隆帯を巡らし、波頂部から垂下する隆帯と連絡させて4単位の区画文を形成している。区画文内には隆帯に沿って爪形文を施し、縦方向に施した沈線を充満している。胴部には押印文を有する隆帯を4単位並下させ、キザミ目線を巡らしている。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) 明赤褐色(下半) 普通	P1218 60% P L 38
4	深鉢 縄文土器	A [21.3] B [29.0] C [7.7]	口縁部・頸部・胴部の一部欠損。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲して外傾し、口縁部は開きながら内彎する。2単位の大波状口縁を呈する。口縁部には一部に押印文を有する隆帯により文様を突出している。頸部と胴部の境に隆帯を巡らし、胴部には隆帯による2単位の槽凹形文を施している。地文として条線文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) ぶい褐色(下半) 普通	P1219 60% P L 38
5	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部から頸部にかけての破片。口縁部は開きながら内彎する。口縁部に隆帯を巡らし、隆帯による槽凹形文を施している。口唇部にはキザミを施し、隆帯に沿って爪形文を施している。胴部にはR Lの早節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒灰色 普通	P1222 5%
6	深鉢 縄文土器	B (3.9) C 10.1	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 ぶい褐色 普通	P1224 5% 底部に副代痕

図版番号	器 種	計測値(cm)	形状及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備 考
7	深鉢 縄文土器	B (9.0) C 11.2	胴部から底部にかけての残片。胴部は直線的に立ち上がる。 無文。	長石・石英・雲母 に多い橙色 良好	P1223 10% 底部に一部新代痕
8	深鉢 縄文土器	B (7.4)	液状口縁を有する口縁部片。口縁部は外傾し、内面に稜を有する。口唇部外面に陰帯を巡らし、陰帯に沿って結節状線文を施している。Lの黒節縄文を施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP1154 5%
9	深鉢 縄文土器	B (5.9)	液状口縁を有する口縁部片。口唇部は直立する。R.Lの黒節縄文を地文とし、結節状線文を施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	TP1155 5%
10	深鉢 縄文土器	B (10.0)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。沈線により文様を描出している。地文としてR.Lの黒節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 に多い橙色 普通	TP1158 5%
11	深鉢 縄文土器	B (4.4)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。口唇部外面は肥厚し、内面に稜を有する。R.Lの黒節縄文を口唇部外面には横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗褐色 普通	TP1156 5%
12	深鉢 縄文土器	B (7.0)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。沈線により文様を描出している。地文としてL.Rの黒節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 淡灰褐色 普通	TP1159 5%
13	深鉢 縄文土器	B (4.9)	口縁部片。口縁部はわずかに外傾する。内面に稜を有する。Lの黒節縄文を口唇部外面には横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	TP1157 3%

図版番号	器 種	計測値				石 質	特 徴	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
14	石 置	(9.4)	(14.5)	(4.5)	(972.5)	砂 岩	扁平な自然磨を素材。裏面を凹行とする。	Q1009

第576号土坑 (第402・403図)

位置 調査1区の中央部、C5c2区。

重複関係 本跡は第575・577号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 平面形は長径2.28m、短径1.88mの楕円形で、深さは40cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

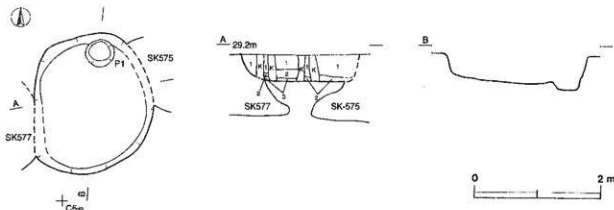
底 ほぼ平坦である。

ピット 1か所。P1は径45cm程のほぼ円形で、深さは15cmである。

覆土 3層に分層され、レンズ状に堆積することから自然堆積と考えられる。

土層解説

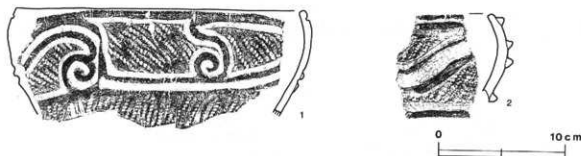
- 1 黒褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量



第402図 第576号土坑実測図

遺物 縄文土器片55点が出土している。そのうち縄文土器片2点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から頸部にかけての破片、2は深鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅠ式期)と考えられる。



第403図 第576号土坑出土遺物実測図

第576号土坑出土遺物観察表 (第403図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [22.6] B (8.2)	口縁部から頸部にかけての破片。頸部は外傾し、口縁部は閉きながら内彎する。口縁部には沈彫に沿う2本一組の隆帯により端部が渦巻文となる文様を施している。頸部には2本一組の沈彫を整垂させている。地文はR Lの半節縄文で、口縁部は縦方向に、胴部は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にぶい黄褐色(下半) 普通	P1225 10%
2	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部には2本一組の隆帯により文様を抽出している。地文としてR Lの半節縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 普通	T P1160 5%

第577号土坑 (第404~407図)

位置 調査1区の中央部、C5c1区。

重複関係 本跡は第576号土坑に掘り込まれていることから本跡が古い。

規模と平面形 本跡は第576号土坑に掘り込まれているため、開口部は長径1.60m、短径が推定で1.32mの楕円形である。底面は長径2.86m、短径2.30mの楕円形で、深さは94cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 ほほ平坦である。

覆土 11層に分層され、第9~11層はロームブロックを多く含み、オーバーハングの弱い西壁側から堆積していることから、崩落土と考えられる。

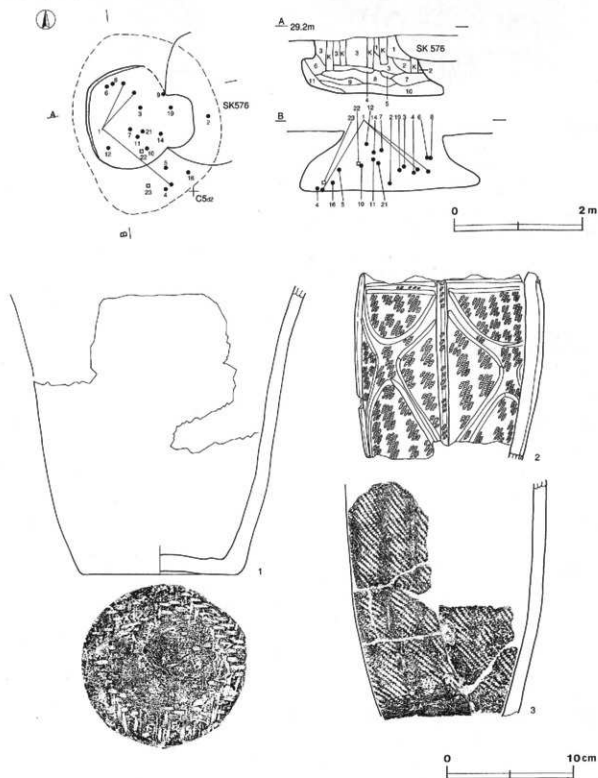
土層解説

- 1 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化物・炭化粒子少量、ローム中ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 炭化物中量、ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック・炭化物中量、焼土粒子・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化物・炭化粒子少量、焼土粒子・鹿沼バミス粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、鹿沼バミス粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、鹿沼バミス粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・鹿沼バミス粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック中量、ローム中ブロック少量、炭化粒子微量
- 11 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・炭化粒子・鹿沼バミス粒子微量

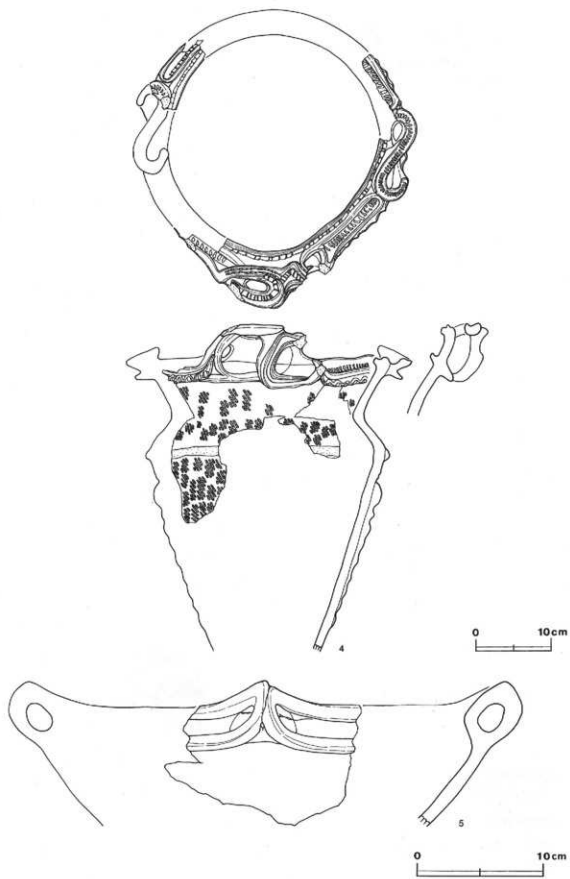
遺物 縄文土器片256点、打製石斧1点、磨製石斧1点が出土している。そのうち縄文土器片21点、打製石斧1点、磨製石斧1点を抽出・図示した。1・10は深鉢の胴部から底部にかけての破片、2・3は深鉢の胴部片、4は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、5・6は深鉢の口縁部片、8・9は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、11は環状把手を有する深鉢の波頂部片、16・19は深鉢の口縁部片、21は深鉢の胴部片、22は打製石

釜, 23は磨製石斧で, いずれも覆土下層上面の斜面に廃棄されたように出土している。7・14は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片, 12は深鉢の胴部から底部にかけての破片で, いずれも覆土上層から出土している。13・15・17は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片, 18は鉢の口縁部片, 20は深鉢の口縁部片で, いずれも覆土から出土している。

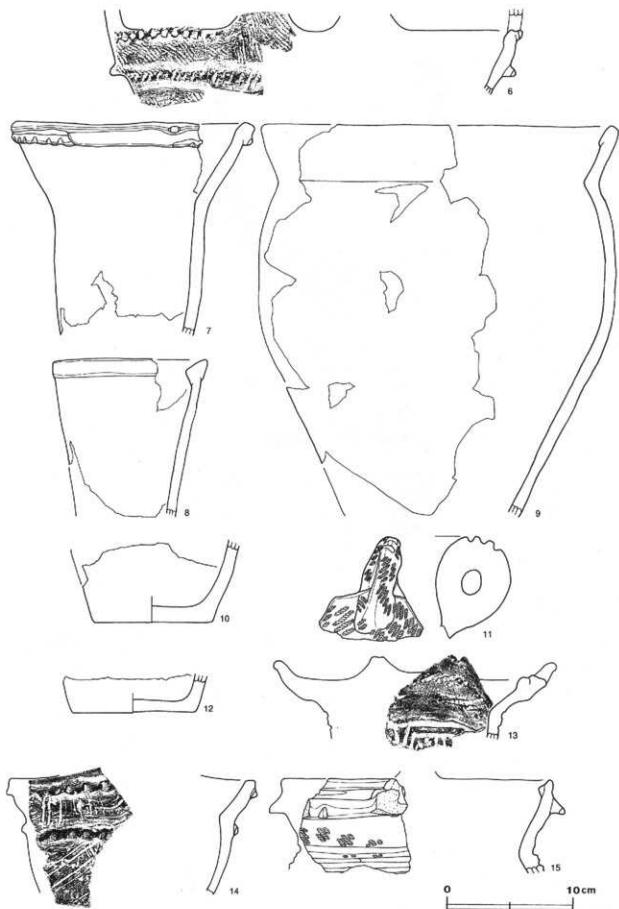
所見 時期は, 出土土器から中期中葉(阿玉台Ⅲ式期)と考えられる。



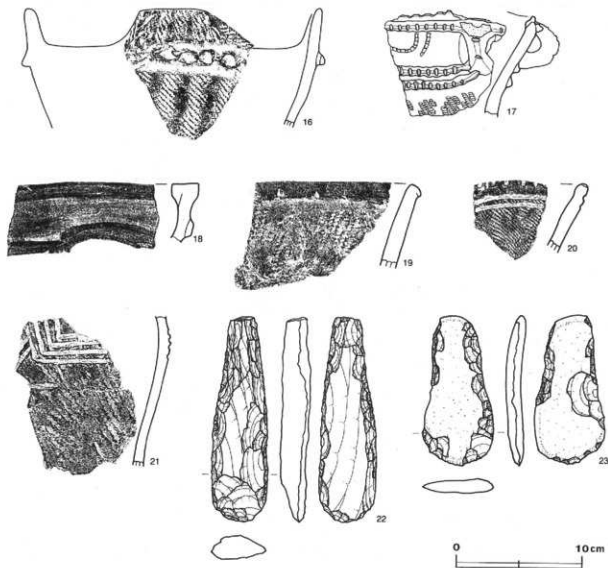
第404図 第577号土坑・出土遺物実測図



第405图 第577号土坑出土遗物实测图(1)



第406图 第577号土坑出土遗物实测图(2)



第407図 第577号土坑出土遺物実測図(3)

第577号土坑出土遺物観察表(第404~407図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B(22.8) C 12.7	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P1230 25% 底部に樹皮痕
2	深鉢 縄文土器	B(19.2)	頸部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲する。胴部は垂下する隆帯により器面を縦位に4分割し、分割された区画内には沈殿によりX字状文を施している。地文はRLの単純縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P1231 30%
3	深鉢 縄文土器	B(18.8)	胴部片。胴部は直線的に立ち上がる。LRの単純縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P1232 10%

図版番号	器 名	計測値 (cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
4	深鉢 縄文土器	A〔39.0〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内傾しながら直線的に立ち上がり、腹部は内傾し、口縁部は直曲して外傾する。口縁部直下に押圧文を有する隆帯を巡らし、口唇部は立体的な2単位の把子と隆帯による2単位の逆S字状文を施している。隆帯に沿って爪形文を施している。胴部と胴部の境に隆帯を巡らし、押圧文を有する隆帯によるY字状文を彫刻させている。地文はLRの早期縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい黄褐色 良好	P1226 40% P L 38
		B〔43.2〕			
5	深鉢 縄文土器	A〔32.0〕 B〔11.6〕	口縁部片。波状口縁で、波頂部には顕著な把子を有し、把子どおしは隆帯により連結している。無文。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1241 10%
6	深鉢 縄文土器	A〔32.4〕	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部に孔を有する把子を有していた痕跡がある。口唇部直下及び口縁部と胴部の境にキザミを有する隆帯を巡らしている。Lの早期縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 針状鉱物 黒灰色 普通	P1240 5%
		B〔5.2〕			
7	深鉢 縄文土器	A 18.2 B〔17.0〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外傾する。口唇部直下に押圧文を有する隆帯を巡らしている。無文。	長石・石英・雲母 黒褐色(上平) にぶい褐色(下平) 普通	P1227 60%
		B〔12.5〕			
8	深鉢 縄文土器	A 12.0 B〔12.5〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口唇部は肥厚し、内面に段を有する。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P1228 60% P L 38
9	深鉢 縄文土器	A〔27.4〕 B〔31.1〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は開きながら内彎して立ち上がり、腹部で屈曲して、口縁部は外傾する。口唇部内面は肥厚する。無文。	長石・石英・雲母 黒灰色 普通	P1229 20% 内面に炭化物付着
10	深鉢 縄文土器	B〔6.6〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1233 10%
		C 9.2			
11	深鉢 縄文土器	B〔8.2〕	環状把子及び波頂部片。波頂部はほぼ直立する。把手の中央部に孔を有し、把手は波頂部に直交して付けられている。RLの早期縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1235 5%
12	深鉢 縄文土器	B〔3.1〕	胴部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がる。無文。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1234 5%
		C〔8.7〕			
13	深鉢 縄文土器	A〔21.2〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直立し、口縁部は外傾する。口唇部には炭素の夾心を有し、胴部は沈線により文様を描出している。地文はLRの早期縄文で、口唇部には横方向に、胴部は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1236 5%
		B〔16.0〕			
14	深鉢 縄文土器	B〔8.8〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は直曲して外傾する。口唇部直下及び口縁部と胴部の境に押圧文を有する隆帯を巡らしている。手掻竹管による平直文様を施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1238 5%
15	深鉢 縄文土器	A〔20.8〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は直曲して外傾する。口唇部直下には押圧文を有する隆帯を巡らし、把手を有していた痕跡がある。口縁部と胴部の境には沈線を描出している。LRの早期縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1237 5%
		B〔7.5〕			
16	深鉢 縄文土器	A〔23.1〕 B〔9.6〕	波状口縁を有する口縁部片。波頂部の形態は台形状を呈する。口唇部直下には押圧文を有する隆帯を巡らしている。LRの早期縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 良好	P1242 5%
17	深鉢 縄文土器	B〔8.5〕	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直立し、口縁部は外傾する。口縁部に輪状の把子を有し、口唇部直下及び口唇部と胴部の境にキザミを有する隆帯を巡らしている。口唇部には輪状縄文により文様を描出し、胴部にはLRの早期縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 針状鉱物 にぶい褐色 普通	P1239 5%
18	深鉢 縄文土器	B〔5.0〕	口縁部片。口縁部は直立する。口唇部は肥厚し、口唇部の断面形は角筒状を呈する。口唇部には隆帯により文様を描出し、内・外面ともよく磨滅されている。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 良好	T P1161 5%
19	深鉢 縄文土器	D〔6.3〕	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部外面はわずかに肥厚し、RLの早期縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1162 5%

図版番号	器種	計測値(cm)	形状及び文様の特徴	胎土・色調・装成	備考
20	深鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。口縁部は外傾する。口唇部にキヤミを施し、口唇部直下に斜状波線文を施している。LRの単節縄文を縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色 普通	T P1163 3%
21	深鉢 縄文土器	B (12.0)	胴部片。胴部はわずかに固きながら内傾する。波線で文様を描出している。染文はLRの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P1164 5%

図版番号	器種	計測値			重量(g)	石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
22	打製石斧	16.3	4.4	2.4	211.2	凝灰片岩	割片を素材にしている。両面加工。	Q1010 P L 46
23	磨製石斧	11.8	5.7	1.0	109.5	粘板岩	扁平な塊を素材にしている。刃部の一部を研削。	Q1011

第578号土坑 (第408・409図)

位置 調査1区の南西部, C45f区。

重複関係 第1号堀に掘り込まれていることから本跡が古く、第572号土坑を掘り込んでいることから本跡が新しい。

規模と平面形 本跡は第1号堀に掘り込まれているため、長径2.90m、短径が推定で2.46mの楕円形で、深さは32cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 ほほ平坦である。

ピット 5か所が中央部から北東壁際にかけて検出された。P1は北東壁際に位置し、長径60cm、短径48cmの楕円形で、深さ56cmである。P2はほぼ中央部に位置し、長径36cm、短径30cmの楕円形で、深さ42cmである。P3は北壁寄りに位置し、径26cmほどの円形で、深さ16cmである。P4は北東壁寄りに位置し、長径20cm、短径17cmの楕円形で、深さ15cmである。P5はほぼ中央部に位置し、長径27cm、短径22cmの楕円形で、深さ14cmである。

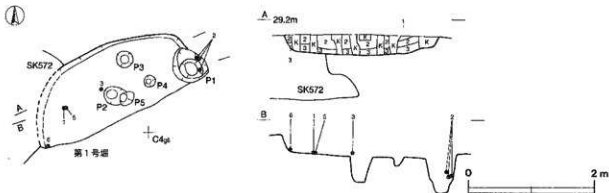
覆土 3層に分層される。レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

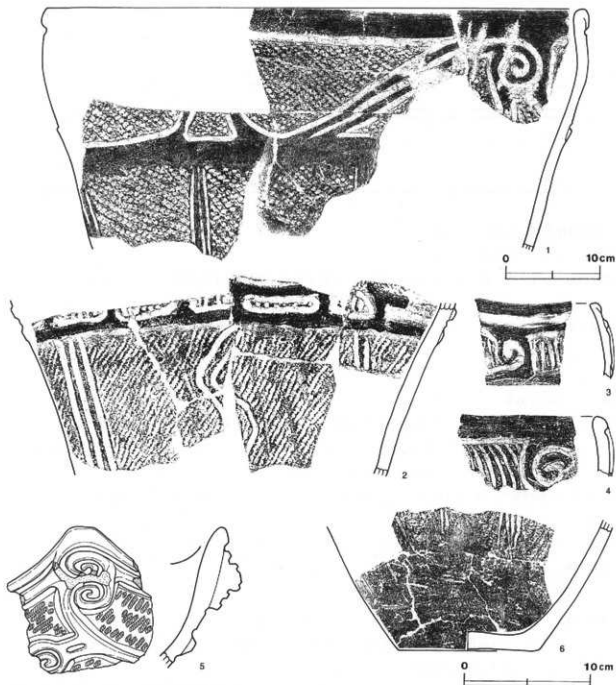
- 1 黒褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片29点が出土している。そのうち縄文土器6点を抽出・図示した。1は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、5は波状I線を呈する深鉢の口縁部片、6は深鉢の胴部から底部にかけての破片で、底面から出土している。3は深鉢の口縁部片で、覆土下層から出土している。2は深鉢の口縁部付近から胴部にかけての破片で、P1の覆土から出土している。4は深鉢の口縁部片で、覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ式期)と考えられる。



第408図 第578号土坑実測図



第409図 第578号土坑出土遺物実測図

第578号土坑出土遺物観察表 (第409図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A [56.8] B (25.9)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾し、口縁部はわずかに内彎する。口唇部直下及び口縁部と胴部の境に隆帯を高め、2本一組の隆帯により文様を構成している。胴部は3条一組の沈線を下下させ、懸垂文間は磨り消している。地文はL R Lの複筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 灰褐色 普通	P1243 15%
2	深鉢 縄文土器	B (13.9)	胴部片。胴部は外傾する。口縁部と胴部の境に隆帯を高め、胴部には3条一組の沈線文と2条一組の波状の沈線文を下下させ、3条一組の沈線による懸垂文間は磨り消している。地文はR Lの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1244 15%

図表番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	泥土・色調・施成	備考
3	深鉢 縄文土器	B (6.0)	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部には沈痾が沿う隆帯により褐色文を施している。地文は沈痾文で、縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	TF1165 5% 内面に炭化持付着
4	深鉢 縄文土器	B (4.8)	口縁部片。口縁部は内彎する。口縁部には沈痾が沿う隆帯により褐色文を施している。地文は沈痾文で、縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 灰褐色 普通	TF1166 5%
5	深鉢 縄文土器	B (11.7)	波状口縁を有する口縁部片。口縁部は開きながら内彎する。波頂部直下に頸巻文を有する突起を備し、口縁部には隆帯により文様を突出している。地文はLRの早期縄文で、横方向に施している。	灰石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1245 5%
6	浅鉢 縄文土器	B (10.4) C 11.2	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は4条一組の沈痾を帯下りさせ、頸巻文は磨り消している。地文はLRの早期縄文で、縦方向に施している。	灰石・石英・雲母 灰褐色 普通	P1246 10%

第582号土坑 (第410・411岡)

位置 調査1区の南東部、C5c01K。

重複関係 本跡は第7号溝と第599号土坑に掘り込まれていることから本跡が古い。

規模と平面形 長径1.86m、短径1.70mのほぼ円形で、深さは90cmである。

壁 ほぼ直立する。

底 平坦である。

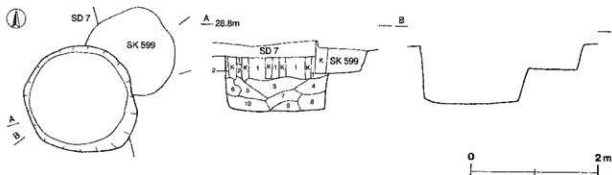
覆土 10層に分層され、ロームブロックを多く含み、不規則な堆積状況を呈することから、人為堆積と考えられる。

土層解説

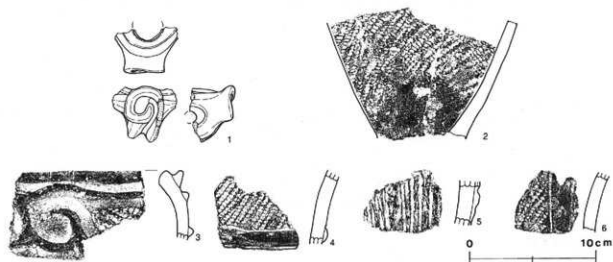
- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック少許
- 3 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭沼バミス粒子少許、炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭沼バミス粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック多量、ローム中ブロック・ローム粒子中量、炭沼バミス粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭沼バミス粒子少量、ローム中ブロック微量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭沼バミス粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量、炭沼バミス粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量
- 10 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、ローム大ブロック微量

遺物 縄文土器片71点、打製石斧1点が出土している。そのうち縄文土器片6点を抽出・図示した。1は深鉢の把手部片、2は深鉢の胴部から底部付近にかけての破片、3は深鉢の口縁部片、4は深鉢の頸部片、5・6は深鉢の胴部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 本跡の時期は、出土土器から中期後葉(加曾利Ⅱ式期)と考えられる。



第410図 第582号土坑実測図



第411図 第582号土坑出土遺物実測図

第582号土坑出土遺物観察表（第411図）

図取番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (4.2)	把手部片。隆帯と沈線により渦巻文を施している。	長石・石英 にふい褐色 普通	P1247 3%
2	深鉢 縄文土器	B (9.4)	胴部から底部付近にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。 R.Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英 にふい褐色 普通	P1248 10%
3	深鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。口縁部は内彎する。沈線に沿う隆帯により渦巻文を施している。地文はL.Rの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	T P1167 5%
4	深鉢 縄文土器	B (5.9)	頸部片。頸部は外傾する。頸部と胴部の境に隆帯を巡らし、R.Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にふい褐色 普通	T P1168 5%
5	深鉢 縄文土器	B (5.6)	胴部片。胴部はわずかに外傾する。押圧文を有する隆帯を垂下させ、条線文を縦方向に施している。	長石・石英 暗褐色 普通	T P1170 5%
6	深鉢 縄文土器	B (5.1)	胴部片。胴部はわずかに外反する。沈線による無文文間を磨り消している。R.Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	T P1169 5%

第590号土坑（第412図）

位置 調査1区の中央部、B 5j1区。

重複関係 本跡と第424号土坑は重複しているが、新旧関係は不明である。

規模と平面形 平面形は長径1.66m、短径1.43mの楕円形で、深さは38cmである。

壁 外傾して立ち上がる。

底 平坦である。

ピット 2か所。P1は東壁際に位置し、長径52cm、短径45cmの楕円形で、深さ41cmである。P2は南壁際に位置し、長径44cm、短径40cmのほぼ円形で、深さ38cmである。

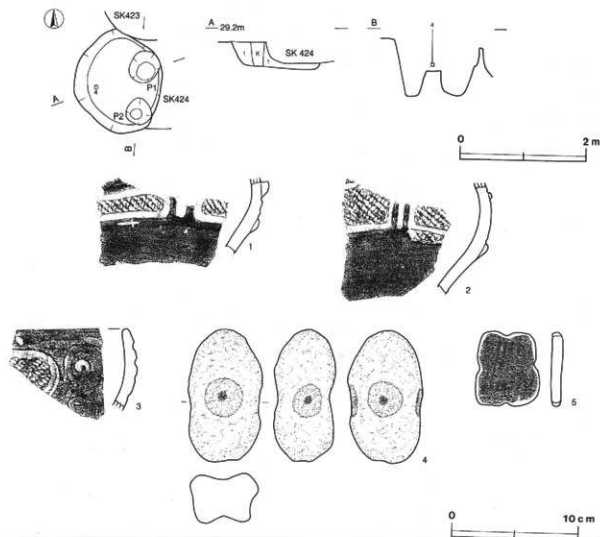
覆土 1層で、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色。ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片18点, 土器片鏃1点, 凹石1点が出土している。そのうち縄文土器片3点, 土器片鏃1点, 凹石1点を抽出・図示した。1・2は深鉢の口縁部付近の破片, 3は深鉢の口縁部片, 5は土器片鏃で, いずれも覆土から出土している。4は凹石で, 覆土下層から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



第412図 第590号土坑・出土遺物実測図

第590号土坑出土遺物観察表 (第412図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	B (6.0)	口縁部付近から頸部にかけての破片。頸部は外傾し, 口縁部は内彎する。口縁部は沈線に沿う2本一組の隆帯により文様を抽出している。地文はR.Lの半縞縄文で, 横方向に施している。頸部は無文で, よく研磨している。	長石・石英・雲母 暗赤褐色 良好	TP1172 5%
2	深鉢 縄文土器	B (9.0)	口縁部付近から頸部にかけての破片。頸部は外傾し, 口縁部は内彎する。口縁部は沈線に沿う2本一組の隆帯により文様を抽出している。地文はR.Lの半縞縄文で, 横方向に施している。頸部は無文で, よく研磨している。	長石・石英・雲母 に古い褐色 良好	TP1171 5% TP1172と同一個体
3	深鉢 縄文土器	B (6.4)	口縁部片。口縁部は内彎する。隆帯は剥落しているが, 沈線に沿う隆帯により洪帯文を施している。地文はR.Lの半縞縄文で, 横方向に施している。	長石・石英 灰褐色 普通	TP1173 5%

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
4	凹石	10.1	5.9	4.8	290.7	安山岩	自然礫を素材としている。4面に凹みがある。	Q1012
図版番号	器種	計測値				材質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
5	土器片類	5.9	5.1	1.0	39.6	土製	4か所に挟りがある。	D P 1002

第600号土坑 (第413・414図)

位置 調査1区の南西部, C 4 e6区。

規模と平面形 長径1.92m, 短径1.80mのほぼ円形で, 深さは34cmである。

壁 ほぼ直立する。

底 平坦である。

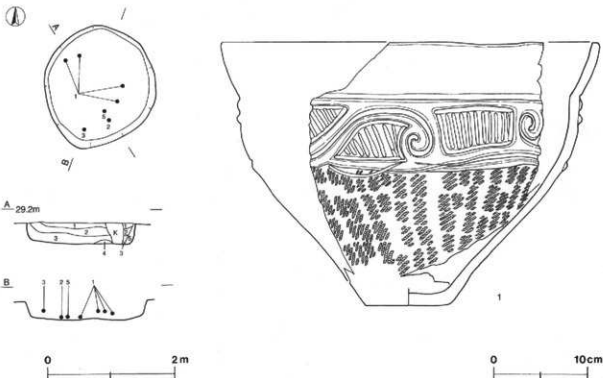
覆土 5層に分層される。レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

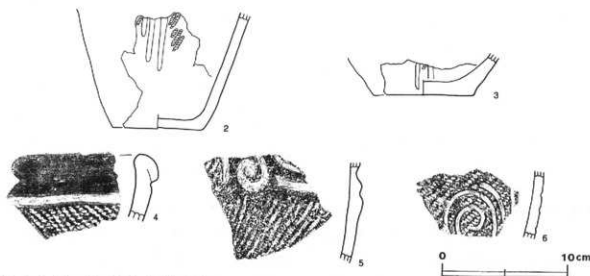
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム中ブロック・炭化物・炭化粒子微量
- 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック・ローム小ブロック中量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片93点, 凹石片1点が出土している。そのうち縄文土器6点を抽出・図示した。1は鉢の口縁部から底部にかけての破片, 2・3は深鉢の胴部から底部にかけての破片, 5は深鉢の口縁部付近の破片で, いずれも覆土下層から出土している。4は深鉢の口縁部片, 6は深鉢の胴部片で, いずれも覆土から出土している。

所見 本跡の時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利EⅡ時期)と考えられる。



第413図 第600号土坑・出土遺物実測図



第414図 第600号土坑出土遺物実測図

第600号土坑出土遺物観察表 (第413・414図)

図版番号	器種	寸測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	鉢 縄文土器	A [40.0] B 28.0 C 9.0	口縁部から底部にかけての破片。胴部は開きながら内斡して立ち上がり、口縁部は外傾する。口縁部は無文で、研磨している。胴上部は沈線に沿う2本一組の隆帯により端部が渦巻文となる文様を施し、区画文内に縦方向の沈線を連続させて充填している。胴部にはR Lの単筋縄文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 1250 40% P L 38
2	深鉢 縄文土器	B (9.2) C [7.0]	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施し、3条一組の沈線による懸垂文間を磨り消している。	長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 1253 10%
3	深鉢 縄文土器	B (3.0) C [8.0]	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施し、2条一組の沈線を垂下させている。	長石・石英 明赤褐色 普通	P 1252 10%
4	深鉢 縄文土器	B (5.3)	口縁部片。口縁部はわずかに内斡する。沈線に沿う隆帯により文様を描出している。地文はL Rの単筋縄文で、縦方向に施している。	雑粒・長石・石英 褐色 普通	T P 1174 5%
5	深鉢 縄文土器	B (8.0)	口縁部付近の破片。口縁部はほぼ直立する。口縁部には沈線に沿う隆帯により渦巻文を施している。地文はR Lの単筋縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P 1175 5%
6	深鉢 縄文土器	B (5.4)	胴部片。胴部は直立する。地文はR Lの単筋縄文を縦方向に施し、沈線による渦巻文を施している。	長石・石英・雲母 にぶい褐色 普通	T P 1176 5%

第601号土坑 (第415～419図)

位置 調査1区の南部，C 4 j0区。

重複関係 第602号土坑に掘り込まれていることから本跡が古い。

規模と平面形 開口部は長径2.02m，短径1.74mの楕円形，底面は長径2.26m，短径1.92mの楕円形で，深さは100cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 はほぼ平坦である。

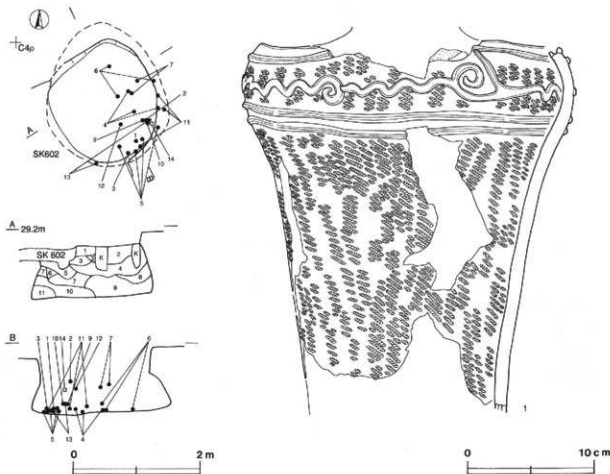
覆土 11層に分層され，第7～11層はロームブロックを多く含むこと，多量の遺物が覆土下層から中層にかけて廃棄されたように出土していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

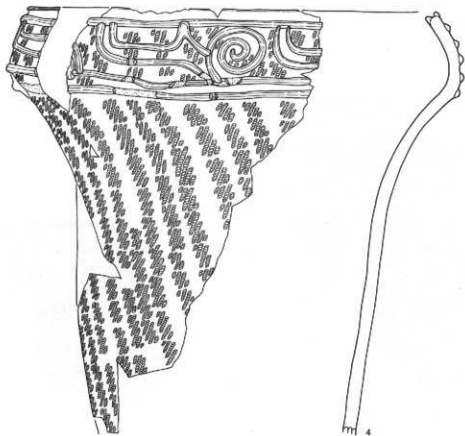
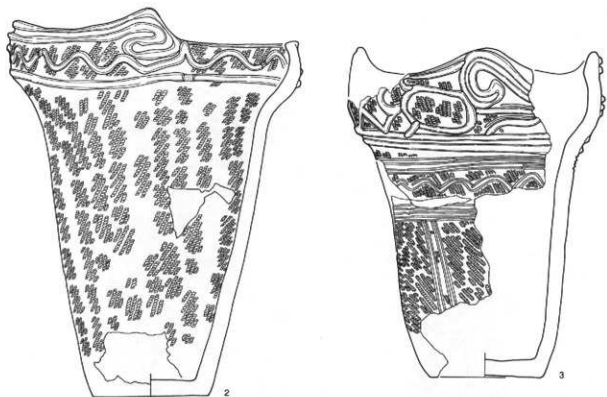
- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・澱沼バミス粒子少量、ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック・ローム小ブロック・炭化物・炭化粒子・澱沼バミス粒子微量
- 6 暗赤褐色 焼土粒子中量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子少量、ローム粒子・炭化物微量
- 7 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 9 褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土中ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 10 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量、ローム大ブロック・ローム小ブロック微量
- 11 褐色 ローム大ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・ローム小ブロック微量

遺物 縄文土器片128点、凹石1点、石鏃1点が、主に南東壁寄りの覆土下層から中層にかけて廃棄されたような状態で出土している。そのうち縄文土器片13点、凹石1点、石鏃1点を抽出・図示した。1は底部が欠損する深鉢、3～6は深鉢の口縁部から底部付近にかけての破片、9・11は深鉢の胴部から底部にかけての破片、10は浅鉢の口縁部片、13は底部が欠損する浅鉢で、いずれも覆土下層から出土している。2は口縁部の一部が欠損する深鉢、7は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、12は深鉢の胴部から底部にかけての破片、14は凹石で、いずれも覆土中層から出土している。8は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、15は石鏃で、いずれも覆土から出土している。

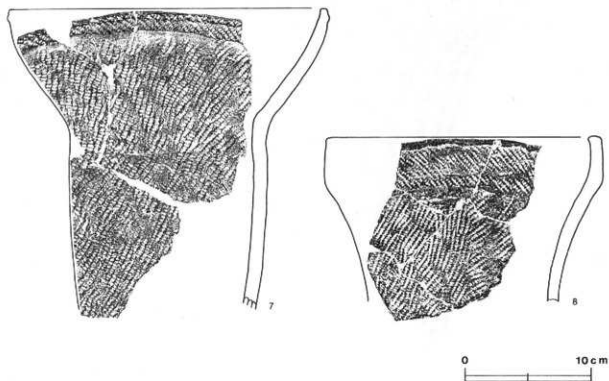
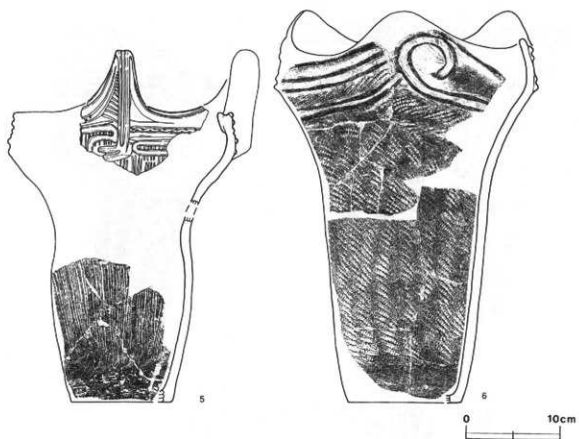
所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利E I式期)と考えられる。



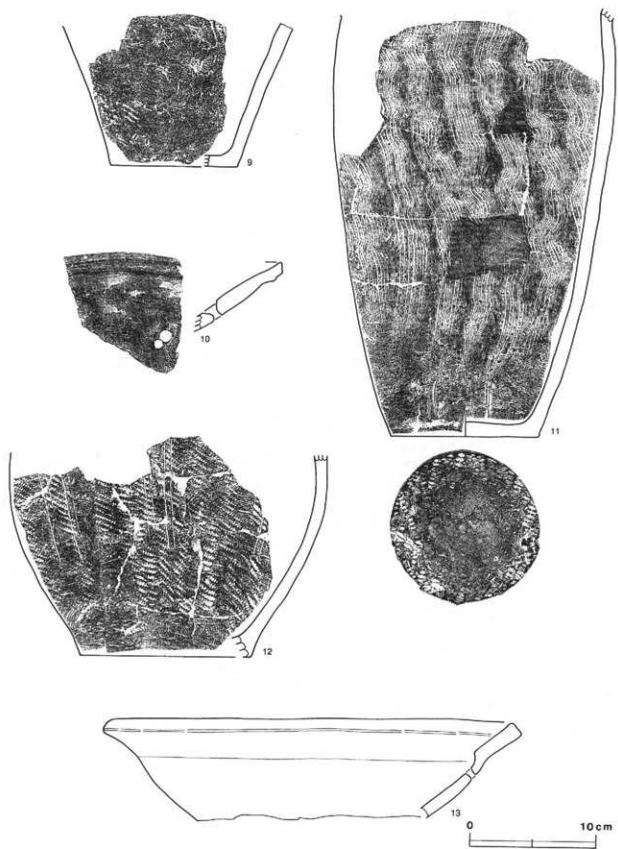
第415図 第601号土坑・出土遺物実測図



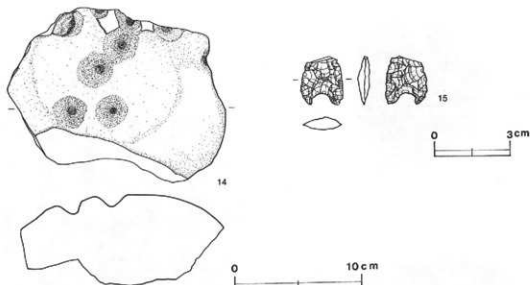
第416图 第601号土坑出土遗物实测图(1)



第417图 第601号土坑出土遗物实测图(2)



第418图 第601号土坑出土物实测图(3)



第419図 第601号土坑出土遺物実測図(4)

第601号土坑出土遺物観察表(第415~419図)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	深鉢 縄文土器	A 23.4 B (29.5)	把手及び胴部から底部にかけて欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。口唇部には大形の把手を有していた直線がある。口唇部直下と頸部の境に細い隆帯を巡らし、口縁部を区画している。口縁部は細い隆帯により波状文を巡らし、欠損する把手部直下にある波状文の先端部は渦巻文となる。地文はLRの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい赤褐色(下半) 普通	P1255 70% P L 38
2	深鉢 縄文土器	A 21.4 B 30.7 C 9.1	口縁部一部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。口縁部の形態は、欠損しているため2単位の小波状を呈するのかわかりが不明である。口唇部直下と頸部の境に細い隆帯を巡らし、口縁部を区画している。波頂部直下は細い隆帯により波手状となり、口縁部は隆帯により波状文を巡らしている。地文はRLの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 良好	P1254 80% P L 38
3	深鉢 縄文土器	A [18.2] B 26.0 C [8.8]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下と頸部の境に細い隆帯を巡らし、口縁部を区画している。口縁部は波頂部直下に2本一組の隆帯により渦巻文を施し、細い隆帯により文様を抽出している。胴部には半截竹管により波状の平行沈線文を施し、頸部には半截竹管による平行沈線文を垂下させている。地文はLRの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 暗赤褐色 普通	P1258 50% P L 38
4	深鉢 縄文土器	A [32.2] B (34.5)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。口唇部直下と頸部の境に細い隆帯を巡らし、口縁部を区画している。口縁部は細い隆帯により波状文とクラク文を施している。地文はRLの単節縄文で、縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1256 40% P L 38
5	深鉢 縄文土器	A [22.0] B (37.2) C [10.6]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。山形状の波状口縁を呈し、波頂部から背に沈線文を有する隆帯を垂下させている。口唇部直下には交互刺突による連続口の字状文を巡らし、口縁部には細い隆帯により文様を抽出している。地文はクシ状工具による条縄文で、縦方向に施している。	長石・石英 黒褐色(上半) にぶい褐色(下半) 普通	P1257 40%
6	深鉢 縄文土器	A [24.8] B (40.8) C [12.0]	口縁部から底部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。3単位の波状口縁と推定される。口縁部は波頂部直下に背に沈線文を有する隆帯により渦巻文を施し、その隆帯は隣接する波頂部直下の渦巻文と連結していることが推定される。地文はLRの単節縄文で、口縁部は横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P1259 30%
7	深鉢 縄文土器	A [24.6] B (23.8)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は直線的に立ち上がり、頸部で脱折して、口縁部は外傾する。RLの単節縄文を、口唇部外面は横方向に、それ以外は縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P1260 20%

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色美・焼成		備考
8	深鉢 縄文土器	A [21.0] B [13.0]	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は直立する。R Lの単筋縄文を、口縁部は縦方向に、胴部は縦方向に施している。	長石・石英・斜状鉱物 に多い褐色 良好	P 1261 20%	
9	深鉢 縄文土器	B [11.3] C [10.0]	胴部から底部にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がる。R Lの単筋縄文をまばらに横方向に施している。	長石・石英・雲母 明赤褐色 良好	P 1264 10%	
10	浅鉢 縄文土器	B (5.5)	口縁部片。口縁部は縦やかに外傾する。口縁部内面に稜を有する。無文。内・外面はよく研磨されている。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	T P 1177 5% 補修孔あり	
11	深鉢 縄文土器	B (33.9) C 11.7	口縁部・胴部・胴部の一帯欠損。胴部は直線的に立ち上がる。タシ状工具による波状文を縦方向に施している。	長石・石英・雲母 に多い褐色 良好	P 1263 60% 底部に割欠痕	
12	深鉢 縄文土器	B [16.0] C [13.4]	胴部から底部にかけての破片。胴部は開きながら内傾して立ち上がる。地文としてR Lの単筋縄文を縦方向に施し、半截片管による平行波状文を彫華させている。	長石・石英・雲母 に多い赤褐色 普通	P 1262 15%	
13	浅鉢 縄文土器	A 31.6 B (8.1)	底部欠損。胴部は縦やかに外傾し、口縁部に至る。口縁部内面に稜を有する。無文。内・外面はよく研磨されている。	長石・石英・雲母 に多い褐色 普通	P 1265 80% P L 38 補修孔あり	

図版番号	器種	計測値				石質	特徴	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
14	凹石	(13.6)	(17.2)	(7.1)	(2058.3)	砂	炭を素材。表面に凹みが7か所。	Q 1013
15	石版	(1.9)	1.6	0.5	(1.5)	チャート	先端部欠損。	Q 1014

第602号土坑 (第420図)

位置 調査1区の南部、C 4 j0区。

重複関係 本跡は第601号土坑を掘り込んでいることから、本跡が新しい。

規模と平面形 長径2.30m、短径1.87mの楕円形で、深さは40cmである。

壁 はほぼ直立する。

底 平坦である。

ピット 5か所で、P1は中央部に、P2～5は壁際に位置している。北壁際にもピットの存在が考えられるが、第601号土坑と重複している部分であるため確認できなかった。P1は中央部に位置し、長径29cm、短径24cmの楕円形で、深さ72cmである。P2は東壁際に位置し、長径74cm、短径51cmの楕円形で、深さ67cmである。P3は南東壁際に位置し、長径32cm、短径27cmの楕円形で、深さ11cmである。P4は南西壁際に位置し、長径38cm、短径35cmのほぼ円形で、深さ80cmである。P5は西壁際に位置し、長径95cm、短径78cmのほぼ円形で、深さ64cmである。

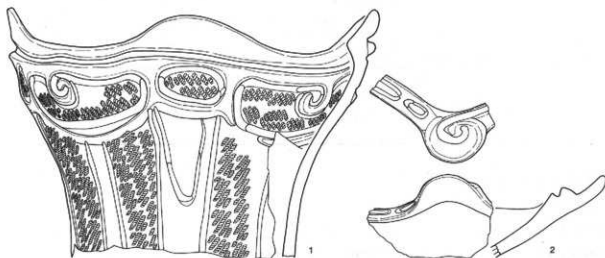
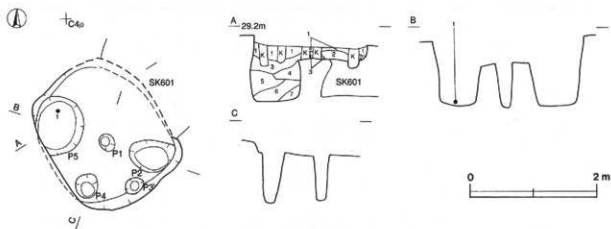
覆土 7層に分層され、第4～7層はP5の覆土である。レンズ状に堆積することから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・炭質パミス粒子少量、ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭十粒子・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中品、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量

遺物 縄文土器片136点が出土している。そのうち縄文土器4点を抽出・図示した。1は胴下半部が欠損する深鉢で、P5の底面から出土している。2は波状口縁を呈する浅鉢の口縁部片、3は深鉢の口縁部片、4は浅鉢の口縁部片で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加曾利EⅢ式期)と考えられる。



第420図 第602号土坑・出土遺物実測図

第602号土坑出土遺物観察表 (第420図)

図版番号	器 種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
1	深鉢 縄文土器	A 28.7 B (19.6)	胴下半部欠損。胴部は外反して立ち上がり、口縁部は開きながら内彎する。4単位の波状口縁を呈する。口縁部には沈線が沿う隆帯により楕円形の区画文を形成し、波状部直下の区画文内には隆帯による渦巻文を施している。胴部には幅広い懸垂文間を繰り返している。地文はL Lの単節縄文で、口縁部には横方向に、胴部には縦方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	P1266 50% P L 39
2	浅鉢 縄文土器	B (6.5)	波状口縁を呈する口縁部片。波頂部には沈線が沿う隆帯により渦巻文を施している。口縁部には沈線による楕円形文を連続させて施している。	長石・石英 灰褐色 良好	P1267 5%
3	深鉢 縄文土器	B (6.9)	口縁部片。口縁部は内彎する。沈線が沿う隆帯により文様を描出している。地文はL Rの単節縄文で、横方向に施している。	長石・石英・雲母 黒褐色 良好	T P 1178 5%

図取番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	浅鉢 縄文土器	B (4.8)	口縁部片。口縁部は緩やかに外傾する。内面に稜を有する。無文。	長石・石英に ぶい褐色 普通	TP1179 5%

第606号土坑 (第421図)

位置 調査1区の南東部, C 6 d1区。

重複関係 本跡は第38号住居跡に掘り込まれていることから, 本跡が古い。

規模と平面形 径1.84mの円形で, 深さは92cmである。

壁 はほぼ直立する。

底 平坦である。

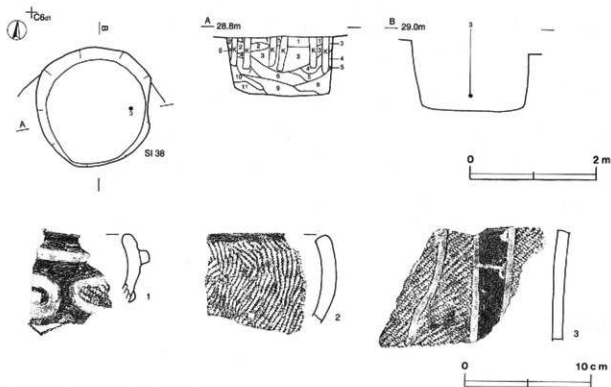
覆土 11層に分層され, レンズ状に堆積していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック・鹿沼パミス粒子微量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, ローム中ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 9 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子・鹿沼パミス粒子微量
- 10 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量, ローム大ブロック・ローム中ブロック少量
- 11 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス粒子少量, 炭化物微量

遺物 縄文土器片73点が出土している。そのうち縄文土器3点を抽出・図示した。3は深鉢の胴部片で, 覆土下層から出土している。1・2は深鉢の口縁部片で, いずれも覆土から出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期後葉(加曾利E II式期)と考えられる。



第421図 第606号土坑・出土遺物実測図

第606号上坑出土遺物観察表 (第421図)

図記番号	器種	計量値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・地味	備考
1	深鉢 縄文土器	B (5.4)	口縁部片。口縁部は内彎する。沈凹に沿う縁帯により文様を指示している。地文はR.Lの単筋縄文で、横方向に施している。	灰石・石英・炭灰 灰褐色 普通	TP1180 5%
2	深鉢 縄文土器	B (7.0)	口縁部片。口縁部は内彎する。R.Lの単筋縄文を、口縁部外周は横方向に、それ以外は縦方向に施している。	灰石・石英・炭灰 灰褐色 普通	TP1181 5%
3	深鉢 縄文土器	B (8.8)	胴部片。胴部はわずかに外反する。垂下する傾度の比周面を盛り溜している。地文はR.Lの単筋縄文で、縦方向に施している。	灰石・石英・炭灰 灰褐色 良好	TP1182 5%

第610号土坑 (第422図)

位置 調査1区の南西部、C 4 g61x。

重複関係 本跡は第1号堀と第9号溝に掘り込まれていることから、本跡が古い。

規模と平面形 第1号堀と第9号溝に掘り込まれているため、開口部は長径が推定で2.16m、短径が推定で1.88mの円形である。底面は長径2.40m、短径が推定で2.14mの楕円形で、深さは58cmである。

壁 フラスコ状を呈する。

底 平坦である。

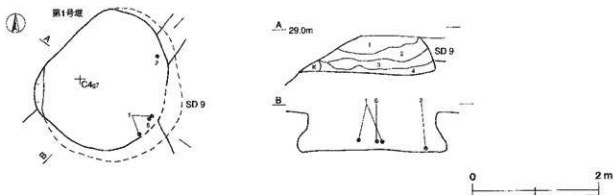
覆土 4層に分層され、レンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

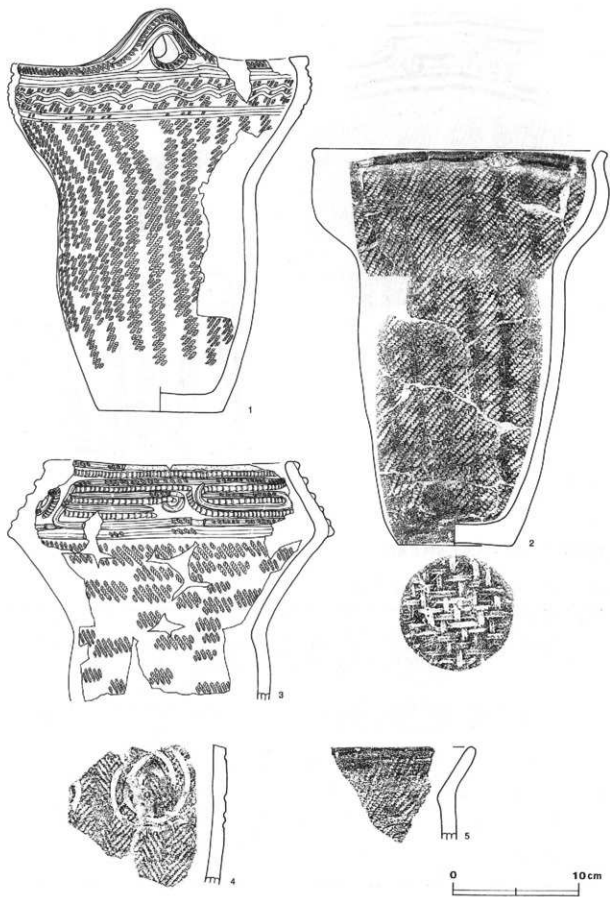
- 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化物・炭化粒少量
- 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子・炭化物・炭化粒子微量
- 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量、ローム中ブロック・炭化粒子・炭化粒子少量
- 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

遺物 縄文土器片66点、磨製石斧1点が出土している。そのうち縄文土器片8点、磨製石斧1点を抽出・図示した。1は環状把手を有する深鉢、2は口縁部及び胴部の一部が欠損する深鉢、6は深鉢の口縁部から底部にかけての破片で、いずれも覆土下層から出土している。3は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片、4は深鉢の胴部片、5は深鉢の口縁部片、7は深鉢の頸部片、8は浅鉢の口縁部付近の破片、9は磨製石斧で、いずれも覆土から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期後葉(加富利E I式期)と考えられる。



第422図 第610号上坑実測図



第423圖 第610号土坑出土遺物実測圖(1)